ISSN 2435-516X

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書４

ゆかり

目 次

「ゆかり」巻頭言 …… 小仲信孝 3

ウィズコロナにおける対面での地域交流活動の展開
—2022年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の概況— …… 土居洋平 4

特別寄稿 埼玉県和光市 跡見学園女子大学の学生に期待すること …… 柴﨑光子 8

特別寄稿 継続こそ力なり！ 跡見学園女子大学との取組で学んだ「共感力」を高める町づくりへ …… 菅野大志 11

特別寄稿 貴学と岩手県盛岡市との包括的な連携・協力による相互の発展に向けて
—「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」からの「地方創生の実現」へ—
…… 岩手県盛岡市市長公室企画調整課玉山総合事務所産業振興課 14

特別寄稿 大塚仲町町会と跡見学園女子大学との合同プロジェクトに参加して …… 田中裕之 17

跡見学園女子大学におけるTJUPの取組みについて
—TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）の2年目の活動を振り返って（活動報告）— …… 中村英昭 19

跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について —コロナ禍3年目の現状分析— …… 新垣夢乃 29

特集 コロナから「回復」傾向下の地域交流活動 …… 跡見学園女子大学地域交流センター 37

未来の健康を作る食育プロジェクト2022 …… 石渡尚子 38

「バナナうんちで元気な子！ ～生活リズムを整えよう～」2022年度食育活動 …… 石渡尚子 41

防災フェスタにおける研究報告 —3年ぶりの対面形式参加から得たもの— …… 赤松瑞枝 43

2022年度 B-ぐる映像制作プロジェクト 活動報告 …… 土居洋平 46

「文京まちたいわ」との協働—「文京まちたいわフェス」の本学での実施 …… 土居洋平 49

菊坂七夕祭り …… 秋谷香菜子・新垣夢乃・磯田みずき・小山凪咲・水村美穂・吉田璃音・松尾映理奈 51

菊坂町会主催「菊坂子ども歴史探検隊」への協力について …… 新垣夢乃・黒木真悠・小山凪咲・弘真生・黛沙也加・渡辺恵未 53

「行こうよ！ 文京浴場♨ ～学生プロジェクト～」 …… 古澤実怜・門戸智和 55

文京区開催の「認知症サポーター養成講座」への3・4年ゼミ生の参加について …… 阿部洋子 57

地域交流活動を通した学生の学び …… 横堀応彦 59

実践ゼミ B-Rサーティワン アイスクリーム株式会社（東京都品川区）とのコラボレーション 新商品企画提案PBL …… 細川 淳 63

秋期公開講座講師「映画祭制作現場から実践コミュ力を磨く」について …… 松浦雅子 67

「トラベルライティングアワード新座賞」への学生参加状況と今後
—「トラベルライティングアワード新座賞」設立の経緯を踏まえて— …… 臺 純子 70

新座市北部第二地区地域福祉推進協議会主 催「遊びの広場プロジェクト」への参加 …… 新垣夢乃 74

新座市障害者地域活動センターふらっととの連携記録 …… 新垣夢乃 76

新座市立児童センター主催「かえっこストリート」へのボランティア参加について …… 新垣夢乃 78

インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究 —アカデミックインターンシップにおける課題解決型学習を通して— …… 赤松瑞枝 80

福祉領域の実践家から学ぶコラボレーション授業 …… 福島里美 82

塩月ゼミによる令和4（2022）年度静岡県東伊豆町地域活性化事業報告
—「サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町オリジナルカクテルレシピ開発事業」を中心に— …… 塩月亮子・有井花織 85

大井沢観光マップ作成プロジェクト実施報告 …… 土居洋平 91

青森・下北＆函館 観光分野での活動視察と交流の旅について …… 磯貝政弘 94

第３回「文の京書道展」開催報告 …… 横田恭三　97

文京区大塚仲町町会と跡見学園女子大学の合同プロジェクト …… 佐野美智子　102

「武蔵国の19校を通じて埼玉を知る」講座開催報告について …… 加美甲多　107

和光市のTJUP加盟を契機にした連携活動の拡大について …… 土居洋平・中村英昭　110

盛岡市との地域連携に基づく調査・研究活動について …… 篠﨑健司　114

菊坂跡見塾所蔵資料調査報告（3）
…… 秋谷香菜子・新垣夢乃・井田百香・磯田みずき・鬼塚未奈・黒木真悠・小嶋美優・
小山凪咲・中井結子・黛沙也加・水村美穂・山岡沙織・山上真由子・渡辺恵未・渡邉菜月　119

菊坂跡見塾文化財防火デー　避難訓練報告 …… 水村美穂・山上真由子・渡邉菜月　127

旧伊勢屋質店パンフレット制作活動
―旧伊勢屋質店パンフレット制作コンペ2022に採用されて― …… 鬼塚未奈・黛沙也加・小椋光希　130

メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）〈紹介日順〉 …… 133

2022年度の地域交流関連活動記録 …… 地域交流センター　134

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程 …… 151

【表紙】
・文京朝顔・ほおずき市に参加した学生たちの集合写真（右上）
・跡見学園女子大学を会場に行われた「文京まちたいわフェス2022」の様子（右下）
・B-ぐる映像撮影の様子（左）

「ゆかり」巻頭言

学長　小仲信孝

東日本大震災（2011年3月）という未曾有の大災害を経験して、日本社会は地域コミュニティに対する認識を改めたのではないだろうか。

それまであたりまえのものとして存在していたがゆえに、普段の生活の中では意識することも少なかった地域社会と人、そして人と人とのつながり。災害からの復興の過程で失ったものの大きさを痛感した人々は多かったはずである。避難先での孤独な生活に耐えきれずに亡くなった方々の報道に接するにつけ、被災を免れた私たちも暮らしの根幹の部分で地域と人に支えられていることを再認識させられた。

2015年、本学が観光コミュニティ学部を設置したのは、そうした社会状況の劇的な変化に応じるものであった。大学として地域社会の再生・活性化、観光による町おこし、人と人とのつながりの創出にどうすれば貢献できるのか、その思いを体現するための本学なりの回答に他ならなかった。

それと同時に、大学全体としても地域交流活動を推進すべく事務局庶務課に地域交流担当が置かれ、翌2016年には地域交流センターとして庶務課の一部門となった。そして2019年に新たな教学組織として独立、今日に至っている。

東日本大震災から10年、2020年に始まったコロナ禍は新たな課題を私たちに突きつけている。地域コミュニティは本当に必要なのか、という問いである。

ビジネスマンが一人、南極やジャングルにパソコンを持ち込んで仕事をしているCMがあった。Web環境さえ整っていれば地球上どこでも仕事はできる、インターネットでつながってさえいれば、一人で生きていけることを誇張するかのようなCMであったが、疑問も感じた。それならば、なぜ仕事仲間とわざわざオンライン飲み会を開く人間がいるのか。

コロナ禍以来、オンライン授業やリモートワークの導入によって、特定の地域社会に縛られずに生きていくことは可能になった。地域社会とのつながりの必要性が薄れたともいえるかもしれない。しかし一方で、リモートの世界に閉じこもることに不安を覚えている人間は増えている。オンライン飲み会はそれを示唆しているのではないか。本来なら、Webに依存しないリアルなコミュニティを求めているのであろう。しかし、コロナ禍ではかつてのように地域社会の人々と交流することはままならない。いずれにせよ、自分の居場所という意味でのコミュニティの必要性はむしろ高まっているとみることができる。

本学における地域交流活動は、地域振興、町おこしなど地域の活性化に寄与することを中心テーマにしてきた。コロナ後を見据えるとき、これまで築いてきた地域とのつながりを維持しつつ、地域の中での多様な居場所（コミュニティ）づくりという新たな課題にも取り組む必要があろう。

ウィズコロナにおける対面での地域交流活動の展開

―2022年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の概況―

地域交流センター長　土居洋平

1．はじめに

2020年２月末頃から具体的な影響を与え始めたコロナ禍も、今年度（2022年度）で、発生から２年以上が経過したことになる。これを執筆している2023年１月現在、既に社会全体でコロナ禍への対応ノウハウも蓄積されてきた。また、次第にコロナ禍の状況に慣れてきたからか、一時的な感染の拡大・収束に一喜一憂するようなことが少なくなってきている。これらを背景に、今年度は本学の地域交流活動も、コロナ禍の状況のなかで以前のような活動をどのように取り戻せるのかという、ウィズコロナにおける対面も含めた活動の展開を模索する局面に入ってきた。

実際、後で紹介するように、キャンパス近隣においても遠隔地においても、これまでの活動が再開されたり、新しい活動が展開されるようになっている。こうした動きを受けて、今回は和光市長、西川町長と、盛岡市役所からご寄稿頂くことができた。また、文京キャンパス近隣の地域の町会からは、大塚仲町町会長にご寄稿を頂くことができた。昨年度より、本学の地域交流活動のカウンターパートとなる方々からご寄稿頂けるように取組み始めたが、今回も多くの方に協力を得ることができた。この場を借りて、ご寄稿頂いた皆様に、厚く御礼を申し上げたい。

もちろん、多くのカウンターパートの方々にご寄稿頂けるようになった背景には、実際の活動が行われるようになったことがある。そこで、本稿ではウィズコロナ下での地域交流活動の復活期において、本学がどのような対応を行い、また、今年度の本学の地域交流活動がどのように展開したかについて、その概況を紹介したい。

2．2022年度のコロナ禍に対する跡見学園女子大学の対応

まず、コロナ禍を受けて今年度、本学がどのような方針を示してきたのかについて説明する。本学では既に2021年度に、コロナ禍を受けて「跡見学園女子大学教室外の活動に関わる指針」（2021年４月12日策定、以下、指針と略す）が定められ、地域交流活動を含めた教室外での活動の方針が示されている。これは、別に定められた授業形態レベル（感染状況に対応した授業手法を定めたもの）に合わせて、どのような活動がどのような手続きを経ることで可能かを示したものである（土居、2022、pp.4-7）。

2022年４月の時点では、授業形態レベルの判断は「1」であり、所定の感染拡大防止策を講じることで、学部や部局の判断で地域交流活動が実施できる形になっていた。また、授業形態レベルが「1」というのは、ゼミなどの一部演習科目を除き、学籍番号の奇数・偶数で学生が隔週登校する形態である。この形態に設定された2021年11月２日以降、半数毎とはいえ学生も登校するようになり、対面で集

まることの意義が再確認されつつあった。地域交流活動についてもオンラインの活用と並行して、対面で集まる活動が再開していった。

2022年度に入ると、特に春学期中、南関東では新型コロナウイルスの感染者数が減少局面に入っていたこともあり、多くのイベントについて対面での実施を前提に企画が検討されるようになる。地域交流センターが直接関わるものでも、5月29日には和光市において「わこらぼフェス」が行われ、屋外の会場に多くの参加者が集い、ステージパフォーマンスや出展を楽しんだ。また、これに向けて、対面とオンラインを駆使した企画会議が行われたが、本学からも教職員・学生が対面で参加している。また、7月23日～24日には「文京朝顔・ほおずき市」が3年振りに実施され、本学からも30名の学生が参加し子ども向けの体験ブースの運営や、祭り全体の運営に関わっている。

ただし、再開された地域イベントの多くは飲食の提供が大きく制限され、また、引き続き飲食を伴う交流会等の実施も控えられ、完全にコロナ禍前の状況に戻っているというわけでもなかった。とはいえ、2021年度迄と異なるのは、夏休み期間中に再び感染者が増加傾向になったものの対面でのイベント実施を制限されることはなく、本学を会場にしたものでも9月4日には「文京まちたいわフェス・2022夏」が開催され、80名前後の参加者が対面でライブパフォーマンス等を楽しんだ。

7月15日には秋学期の授業形態についての方針が示され、新たに授業形態レベル「0.5」が設けられ、秋学期から授業形態レベルを「0.5」に設定することが公表された。これを受け、10月からは一部の大人数科目を除いて殆どの科目が完全対面で実施されている。また、授業形態レベル「0.5」を設けるに伴い、指針の一部を改訂し、遠隔地に行く際の感染対策について実情に対応した緩和を行った。具体的には、それまでは部屋の広さに関わらず学生の同室での宿泊を認めていなかったものを、状況によっては可能にするよう緩和したほか、移動の際の鉄道・バスで隣席に座らないようにするという制限を撤廃するなど、遠隔地への移動・宿泊がしやすい形にした。これらを背景に、2021年度から徐々に再開し始めた遠隔地での活動も、今年度はさらに再開が続いている。筆者自身が関わる事例でも、昨年度はオンラインでの活動により商品開発企画に携わるに留まった山形県西川町との連携活動も、今年度は実際に現地を訪れる活動が再開した。具体的には、新たに町内大井沢の観光マップを作成するプロジェクトが始動し、学生たちは年度内に5回現地を訪問して実際に現地の方々との交流を重ねながらマップ作りの活動を行っている。また、西川町の関係者が本学を訪れる形での交流活動も行い、対面での交流をもとにした活動を展開することができている。

秋学期には、地域交流センターが主催するイベントが、今年度も対面で実施することができた。10月22日には地域交流センター主催シンポジウム「文京歴史探訪～柳町から発掘された文京の歴史～」も文京キャンパスブロッサムホールで開催され、昨年度を超える100名前後の来場者を得ることができた。また、これに合わせてシンポジウムに先立つ一週間（10月17日～22日)、ブロッサムホール前にて発掘成果展「発掘された跡見女学校～明治・大正・昭和の女学校生活～」も開催され、文京区長を含む331名の方に来場頂くことができた。11月13日には同じくブロッサムホールにおいて、文の京ゆかりの文化人顕彰事業「朗読コンテスト」も例年通り実施することができたが、昨年度は会場収容定員を大幅に下回る100名に設定したのに対して、今年度は収容定員の約1/2、200名に設定できることとなった。さらに、11月23日～27日には菊坂跡見塾において、樋口一葉生誕150周年企画展『一葉と花圃～二人の見た「女学生」～』が実施された。これは、地域交流センターの呼びかけで集まった有志団体・跡見「学芸員」in菊坂のメンバーが企画したもので、期間中に348名の来場者を得ることができた。秋学期以降は、学

生もコロナ禍前とほぼ同じ程度大学に通学し、また、コロナ禍前とほぼ同じ形態で授業を受ける形になったこともあり、地域交流活動についてもコロナ禍前に準ずる形で実施することが容易となったのである。

実際、本報告書に掲載されている地域交流活動の数も、2020年度は13件であったのに対して、2021年度は20件に増加したが、2022年度はさらにそれを上回り30件の活動が報告されるに至っている。コロナ禍前は同様の形での活動報告原稿の提供を依頼していなかったこともあり、以前との比較ができないところではあるが、現状、活動の数そのものは、コロナ禍前の状況にかなり近づいている印象である。

3．ウィズコロナにおける地域交流活動の特徴

さて、数の上ではコロナ禍前の数に近づきつつある印象のある地域交流活動であるが、コロナ禍以前と比べると変化したことも多々ある。

1つは、オンライン活用の定着である。上述のとおり、今年度は地域交流活動も対面の活動が戻ってきたところではあるが、引き続きオンラインでの参加も可能にしている活動も多い。上記の活動でも、例えば、わこらぼフェスの企画運営会議は対面参加が基本とはいえ、ズームを用いたハイブリッド形式で実施されており、遠隔地からも会議に参加できるようになっていた。また、筆者との関わりでいうと、B－ぐる映像制作プロジェクトは、撮影や編集会議は対面で実施しているが、その前段階の企画会議はオンラインで実施している。これは、参加学生の学年が多様で1・2年生も3・4年生も含まれるからであり、新座・文京のデュアルキャンパスである本学の場合、どちらかのキャンパスを拠点にしたハイブリッド会議か完全オンライン会議にせざるを得ないという事情もある。ただ、対面が軸になりつつも、状況に応じてオンラインを活用することは、地域交流活動への参加のハードルを下げることにつながっている。実際、「文京まちたいわフェス」の運営では、初参加の学生はハイブリッド会議にオンラインから参加をすることが多いが、そこで雰囲気を掴んだ後に、対面でも参加するようになっている。

2つ目は、対面の活動が再開したとはいえ、飲食を伴う地域イベントは未だ再開を模索中ということである。地域交流センターが直接かかわった屋外での集客イベントであるわこらぼフェスにしても、文京朝顔・ほおずき市にしても、今年度については、屋台等が参加して場内で飲食を行うという形態にはならなかった。コロナ禍前のこうしたイベントの場合、学生が出店をする際は、自分たちの関わる地域の特産品のPRをどのように行い、また、そうした地域の素材を活かしてどのような飲食物を提供するかなどを検討することが多かったが、現時点では、そうした飲食物の提供を前提とした活動は再開していない。ただし、民間の娯楽施設やイベントにおいては、飲食の提供を再開しているものが多い。文京区内でも、ラクーア等では場内で多くのイベントが行われるなかで、キッチンカーなどもコロナ禍前と同様な形で出店している。区内の地域イベントでも、町会等の地域組織や区役所が主催するものではなく商工会等が主導するイベントにおいては、飲食物の提供を行うものも出てきている。以上を踏まえると、来年度は、町会や自治体が関わるイベントにおいても、飲食物の提供等が再開される可能性はあるが、ここ数年で失われたノウハウをどのように復活させるかは、課題になりそうなところである。

なお、これはコロナ禍以前と比べた質的な変化ではないが、今年度は本学の活動に限らず、多くの地域イベントが久々に再開されたこともあり、多くのイベントで想定以上の人が集まっていた。文京朝顔・ほおずき市では、コロナ禍が続いていることから、朝顔とほおずきの仕入れる数量を例年の6割に

設定したところ、初日から以前を超える来場者がきたことから、二日目の午前中の早い時期には朝顔・ほおずきともに完売してしまい、想定外に早い時間にイベントが終了している。これ以外でも、町会主催のお祭りや商工会主導の地域イベントにおいても、当初の想定を超えた来客があり、コロナ禍が続く状況ということもあって想定外の来客のなかで、どのように密な状況を避けるかで苦慮したケースが多々あったようである。これは、イベント再開させる際には大いに留意すべき点であろう。

4．おわりに

本稿を締めるにあたり、最後に、対面での地域交流活動の復活の意義について再確認しておきたい。上記のように、今年度は飲食物の提供がなかなか難しい状況が続いているとはいえ、対面での地域交流活動の多くが再開し、その数はコロナ禍前に近づいてきていた。

筆者自身も、キャンパス付近・遠隔地を問わず対面での活動が再開したことで、改めて対面での活動の意義を感じている。これについては、数多くの指摘があるように、オンラインでの会合は、アイスブレイクを取り入れたりと相当な工夫をしないと、会合の目的の部分以外の会話が偶然生まれるということが少ない。一方で、対面での活動の場合、会合が始まる前後、移動中など様々なところで会合の議題以外の話題で交流が進むことになる。また、遠隔地での活動の場合、移動時間に他愛もない話をすることで、学生同士の交流も進むようである。一昨年度から昨年度の前半は、こうした対面でのコミュニケーションが極端に制限される環境下において、オンラインでどれだけそれを代替できるかが課題であったが、昨年度の後半から今年度については対面での活動が復活するなかで、再び、コロナ禍前のように、対面での活動のなかでのコミュニケーションの促進を考えられるようになった。筆者の関わるところでも、例えば、文京まちたいわの月１度の定例ミーティングでは、会議が正式にはじまる１～２時間前から会場に来る参加者・学生も多く、そこで事前に本題とは限らないコミュニケーションをはかることで、参加者同士の交流が促進され、そのことが本題において新たなアイディアを提供する素地になったりしていた。具体的には、会合前に参加者が得意とすることなどを把握できたことで、イベントのなかでそれを披露する場を提供するといったアイディアが出されたりすることもあった。

一方で、対面での活動の多くが２年間の空白を経て再開したこともあり、殆どの学生が学年を問わず、地域の中で学生として参加しコミュニケーションを図っていくことが初めてという形になってしまった。コロナ禍以前であれば、先輩がそれまでの経験をもとにコミュニケーションの仕方についてアドバイスをしたり、自身のもつ人的なネットワークを後輩に継承していくということがあったが、今年度は、それを一から形成し直す必要があった。

ただし、今年度の活動を乗り越えたことで、今後は再び先輩から後輩へと人的ネットワークやコミュニケーションノウハウは継承できるようになるであろう。それを踏まえると、地域交流活動のあり方がコロナ禍前の形に戻るのは、来年度以降なのかもしれない。地域交流センターとして、そのことを踏まえながら、今後も、本学の地域交流活動が更に展開するよう支援の手法について考えていきたい。

参考文献

・土居洋平、2022、「ウィズコロナにおける地域交流活動の展開－2021年度の跡見学園女子大学の対応から考える」跡見学園女子大学地域交流センター『地域交流センター年次報告書 ゆかり』第３号、跡見学園女子大学地域交流センター

特別寄稿

埼玉県和光市 跡見学園女子大学の学生に期待すること

和光市長 柴﨑光子

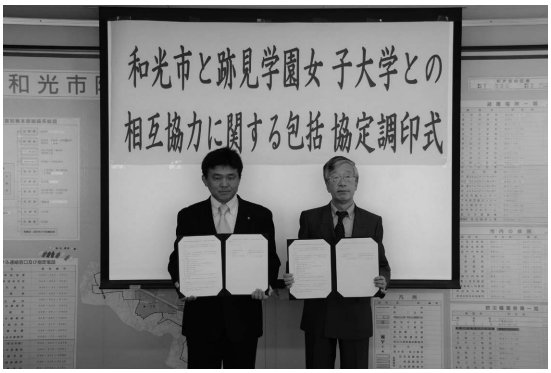
1．和光市の概要

和光市は、埼玉県の南東部にあり、東京都と隣接し、市域は都心から15～20km圏内に位置します。武蔵野の面影を残した豊かな自然に恵まれており、県営和光樹林公園の広大な緑、荒川の雄大な流れ、市内各所で湧き水や緑豊かな斜面林があり、都市生活に彩りを加え、市民の心を潤しています。古くから交通の要衝であり、江戸時代には、川越街道に白子宿がおかれ宿場町として賑わいました。現在では、東武東上線や東京メトロ有楽町線・副都心線、東京外かく環状道路などが走り、通勤、通学、レジャーにと交通アクセスに優れています。

東京の近郊都市として発展をし続け、豊かな自然環境と便利な都市環境をあわせ持つまちとして、現在も大きく躍進を続けています。

2．連携・協力までの経緯

かつて跡見学園の農園が白子地区にあったことをはじめ、貴校とは、インターンシップの学生受入れや審議会学識委員として教員の派遣など、交流を深めてまいりました。平成24年11月22日に正式に包括連携協定を締結することでより、一層の学術研究の発展及び施策の充実のため相互協力をし、相互の活動の交流を図るとともに、人材の育成と地域社会の発展に努めてまいりました。



跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定調印式

協定締結後においては、跡見学園女子大学と和光市の結びつきはさらに強まり、相互が有する資源や人材を活用し、福祉・文化等の各分野において、相互の発展に資するため連携・協力をしています。

3．和光市との連携・協力内容

(1) インターンシップ

インターンシップ実習として、記録のある平成16年から令和４年度までに延べ28名の実習生を受

け入れてきました。市役所の多岐に渡る業務を体験することで、今後の職業選択に活かしてもらっています。

公務員を目指す方にとって、公務員インターンシップは、公務員の仕事を体験できるだけでなく、志望動機の深堀ができることで、今後、採用時の面接に活かせることができます。

公務員を目指す方におかれては、自覚を持ってインターンシップに参加して、経験を活かしてもらいたいと思います。

（2）ロングビュー市LCCとの国際交流

和光市は、平成11年にアメリカ合衆国ワシントン州にある「ロングビュー市」と姉妹都市協定を締結し、平成24年には、跡見学園女子大学と包括協定を締結しました。これに基づき、ロングビュー市内に位置する2年生大学「ローワーコロンビアカレッジ（LCC）」への海外研修が平成26年からスタートしました。これまで海外研修実施の際には、市主催で事前学習会を開催し、ロングビュー市との相互交流の背景や今後の展望等について説明を行ってきました。今年度は、令和5年1月31日に事前学習会を実施予定です。

（3）TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）

貴校が加盟されているTJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）は、東武東上線沿線及び西武池袋沿線の地域の大学・短期大学・自治体及び企業が連携して協働事業を展開していくプラットフォーム（共同の土台）であり、和光市も令和4年4月1日に埼玉県の東武東上線沿線及び西武池袋線沿線地域の大学と自治体、事業者が連携して協働事業を展開し地域の活性化を目的として、包括連携協定を締結し、地域の自立、持続可能な地域社会の実現とその発展に寄与するための事業に参画しています。

（4）みんなのわこらぼまつり

令和4年5月に開催された「みんなのわこらぼまつり」は、和光市に携わる人はもちろん、まちを良くしようという思いがある人なら誰でも参加できる協働のおまつりです。跡見学園女子大学の皆さんには、大学をとおして運営メンバーの募集を行ったところ、二本柱の一つであるわこらぼフェスのプロジェクトメンバーとして7名が応募してくださいました。運営や会場装飾、PR、コンテンツのひとつであるポイパフォーマンスに参画いただき、特にPRでは、SNSでの投稿や、市HPにてワークショップの様子を入稿いただいたり、当日は情報番組のインタビューに応じる等、ご活躍いただきました。今後も、若者の視点を生かし、ぜひ市の協働にご参画いただきたいと思います。

わこらぼまつり全体集合写真

4．学生に期待すること

和光市では、地域コミュニティの活性化に取り組んでいますが、地域の担い手が減少し、人材不足が懸念されています。また、課題として、世代間の繋がりが少ないことが挙げられます。学校と社会の連携について考えると、何かの時に声を掛けるのは、小中学校や市内の高校になり、大学との連携が希薄になっています。大学生は体力や行動力があり、アイデアも豊富なので、一緒にうまくやっていくことが大事だと感じています。わこらぼフェスでは、実際にイベントに参画いただき、地域を盛り上げていただきました。この経験は、市にとっても大学生との連携で地域を盛り上げるモデルケースになったのではと思います。また、大学生にとっても、普段の学生生活では接する機会のないような多種多様な人と一緒に活動することで、人間力を高め、活動に参加した経験が就職活動でも活きてくることが期待できます。学生の皆さんには、様々な地域の活動に参画し、コミュニティの活性化の起爆剤になっていただくことを期待しています。

特別寄稿

継続こそ力なり！ 跡見学園女子大学との取組で学んだ「共感力」を高める町づくりへ

山形県西川町 町長 菅野大志

1．西川町のスタンスの明確化とその成果

山形県西村山郡西川町は、山形県の中央に位置し、面積の９割以上を森林が占め、高齢化率45％超、五千人の町です。1年前に本職に就き、課題の多さに驚いた時期もありましたが、「これまでとは、同じではだめ」前例にとらわれず、小さな町だからこそ、意思決定の速さを武器に、チャレンジする、丁寧につなぐ町として認識されつつあると実感しています。

その経緯を少しご紹介させていただきます。

今や国の補助を得るには、産学官金の連携や広域連携を前提とするアイデア勝負の時代です。このアイデアを考えるには、立場を超えて対話するパートナーが必要です。私は、前職のデジタル田園都市国家構想実現事務局やパラレルワークで勤務している「一社ちいきん会」（地方活性化に熱意ある公務員と金融マンによる2,500名超の有志ネットワーク）からの人脈から情報を収集し、町外のパートナーと日常的に勉強会を開催。

このほか、町のHPや広報誌などで、「関係人口と拡大し、西川ファンとともに、8年後に生産年齢人口拡大を目指す」ことを明確化するとともに、町内外をつなぐ「つなぐ課準備室」を設けたました。町外パートナーにとって町の敷居を低くした結果、「日建設計コンストラクションマネジメント」「東武トップツアーズ」「城南信用金庫」など業界に依らない多くの民間企業との連携協定を結び、協働事業を国のアイデア勝負の交付金を得て取り組むことができました。

また、離れている町外パートナーとは、私も職員も丁寧な対応を心がけ、定期的にメールやオンライン会議で情報を交換したり、相手が何を望んでいるか先回りするように努めています。また、お越しいただいた際には、なるべく多くの時間を共有するため、食事や風呂もともにするなど絆を太くし、町民とのふれあいの場を設けるような「つながり」を作っております。

このような取組を行った結果、町外のパートナーに対して、西川町が丁寧に対応してることが共感を呼び、官民連携に明るい、アーリーアダプタの町である旨をSNSで拡散して頂きました。このようなイメージをもって頂き、町への民間企業等からの提案は1年間で約110件にも上ります。

2．跡見学園女子大学との交流から得た、町の学びと課題

2022年4月に、町長就任した際の西川町は、決して町外との連携に前向きな町ではなかったものの、連携に志ある熱い職員が跡見学園女子大学との連携を事業化し地域のために強力に進めていただきました。跡見学園女子大学の学生との連携は、人口減少が激しく、観光で栄えてきた大井沢地区で、町

地区の方との草刈作業

わらび収穫体験

の担当者、月山朝日観光協会や区長とともに定期的に取り組んでいただきました。町でもよく、跡見学園女子大学の話を聞くようになったと聞いております。

西川町は、2015年12月に本学と包括連携協定を締結した。それ以降、観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 土居洋平先生のゼミナールやニューツーリズム研究会を中心に、地域保全活動や地域づくり、観光振興など様々な連携した事業を行いました。

しかし、コロナ禍のなかで2020年3月以降は学生が現地に行くことが困難となり、2020年度は全ての事業が中止・延期となりました。しかし、そのような状況のなかでも、2021年度にはオンラインでの「西川町お土産開発プロジェクト」が始まり、日本一の生産額をほこる西川町の啓翁桜の香りを活かしたフェイスパックの商品化のご提案を頂きました。

フェイスパック

私が国家公務員だった2022年1月に、月山志津温泉に宿泊した際に美容のため、このパックを使わせていただきました。「西川町に、こんな発想とデザインをする事業者がいるのか？」と感心していたところ、旅館の女将さんから「跡見女子大の学生が面白い提案をもってきてくれた。今、試供品の段階まで来ている」と教えていただきました。

町外のパワーを活用する取組が軌道に乗る前の7月、町民を通じて、跡見女子大の学生から西川町での就職についてご相談がありました。チャンスだと思い、彼女に、町職員、地域おこし協力隊、第三セクターの地域商社、町の宿泊事業者などを説明したほか、町の関係者も寄ってたかって就職のアプローチをいたしました。その結果、彼女は、町外の就職先を断り、わが町の事業者への就職と移住を決断していただきました。

私は、この経験を通じて、彼女の想いに応えようと予算措置も伴う地域おこし協力隊を含めた様々な提案を、町民を巻き込んで行ったことが、彼女に熱意と共感を感じていただき、6mも雪が降り自然

環境が厳しいわが町を選んでいただのかなと感じております。

その経験をして以降、私は、トップセールスの重要性と、町民を巻き込んで、金額ではない、数字に表現することができない情熱や丁寧さを大切にする行政を目指す！という羅針盤を得ることができました。

一方で、課題は明確です。個の能力に頼っていたこともあって、人事異動などで担当者が変わると事業の継続性が失われるという課題も露呈されました。せっかく企画し試供品にまでなったフェイスパックの商品化がなされず、組織としてしっかりスタンスを維持し、担当者が変わっても関係人口・西川ファンとしての跡見女子大学の位置をしっかり守るように維持する努力も行わなければならないと感じています。

西川町のような小さい自治体には、パートナーにおいても、政策・事業についても、「選択と集中」が重要です。跡見女子大学のように、コロナがあっても、オンラインなどで工夫して継続して西川町に関わっていただき、縁を継続しているからこそ、西川町民が大学に対する感謝・共感の念を持ち、現在でも皆様がお越しになることを町民は楽しみに待っている。

土居先生と西川町大井沢区とのやり取りを見ていると、わが町が実践すべきヒントを学ぶとともに、私の方向性に自信をもらうことができました。町としても、組織的な丁寧さが十分でない環境の中、8年にわたって連携頂き、感謝しております。ぜひ、大井沢における跡見女子大学の皆様の活動を町民にお知らせするとともに、お互いにとって、幸せや学びを共有していきましょう。昨年は久しぶりにお越し頂き、ありがとうございました！また、苔玉づくり、草刈、山菜収穫をしましょう。これらの作業は、普段、町民だけで行うと単純な「作業」ですが、皆様が加われば「楽しみ」に変わります！不思議なものです。またのご来町、お待ちしております。

特別寄稿

貴学と岩手県盛岡市との包括的な連携・協力による相互の発展に向けて

―「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」からの「地方創生の実現」へ―

岩手県盛岡市
市長公室企画調整課
玉山総合事務所産業振興課

1．はじめに

盛岡市（以下「本市」という。）は、岩手県の県庁所在地で、人口約30万人の中核市である。また、本市は、約400年以上続く城下町を基盤とした都市構造と豊かな自然が調和した北東北の拠点都市として、これまで地域の発展を担ってきた。

盛岡市位置

しかし近年においては、多くの地方都市と同様、人口減少と高齢化の進展に加え、若者の首都圏等への流出により、地域経済の縮小や都市機能の低下などが懸念されている。こうした課題に的確に対応するため、本市では、地方創生の実現に向けた新たな戦略[(1)]の基本目標を「若者をひきつけ躍動するまち盛岡」として各般の施策に取り組み、2020年度には「年間を通じた待機児童ゼロ」を初めて達成するなど、着実に成果を挙げつつある。

また、本市は、「住みよさランキング2020[(2)] 北海道・北東北編」において1位に選ばれるとともに、ニューヨーク・タイムズ紙「2023年に行くべき52カ所」に、本市がロンドンに次ぐ2番目に紹介されるなど、国内外から高い評価を得ている一方で、年々厳しさを増す地域課題に対応するため、産学官との一層の連携強化を進めている。

本稿では、本市と文京区との友好都市提携を契機として実現した、貴学との「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」のほか、今後、さらなる連携と協力の推進を目指し、2022年3月24日に本市と貴学と締結した「連携・協力に関する包括協定」を中心に、今後への期待を寄稿するものである。

2．アグリイノベーション事業

「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」とは、本市の北部に位置する玉山地域で抱える農業課題を解決し、農畜産物の高付加価値化及び持続可能な農業生産の維持を目指すために、文京区内にキャンパスを有する大学と連携し、諸課題に取り組んでいく産学官連携事業である。事業には貴学を含めた4つの大学が参加しており、各大学で設定したテーマに基づき令和3年度から令和5年度までの

3年間の継続事業として活動している。

貴学では「地域コミュニティデザインの視点から見た、もりおか短角牛の現状と振興策の検討」をテーマに設定し、観光コミュニティ学部と本市で連携して取り組んでいる。もりおか短角牛とは、和牛4品種[3]のうちの1つである日本短角種を本市内で生み育てたものを指す。日本短角種自体は北海道及び東北が主要の産地であり、岩手県は日本一の生産量を誇っている。流通量は和牛全体の中で1%未満と極めて希少である一方で、生産者や飼育頭数の減少による持続的な生産が課題となっている。こうした背景を元に、貴学ではもりおか短角牛の流通構造上で抱える課題を抽出するとともに、地域内外への認知度の向上に向けた活動に取り組んでいる。

活動当初は新型コロナウィルス感染症の影響もあり、本市に訪問しての現地調査が困難な状況であったが、ウェブ会議ツールを活用した生産者とのヒアリングや実態を把握するためのアンケート調査等の分析を行った。情勢に落ち着きがみられた令和3年度末には現地調査を実施し、生産者のほか、卸売業者、皮革事業者等のもりおか短角牛に関わるステークホルダーへのヒアリングにより、現状と課題の把握に注力した。令和4年度は、地元住民の認知度向上となる取組として、生産現場を見学できるモニターツアー、首都圏の住民に向けたPRイベントを岩手県のアンテナショップであるいわて銀河プラザで開催するといった実践的な活動を展開している。

当事業では9月頃と3月頃に参加大学の活動についての報告会を設けている。令和3年度は残念ながらウェブ会議ツールによるオンライン開催となったが、令和4年度は一堂に会した対面での開催をしたところである。跡見生には、本事業を通じて他の大学生との刺激を受けながら研鑽を積んでいただくとともに、本市が抱える農業の諸課題を解決する糸口を共に見出していくことを期待している。

3．むすびに ―包括連携協定締結と今後への期待―

詩人・石川啄木[4]の生誕の地である本市と、終焉の地である文京区が締結した友好都市提携[5]を縁として結ばれた貴学とのパートナーシップを強化するものとして、2022年3月24日に、笠原清志学長と谷藤裕明市長が「跡見学園女子大学と盛岡市との連携・協力に関する包括協定」を取り交わした。協定締結式は、双方の架け橋役となった成澤廣修文京区長を立会人に、盛大に開催された。(写真参照)

締結式の様子
(左から笠原清志学長、谷藤裕明盛岡市長、成澤廣修文京区長)

今後は、貴学と本市が包括的な連携と協力の下、それぞれの資源を相互に活用し、産業の振興など地方創生の実現及び教育・学術研究の推進に向け、事業の具体化を順次進めることとしている。

初年度となる2022年度には、盛岡市役所で跡見生のインターンシップを初めて受け入れるなど、徐々に連携の裾野は広がりを見せている。今後も跡見生には、アグリイノベーション事業やインターン

シップ事業を始め、本市をフィールドとして学業で培った知識や経験を活用し、より良い学びへと繋げてもらいたい。加えて、ソトの跡見生だからこそ見える本市の魅力・課題について貴重な意見を積極的にお寄せいただきたい。

包括連携協定を契機とした良きパートナーとして今後も支え合い、双方の発展に繋がることを大いに期待している。

注

（1）「第2期盛岡市まち・ひと・しごと創生総合戦略」のこと。令和2年度から令和6年度までを計画期間としている。
（2）株式会社東洋経済新報社が、全国すべての市と特別区（千代田区・中央区・港区を除く。）のあわせて812市区を対象に毎年実施している調査。2020年の同関東編では、文京区が1位となっている。
（3）日本固有の肉専用品種であり、「黒毛和種」、「褐毛和種」、「無角和種」、「日本短角種」を指す。
（4）石川啄木：1886年盛岡市玉山地域出身。代表作には、詩集『あこがれ』、歌集『一握の砂』、『悲しき玩具』がある。1912年文京区にて死去（27才）
（5）文京区・盛岡市友好都市提携：石川啄木の生誕・終焉の地という縁から2019年2月21日に締結。毎年「啄木学級・文の京講座」などを開催し、都市間交流を続けている。

特別寄稿

大塚仲町町会と跡見学園女子大学との合同プロジェクトに参加して

大塚仲町町会　会長　田中裕之

はじめに

このプロジェクトに携わったのは佐野先生、新垣先生、土居先生に町会理事会にご出席いただき、「2022年度4月から地域の実態把握と課題の明確化をテーマとした社会調査実習の授業を開講いたします。またゼミ3年の皆さんも町会エリアの住民意識をアンケート調査・インタビュー調査致します。ご協力お願い致します。」とのお話を伺った時からでした。町会主催事業への参加・お手伝いの申し出もいただき、町会の抱えている諸課題への、解決・改善への指針・アドバイスが客観的に指摘される絶好のチャンスと捉え、全面的にご協力させていただくことになりました。

第1回　全体会合　5月1日（日）

プロジェクトメンバー 11名（40～80代、男性6名・女性5名）、学生13名、教員2名

メンバーから「昔の様子」「暮らしの変化」「住みやすさ、住みづらさ」「良いところ、良くないところ」「地域の課題」などの話があり、現状を報告。意見交換。

第2回　全体会合　6月19日（日）

学生さんから「フィールド調査」「仲町の歴史・地図・人口・世帯数」「地域課題に関する新聞記事からの事例集め」の経過報告があり、アンケート調査票作成に向けての意見交換。

町会行事への参加・お手伝い

コロナ禍の中、ここ数年町会行事も殆どが延期または中止を余儀なくされて来ましたが、万全の注意を払い子どもたちの為のイベントを開催することになりました。

・7月17日（日）こども広場　@大塚仲町公園

ヨーヨー釣り、ストラックアウト、ダーツ、お菓子釣り……等を準備。佐野先生、新垣先生、学生さん達多数に参加いただき、受付から各イベントの係員、出口でのお土産配布まで精力的にお手伝いいただき大変助かりました。

・11月13日（日）防災ひろば　@大塚仲町公園

煙ハウス体験、消火器による消火訓練。区職員、消防署員、消防団員、佐野先生、学生さん達にお手伝いいただきました。町会行事として初めての企画であり反省点は多々ありましたが、それらを踏まえて学生さん達にとりましても貴重な体験だったのではなかったでしょうか。今後もイベントの案

ストラックアウト

お菓子釣り

消火器実演

内を差し上げますので、ご参加いただけると嬉しいです。

第3回　全体会合　11月8日（火）

9月に実施されたアンケート調査の暫定結果についての報告が佐野先生からございました。暫定値ながら、予想外の数値、気付かなかった側面の指摘など興味ある結果が示され、大変参考になる内容でした。

今後について

特に大塚仲町での在住期間に関しては、1/3が10年以上、1/3が9年以内、残りの1/3が4年以内という新しい住民の町であり、そのほとんどが今後も長く住み続けたいという思いをお持ちだということが判明しました。ここまで急激に変化していたことに驚く一方で、町会入会者の大多数は古くからの住民であります。この現実をしっかりと認識し、プロジェクトのアンケート・インタビュー調査の結果を踏まえ、今後も住み続けたい、満足のいく地域であり続けるために行動に移さなければなりません。新しい住民の皆さまと手を携え一つ一つ問題を洗い出し、地域のこれからの在り方を探究していきたいと思います。

最後になりましたが、貴重なチャンスをご提供していただいた跡見学園女子大学の関係者各位に改めまして深く感謝申し上げるとともに、今後とも変わらぬご指導ご支援よろしくお願い申し上げます。

跡見学園女子大学におけるTJUPの取組みについて

―TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）の2年目の活動を振り返って（活動報告）―

地域交流課　中村英昭

TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）は、その名のとおり、埼玉県の東武東上線沿線および西武池袋線沿線の地域の大学・短期大学・自治体および企業が連携して協働事業を展開していくプラットフォーム（共通の土台）です。現在、23の自治体会員、20の大学・短期大学が加盟しているほか、地域の企業等が事業者等会員として参加しています。

跡見学園女子大学は、このTJUPに2020年12月に加入し、今年（2022年）の活動は、2年目となりました。TJUPの2年目の活動を2022年1月以降、時間に沿って振り返ります。

【TJUPのWEBサイト】

1．2022年1月から2022年12月までの活動報告

1）私立大学等総合改革支援事業の採択と和光市の包括協定の締結へ向けての準備

①2022年1月から2022年3月まで

○2年目のこの時期は、入試業務、他の関係業務（文京区・盛岡市との包括協定調印式等）のため、予定のTJUPの通常の活動以外は、踏み込んで行うことはなかった。ただ、今後のTJUPの活動の幅を広げることと特定地域との連携を図るため強力な自治体のパートナーが必要であると考え、和光市のTJUPの特定地域の加入促進活動を強力に推し進めた。最終的に和光市が2022年4月1日付でTJUPと包括協定を締結することができた。本学はここに初めて和光市の自治体担当校となることができ、自治体を絡めた直接的でより実質的な活動が行える環境が整った。TJUPの活動を行う上での強力なパートナーを得たと認識している。

○文部科学省「令和3年度私立大学等総合改革支援事業」（タイプ3・プラットフォーム型）に本学の取組が採択されるという連絡が2月17日付にて届いた。これは、TJUPを通して本学の地域活動の取組の成果が実った形となり、非常に喜ばしい出来事であった。

○その他の主な活動

2022年度、TJUP共催公開講座（鎌倉殿の13人）の講師の選定と大まかな日程調整を早々と行う。

○2022年1月から2022年3月までの活動概要

日　付	活動内容	参加者・対応者	学内外・その他
1月27日	TJUP 社会人対象教育プログラム2021 【専門キャリア講座「空気圧技術講習」第1回】	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
1月28日	第28回TJUP運営協議会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須

2月4日	TJUP 社会人対象教育プログラム2021 【専門キャリア講座「空気圧技術講習」第2回】	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
2月11日	TJUP 社会人対象教育プログラム2021 【専門キャリア講座「空気圧技術講習」第3回】	中村課長（地域交流課） （講座進行担当 跡見学園女子大学）	学外・参加必須
2月17日	TJUP 社会人対象教育プログラム2021 【専門キャリア講座「空気圧技術講習」第4回】	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
2月25日	第29回TJUP運営協議会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
3月16日	TJUP和光市との打ち合わせ【対面】	中村課長（地域交流課）	学外
3月25日	第30回TJUP運営協議会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須

2）2022年度（令和4年度）、TJUP活動2年目　新年度の活動開始

②2022年4月から2022年6月まで

○新年度のはじまりのこの時期、私立大学等総合改革支援事業の区切りの月の9月までの活動に関して、今回も補助金に採択されることを念頭に戦略を立てながらの活動を開始した。とはいうものの、2年目であるので、結局は①TJUPの今までの活動の延長線上の活動（SNSワーキンググループや教育連携委員会・運営協議会の活動）、②新たに補助金獲得のために行わなければいけないTJUPの共催企画立案、③新たにTJUP自治体の担当校となった和光市との活動。この3つの内容を軸に活動を始めていった。

○主な活動内容

＊4月20日、学内の組織にて事業推進委員会を実施。【今年度の具体的な活動案、学内の委員の選任等を行う。新たに委員に加わった方への説明も兼ねて実施】

＊私立大学等総合改革支援事業の9月までの期間の活動計画の立案、計画。公開講座とSD・FD講演会の本学実施の企画立案。

＊SNSワーキンググループの活動。（オンラインによる会議　3回実施）【SNSの運用方法の原案を取りまとめる。（第34回　6月の運営協議会にて協議事項にて承認）】

＊和光市との活動【わこらぼまつり】の運営。（5月28日、29日）土居センター長、中村課長参加。【わこらぼまつり】は対面での久しぶりの活動であった。その後徐々に対面での活動が増えていった。

＊小仲学長の学長懇談会のへの参加。（5月27日　城西大学にて、対面での実施）

○2022年4月から2022年6月までの活動概要

日　付	活動内容	参加者・対応者	学内外・その他
4月1日	TJUP 和光市との包括協定 締結【対面】	中村課長（地域交流課）	学外
4月20日	TJUP 事業推進協議会（学内活動）	各事業推進委員	学内・実施必須
4月22日	TJUP 第32回 運営協議会	中村課長（地域交流課）、 新垣センター教員	学外
4月25日	SNSワーキンググループミーテング	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
5月10日	TJUP教育連携委員会	中村課長（地域交流課）、 福島職員（教務課）	学外・参加必須
5月13日	TJUP参加企画 わこらぼフェス 打ち合わせ【対面】	中村課長（地域交流課）	学外

5月16日	TJUP 単位互換教務担当実務者打ち合わせ会議	中村課長（地域交流課）、 綿貫職員（教務課）	学外・参加必須
5月16日	SNSワーキンググループミーテング	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
5月20日	TJUP共同SD「ファシリテーター研修」	齋藤・蛭子職員（就職課）	学外・参加必須
5月20日	〈オンライン〉グループディスカッション講座Let'sみんなでディスカッション！	齋藤・蛭子職員（就職課）	学外・参加必須
5月23日	SNSワーキンググループミーテング	中村課長（地域交流課）、 笹井職員（庶務課）	学外・参加必須
5月27日	TJUP 第6回 全大会【対面】	小仲学長、土居センター長、 中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
5月27日	TJUP 第33回 運営協議会【対面】	中村課長（地域交流課）、 新垣センター教員	学外・参加必須
5月27日	学長 懇親会（城西大学）【対面】	小仲学長	学外
5月28日	TJUP参加企画 わこらぼフェス 前日リハーサル 打ち合わせ【対面】	土居センター長、 中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
5月29日	TJUP参加企画 わこらぼフェス 参加【対面】	土居センター長、 中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
6月4日	TJUP 第4回業界セミナー「オンライン合同企業説明会」	鈴木主任（就職課） （スタッフとして参加）	学外・参加必須
6月4日	合同オンライン入試説明会	木川課長代理（入試課） （スタッフとして参加）	学外・参加必須
6月5日	TJUP「埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学・TJUP共催『親子野球体験イベント』」（十文字学園女子）【対面】	中村課長（地域交流課） （スタッフとして参加）	学外・参加必須
6月9日	TJUP HPグループミーテング	中村課長（地域交流課）、 笹井・房前職員（庶務課）	学外・参加必須
6月17日	TJUP『第5回業界セミナー「オンライン合同企業説明会」』	今村課長（就職課）	学外・参加必須
6月18日	TJUP「県西部大学連携リレー公開講座リレー公開講座（東邦音楽大学）【対面】」	渡部職員（地域・国際交流課） （スタッフとして参加）	学外
6月22日	TJUP広報誌グループ打ち合わせ	加藤・池田職員（入試課）	学外
6月24日	TJUP教育連携委員会	中村課長（地域交流課）、 福島・綿貫職員（教務課）	学外・参加必須
6月24日	TJUP 第34回 運営協議会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
6月25日	TJUP「県西部大学連携リレー公開講座リレー公開講座（東京家政大学）【対面】」	新垣センター教員 （スタッフとして参加）	学外

3）2022年度（令和4年度）、活動最盛期

③2022年7月から2022年9月まで

この時期は、私立大学等総合改革支援事業（補助金獲得）を意識する関係で、各大学の活動が集中する時期である。また、今回の私立大学等総合改革支援事業の活動期間が、昨年、一昨年と新型コロナの影響を受け10月から翌年10月までとなっていたところ、今年より新型コロナの影響を受ける前の活動期間（前年の10月から今年の9月末日まで）と本来の活動期間に変更となった。そのため、9月までの活動に関して各大学も積極的に実施、および参加することとなった。その結果、本学も運営責任校となった企画3本を9月同時に実施することとなった。同時に本学が所属する委員会の教育連携委員会での共同運営責任校としての企画も2本実施し、目がまわるような忙しさであった。

〇主な活動内容

＊7月にTJUP事業推進委員会の開催。今年の総合改革支援事業の予想得点を踏まえた活動計画の提示と協力要請。

＊7月21日　今後のTJUPおよび法人化に関する意見交換会（15時から　城西大学）

→　この会は来年度以降の本学のTJUPへのかかわり方について非常に重要な内容であった。この内容は、10月の事業推進委員会で情報を共有した。

＊以下の9月の本学責任校での企画を実施した。

＊9月1日　共同FD・SD　講演会「オンライン教育はコロナ禍後にどのように持ち越せるか」～様々なオンライン授業に関するデータからの検証～

【講師：加藤　大鶴　教授】（7月22日　第35回　運営協議会　協議事項　承認）

＊9月10日　TJUP　文学からみる【鎌倉殿】の時代」（14：00～15：30　跡見学園女子大学）【対面】【講師：加美甲多　准教授】　（5月27日　第33回　運営協議会　協議事項　承認、対面での実施である。）

＊9月26日　共同FD・SD　講演会「小学生から大学生まで、教TJUP「教育現場で対応する摂食障害！」【講師：鈴木真理　特任教授】（7月22日　第35回　運営協議会　協議事項　承認）

＊以下の担当校での企画の参加、補助金に直結する企画にそれぞれ参加した。

＊8月9日　「子どもスポーツ体験教室」

＊8月24日　TJUP　令和4年度　教育連携懇談会（教育連携委員会主催）

＊9月24日　TJUP教育連携市民フォーラム2022～鶴ヶ島市WIN―WN事業【鶴っ子サマースクール】による小学校・中学校と大学双方の教育的効果について」

〇2022年7月から2022年9月までの活動概要

日　付	活動内容	参加者・対応者	学内外・その他
7月2日	TJUP「県西部大学連携リレー公開講座リレー公開講座（駿河台大学）【対面】」	中村課長（地域交流課）（スタッフとして参加）	学外
7月6日	TJUP 事業推進協議会（学内活動）	各事業推進委員	学内・実施必須
7月15日	TJUP「魅力再発見、酒の都埼玉」（13時30分～15時 イオンタウンふじみ野）【対面】	中村課長（地域交流課）（スタッフとして参加）	学外
7月19日	TJUP「「中世の戦いくさ 源平合戦とヨーロッパの戦争の比較から見えてくるもの」（13時～14時 東京電機大学 オンライン）	中村課長（地域交流課）（受講）	学外
7月21日	今後のTJUPおよび法人化に関する意見交換会（15時から城西大学）【対面】	中村課長（地域交流課）	学外
7月22日	TJUP 第35回 運営協議会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
8月9日	TJUP「子どもスポーツ体験教室」（10：00～12：00 東京家政大学 狭山校舎 体育館）【対面】	中村課長（地域交流課）（スタッフとして参加）	学外・参加必須
8月23日	TJUP地域交流委員会共同FD・SD「自然災害時における大学の役割について」オンライン（13：00～15：00 十文字学園女子大学）	中村課長（地域交流課）（受講）	学外

8月24日	TJUP「コロナ禍の学生生活 振り返り！ ピンチをチャンスに！ 座談会2022 ―悩み・工夫・これから…みんなで語り合おう!!―」（14：30～16：40 東京家政大学）【対面】	本学学生1名参加	学外
8月24日	TJUP 令和4年度 教育連携懇談会（教育連携委員会主催）	中村課長（地域交流課）、 福島・綿貫職員（教務課）参加 【本学担当校】	学外・参加必須
8月26日	TJUP　第36回　運営協議会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
8月30日	TJUP　教育連携委員会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
9月1日	TJUP教育連携委員会、共同FD・SD 講演会「オンライン教育はコロナ禍後にどのように持ち越せるか」～様々なオンライン授業に関するデータからの検証～	地域交流課スタッフ 実施（加藤先生） 【本学責任校】	学内・実施必須
9月9日	TJUP「地域医療と歴史文化～地域の医療と看護の目線から郷土の歴史や文化を眺める～」（14時から15時　オンライン　日本医療科学大学）	中村課長（地域交流課）（受講）	学外
9月10日	TJUP 文学からみる【鎌倉殿】の時代」（14：00～15：30 跡見学園女子大学）【対面】	地域交流課スタッフ 実施（加美先生） 【本学責任校】	学外
9月13日	SNSワーキンググループミーテング	中村課長（地域交流課）、 笹井職員（庶務課）	学内・実施必須
9月22日	TJUP　第37回　運営協議会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
9月24日	「TJUP教育連携市民フォーラム2022～鶴ヶ島市WIN-WIN事業【鶴っ子サマースクール】による小学校・中学校と大学双方の教育的効果について」	中村課長（地域交流課） （スタッフとして参加） 【本学担当校】	学内・実施必須
9月26日	TJUP教育連携委員会、共同FD・SD 講演会「小学生から大学生まで、教育現場で対応摂食障害！」	地域交流課スタッフ 実施（鈴木真理先生） 【本学責任校】	学内・実施必須

4）2022年度（令和4年度）、活動のまとめ、来年度の活動に向けて

④2022年10月から2022年12月まで

10月は、私立大学等総合改革支援事業の提出書類の作成。9月に実施した3企画の報告書の作成。そして、事業推進委員会を開催し、来年度の企画の検討を行った。

10月16日に学内で行われた事業推進委員会では、今年度の私立大学等総合改革支援事業の得点と来年度への取組について報告した。今年の私立大学等総合改革支援事業の得点では、補助金獲得が難しい状況となったことは残念であった。ただ、得点獲得のハードルが高くなってしまったので、いたしかたないところであるとも感じている。また、来年度、TJUPが法人化した場合や、他の会員校との共同研究等の問題は、地域交流課だけでは、すぐに対応できない大きな課題であることが事業推進委員の方から指摘された。このことは、今後のTJUPの活動において大きな影響がある事項であるので、TJUPの中でTJUPの法人化の話が本格的になった時点で、どのような方針で活動を行っていくのか大学経営陣に判断して頂くためにも事業推進委員会でも検討を行っていきたい。

そのような中でも、和光市より、TJUP関係での企画についての打診があり、TJUPの共催の企画を計画。本年2月実施のために和光市と協議・調整を行い、12月の運営協議会で活動の承認を得る。

また、TJUPの特定地域の賛助企画（川越レインボーフェスティバル・イオンタウンふじみ野2周年イベントなど）に関しても、来年度のTJUPの活動を少しでもスムーズに活動できるよう、積極的に参加した。

〇主な活動内容

＊10月16日、学内の組織にて事業推進委員会を実施。【今年度の私立大学等総合改革支援事業の得点と来年度への取組について話し合いを行った。】

＊和光市と共同で教育支援講座の企画立案。

＊各TJUPと特定地域の企画に参加。（入試等大学行事を避けて参加）

＊10月1日　川越レインボーフェスティバル。

＊11月5日　TJUP教育連携委員会事業「市民フォーラム」「音楽を楽しもう」。

＊11月19日　イオンタウンふじみ野2周年イベント参加協力（イオンタウンふじみ野）

＊12月26日　TJUP報告会「TJUPランド　学び☆働き☆育み☆ヤバみ～！」

＊参加委員会（教育連携委員会、SNSワーキンググループ）での活動を行う。

〇2022年10月から2022年12月までの活動概要

日　付	活動内容	参加者・対応者	学内外・その他
10月1日	TJUP共催 川越レインボーフェスティバル「場所：カインズスーパーモール川島（埼玉県比企郡川島町）【対面】」	小又主事（地域交流課）	学外
10月19日	TJUP事業推進委員会（学内活動）	各事業推進委員	学内・実施必須
10月21日	第38回運営協議会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
10月21日	第7回 全大会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
11月5日	TJUP教育連携委員会事業「市民フォーラム」「音楽を楽しもう」（城西大学坂戸キャンパス）【対面】	小又主事（地域交流課）、綿貫職員（教務課）	学外・参加必須
11月19日	イオンタウンふじみ野2周年イベント参加協力（イオンタウンふじみ野）【対面】	中村課長（地域交流課）	学外
11月25日	第39回運営協議会	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
12月6日	TJUP教育連携委員会	中村課長（地域交流課）課長、福島職員・綿貫職員（教務課）	学外・参加必須
12月13日	TJUP HPグループミーテング	中村課長（地域交流課）、笹井職員（庶務課）	学外・参加必須
12月16日	第40回TJUP運営協議会	中村課長（地域交流課）（参加必須）	学外・参加必須
12月20日	SNSワーキンググループミーテング	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
12月20日	TJUP共同FD・SD「コロナ禍の今、私たち教職員は学生にどのように寄り添えるか～学生相談室の事例から～」	中村課長（地域交流課）、澁谷課長・吉田職員（学生サポートセンター）	学外
12月21日	SNSワーキンググループミーテング	中村課長（地域交流課）	学外・参加必須
12月23日	2022年度第1回TJUPグランドデザイン検討会について	中村課長（地域交流課）	学外
12月26日	TJUP報告会「TJUPランド 学び☆働き☆育み☆ヤバみ～！」【対面】	中村課長（地域交流課）（教育連携委員会の活動報告を行う。）	学外・参加必須
12月28日	TJUP懇談会（オンライン）	中村課長（地域交流課）	学外

2．本学が運営責任校となったTJUPの活動の報告

1）事業名：和光市「わこらぼフェス2022」

主　　催：和光市（企画部政策課　企画調整担当）
実 施 日 時：2022年5月29日（日）10：00～15：00
実 施 場 所：和光市役所前　市民広場
運営責任校：跡見学園女子大学
運　営　校：城西大学、城西短期大学、東京電機大学、日本医療科学大学、東京家政大学、東邦音楽大学
活 動 概 要：TJUP関係パンフレット類配布
①TJUP会員校のパンフレット配布11校（跡見学園女子大学、十文字学園女子大学、城西・城西短期大学、東邦音楽大学、東京電機大学、東京家政学院大学、女子栄養大学、大東文化大学、文京学院女大学、日本医療科学大学、駿河台大学）
②TJUPちらし配布
③TJUPトートバック【TJUPクイズの質問に答えた方へ配布（48個）】
④その他
＊ステージ上にて3分間PRに参加、PRを行った。
＊77.5LivelyFMのラジオインタビューを受け、数分PRを行った。
＊当日は猛暑であり、コロナ対策とともに猛暑対策も行いながら実施。具体的には、会場内のスタッフ食事スペースは、屋内の1回所のみとして、徹底してコロナ対策を行った。
＊久しぶりのリアルでの催しであり、お祭りであった。来ていただいた方100名以上の方にTJUPのチラシ等配布。当初の目的は達成できた。

2）事業名：TJUP教育連携委員会、共同FD・SD 講演会「大学の授業で、オンライン教育はコロナ禍後にどのように持ち越せるか」～様々なオンライン授業に関するデータからの検証～

講　　師：跡見学園女子大学文学部人文学科教授　加藤大鶴　先生
実施日時：2022年9月1日（木）14：40～16：10
実　　施：オンラインにて実施
参加人数：53名
運営スタッフ：跡見学園女子大学　3名
講座概要：「With コロナ」の世界で、大学の授業も徐々に対面授業が復活する中、我々はオンライン授業の良い面も体験してしまった。ここでは、オンライン授業に対する振り返りを行い、オンライン授業を検証し、オンライン授業のメリットを生かしながら残す方法を検証・検討していく。
報告概要：本講座は新型コロナウィルス感染症拡大の影響等を鑑み、Zoomによるオンライン形式に

て実施した。前半は「ニューノーマルにおける高等教育」や「跡見学園女子大学が経験したコロナ過のオンライン教育及びその特徴」について、後半は「オンライン教育と対面教育のベストミックス」や「『交流』の問題」等について、それぞれ講師の経験並びに文部科学省及び大学における調査結果等のデータを交えてご講演。参加者からは「これまでの授業形態に関わらず、学生の満足度の高い授業になるよう工夫していかなければと思いました。」「オンライン活用の可能性はまだまだ置くが深いと思いました」などといった声が寄せられるとともに、講座アンケート結果にて「参考になった」の回答が100%を記録したことからも、本講座が共同FD・SDとして成功したといえる。

その他アンケート結果より・参考になった点、印象に残った点など：

・オンラインの授業が対面中心になった後にも活用できる話を多々聞くことができた。
・オンラインの授業が良いと考える学生が半数くらいいるということが分かったこと。
・ライブYouTubeなど、オンラインと対面を組み合わせた取り組み。
・オンライン授業（オンデマンド型）の活用により、学習者自身が自由に多様な学びの機会を得られるようになること。
・演習、実習においてもオンライン、リアルタイムで教育効果を高める手法を考える点。
・ニューノーマル時代に向けたオンライン講義のリアルな状況分析と課題抽出のポイントおよび分かりやすさが際立っており、非常に有意義な内容であった。
・「新型コロナウイルス感染症の影響による学生生活における調査結果」に基づいた現況説明や分析が特に参考になった。
・学生のリアルなアンケート結果や文科省の結果など、自身では知りえない情報も共有してくださったことで、大変今後の授業計画の参考になった。
・卒論指導でのオンラインの使い方、思い込みを捨てて学びの多様化を目指す、など対面授業の欠点の改善という視点について特に参考になった。
・オンライン授業が対面授業の問題点に光を当ててしまったというところ。
・対面とオンラインのメリット・デメリット
・オンライン授業の経験を今後どのように活かしていけばよいか考えるうえで参考になった。
・オンラインのため、気軽に参加しやすく資料も見やすかった。

3）事業名：TJUP公開講座「武蔵国の19校を通じて埼玉を知る」

講 座 名：武蔵国の19校を通じて埼玉を知る「文学からみる【鎌倉殿】の時代」
講　　師：跡見学園女子大学文学部人文学科准教授　加美甲多　先生
実施日時：2022年9月10日（土）14：00～15：30
実施場所：跡見学園女子大学　新座キャンパス3号館3156講義室
参加人数：40名（申込者数67名）**対面での実施。**
運営スタッフ：跡見学園女子大学　4名、TJUP会員校（城西大学）1名
概　　要：大河ドラマ「鎌倉殿の13人」（NHK）が放送されているが、大河ドラマとの時代考証及び埼玉にゆかりのある人物の解説。そこに関する文学との関係。文学からみた、今後の大河ドラマの見どころなど、多方面から「【鎌倉殿】の時代」を文学を通して講演して頂いた。

アンケート結果等：

＊年代【10代1名、20代5名、30代1名、50代5名、60代7名、70代13名、80代以上1名】

＊告知【跡見学園女子大学関係から22名、ポスター等から8名、その他3名】

＊満足度【満足29名、やや満足4名】　／　〇講座時間【適切29名、短い4名】

＊講座に関する意見（抜粋）

・内容は充実していたし、面白かったが、如何せん時間が足りないようだった。もし可能であれば、別の機会を設けて講座を開いてもらえれば大変ありがたい。

・今後の大河ドラマがますます楽しみになりました。

・大河ドラマを通じて、鎌倉時代について、いろいろ興味がわき調べています。今回は、更に、文学との関連で学ばせていただきまして、感謝しています。ありがとうございます。

・講義内容のヴォリュームも適切であり、資料も良く準備されていており、90分という限られた時間も上手く使われていたと思う。

4）事業名：TJUP教育連携委員会、教育支援講座「小学生から大学生まで、教育現場で対応する摂食障害！」

講　　師：跡見学園女子大学心理学部特任教授　鈴木眞理　先生

実施日時：2022年9月26日（火）15：30～16：40

実　　施：オンラインにて実施

参加人数：68名

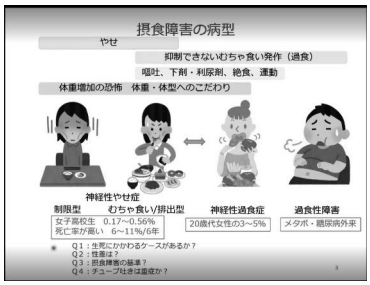
運営スタッフ：跡見学園女子大学　3名

講座概要：摂食障害は、病気としての認知こそ広まっていないものの、近年その病状の深刻さが教育現場で問題になりつつある。本講座は、発症の低年齢化が進む中、症状への理解が深まっていない点や自治体会員の教育機関からの要望が多い点等を考慮し、自治体会員の教育機関、一般市民及び会員校の教職課程履修者等といった幅広い層を対象としたZoomによる教育支援を行うことで、受講者一人ひとりの摂食障害に対する効果的な対応への理解を深めるとともに、症状の早期発見に繋げることを目的とする。

実施概要：本講座は、埼玉県教育振興基本計画・基本理念「豊かな心の育成」「健やかな体の育成」の観点に基づき、多様な層への教育支援に資すべくZoomによるオンライン形式にて実施した。前半は「摂食障害の病型」や「摂食障害でみられる身体の症状」について、後半は「摂食障害に関する学校と医療のより良い連携のための対応指針」や「神経性やせ症の治療の概略及び事例」等について、それぞれ講師の経験並びに摂食障害全国支援センター及び各機関における調査結果等のデータを交えてご講演いただいた。当日は全参加者68名のうち、「TJUP会員校教職員；26名」のほか、「高等学校・中学校・小学校関係者；12名」「学生；14名」「大学（TJUP会員校以外）関係者；3名」など幅広い層からの参加があった。参加者からは、「介入の難しい摂食障害について具体的にお話を聞く機会が持て、大変勉強になりました」「今後の学生指導にあたり、もっと学生の気持ちになって寄り添いながら、様々な人がいるということを理解したうえで、対応していきたいと思いました」などといった声が寄せられるとともに、講座アンケート結果にて「参考になった」の回答が97%を記録したこと

からも、本講座が教育支援講座として成功したといえる。

アンケート結果・参考になった点、印象に残った点など：



・治療への動機付け、回復時の声のかけ方が大変勉強になった。
・骨粗鬆症は若年の頃の食生活などから決まるとは知らなかった。
・原因や対処法がよくわかった。
・摂食障害の子の心理とその子の対応方法についての学びが深まった。
・摂食障害になるメカニズムや対応方法を改めて知ることができ大変参考になった。
・最近、就職相談に来る学生で、家庭の事情などの人間関係が原因で心の問題を抱えている学生が増えているため、どのように対応、接する事が大事なのか参考になった。
・神経性痩せ症を中心とした摂食障害に関する判断基準や具体的な関わり方が分かり易く、今後の学生対応の中で参考となった。
・事例や支援方法など具体的なご説明いただいたので、支援がイメージしやすく、参考になりました。
・在学生にも摂食障害のため就学に支障が出ている学生がおりますが、摂食障害の原因やしくみが理解できました。
・一人の親として、とても勉強になった。
・非常に講座の内容が具体的でわかりやすかった。
・とても勉強になりました。
・先生がとても具体的にお話ししてくださり、イメージもしやすく大変勉強になりました。
・摂食障害のことや、摂食障害を抱えた人との接し方について、とても勉強になりました。
・介入の難しい摂食障害について具体的にお話を聞く機会が持て、大変勉強になりました。

3．今後の展開について

2022年の前期はコロナウィルスの影響があり、TJUPの企画については、感染状況を考慮しオンラインへ切り替える企画、延期とする企画が見受けられたが、今年の後半になってくると徐々に対面での活動が増えてきた。現在の企画はすべて対面実施が基本となりつつある。来年度対面での活動が増えてくると活動自体はタイトになると想定される。

また、TJUPの法人化、そして、私立大学等総合改革支援事業（補助金の獲得）という点では、来年1年間のTJUPの活動は、今後の本学のTJUPとのかかわり方の方向性を決めていくうえでも重要な一年になると予想している。ただ、私立大学等総合改革支援事業の補助金獲得という視点よりも、地域交流の原点に立ち帰り、地域活動を活性化させるという目的を第一に、活動を行っていくことが本来であると感じている。既に地域との関わりを持ちながら教育活動を展開されている教職員、または、これから展開していこうという教職員の方々にTJUPを更に紹介し、先生方とTJUPの活動、学生へ活動の橋渡しを行っていけたらと考えている。『地域、活動する本学の学生・教職員、そして跡見学園女子大学自身が元気になる』そんな活動のお手伝いを来年度も地域交流課として活動できたらと考えています。

跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について

―コロナ禍３年目の現状分析―

新垣夢乃

１．本稿の目的

2019年４月に現在のような教学組織としての地域交流センターが設立した。設立以来、地域交流センターでは年度毎に跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について継続的に学内で全学的な調査を行ってきた。

2019年度の調査では、地域交流センターが設立する以前から、すでに本学では全学的に多様な地域交流活動が行われている実態が確認され、この蓄積をより充実したものとしていくことが地域交流センターの使命であるという分析が示された [金子 2020：14]。

だが、その後のコロナ禍で状況は一変する。2020年度の調査では、跡見学園女子大学で実施または実施が計画されていた約89％の地域交流活動が新型コロナウイルス感染症流行により影響を受けた深刻な実態が示された [新垣 2021：58]。2021年度の調査でも、跡見学園女子大学の地域交流活動が2019年度に比して約60％減少したという新型コロナウイルス感染症流行により影響を受けた深刻な実態が示された [新垣 2022：20]。

本稿で報告する2022年度の調査でも、基本的にはコロナ禍における跡見学園女子大学の地域交流活動の実態を明らかにすることを目的とする。

２．調査の集計結果と分析

今回の調査は、Atomi Information Portalの掲示登録を使用し、掲示登録上で職種が「常勤」となっている跡見学園女子大学全学部に所属する104名の教員を対象に、2022年６月14日～７月31日の期間で「学内の地域交流関連活動に関わる調査」という名称で実施した。回答者は58名（約56%）であった。

（1）地域交流活動一覧と活動地域

今回の調査によって、回答を得られた地域交流活動の件数は42件であり、下記のような活動が実施、または実施計画があることがわかった。

表1：地域交流活動一覧

		活動名称	活動概要と目的	活動時期	活動区分
文京・東京	1	文京区防災フェスタへ出展	フェーズフリーに関してゼミ3年生が行った調査研究結果を発表し、防災に関する啓発を行う。	10月4日～ 12月4日	ゼミ・授業等 正課教育活動
	2	文京区大塚仲町町会プロジェクト	観光コミュニティ学部社会調査士課程の「社会調査実習」(佐野クラス）とコミュニティデザイン学科佐野ゼミ3年、そして文京区大塚仲町町会との合同プロジェクトが、地域交流センターの仲立ちにより、2022年4月にスタート。プロジェクトのテーマは、「地域に暮らす人たちが“住みやすいまちだと実感できる”まちづくり」。今年度は、その第一弾として、地域の現状把握と課題の明確化を図ることを目的に住民意識調査を実施する。	通年	ゼミ・授業等 正課教育活動
	3	3・4年生ゼミ（臨床心理学演習ⅠAおよびⅡA）における文京区開催の「認知症サポーター養成講座」への参加	ゼミでは高齢者の心理、認知症などについて学んでおります。そこで文京区開催の「認知症サポーター養成講座」を高齢あんしん相談センター駒込（駒込地域包括支援センター）の2名の先生に御来講頂き、御高話を頂き、現場の声を聞かせて頂き、より深い知見を得ることを目的と致しました。受講修了証明として「認知症サポーター」カードを発行して頂きました。	6月30日	ゼミ・授業等 正課教育活動
	4	跡見ひきこもり支援事業	文京区ひきこもり支援者等連絡会での議論を受けて、サンカクシャ・青少年健康センター・文京区社会福祉協議会とともに「(仮) 跡見ひきこもり支援事業」を開始した。主に板東ゼミの3・4年生の希望者が参加し、サンカクシャの居場所活動への参加や家庭訪問による支援を模索している。現在は、ゼミで学生への教育・指導を行うともに、サンカクシャのスタッフと学生を交えて支援活動の検討を進めているところである。	2020年8月～	ゼミ・授業等 正課教育活動
	5	実践ゼミ サーティワン・アイスクリーム 新製品提案マーケティングPBL B-R サーティワン・アイスクリーム株式会社(東京都品川区)	新製品提案マーケティングPBL	秋学期	ゼミ・授業等正課 教育活動
	6	未来の健康を作る食育プロジェクト2022	本プロジェクトは、これから先、子どもたちが生涯にわたって健康的な食生活を送ることができるよう、和食の良さを理解してもらうことを目的に活動を進めます。	5月13日～ 2023年3月31日	課外活動 (学科・サークル等)
	7	第3回 文の京書道展	アカデミア受講生19名の作品、本学学生有志の作品25点、有力高等学校生徒の作品4点、本学書道教員・講師4名の作品、合計52点をシビックセンターにて7月に展示。	シビックセンター (ギャラリー展示室) 7月3日～7日 アートウオール 7月7日～27日	課外活動 (学生一般募集あり)
	8	B-ぐる映像制作	文京区コミュニティバスB-ぐるの車内で流れる映像の制作。地域交流センターが募集した学生有志が、3グループに分かれて年間3作品の映像を作成。各作品は、複数の企画からなる。B-ぐる沿線協議会・B-ぐる友の会からの依頼を受けた形での実施。映像制作指導者の手配、取材に関わる実費は友の会が負担。	通年	課外活動 (学生一般募集あり)
	9	文京区居場所プロジェクト	氷川下つゆくさ荘を中心に、文京区内の「居場所」スペースを活用した活動を行う現在、特に補助などはない	通年	課外活動 (学生一般募集あり)
	10	文京まちたいわ	区内のまちづくり団体・関係者が有志で募る文京まちたいわの活動に協力年二回の「文京まちたいわフェス」の運営に協力・出展	通年 (フェスは2月･8月)	課外活動 (学生一般募集あり)
	11	菊坂跡見塾所蔵資料の整理・調査活動	菊坂跡見塾を活用した教育活動。学生たちが文化財や資料の取り扱いを学び、その記録を残すことをメインの目標としている。また、それに止まらず、菊坂跡見塾を活用した地域貢献活動を行うことをめざしている。公益信託大成建設自然・歴史環境基金2020年度助成金を活用している。	通年	課外活動 (学生一般募集あり)

		活動名称	活動概要と目的	活動時期	活動区分
文京・東京	12	菊坂七夕祭り	菊坂跡見塾を活用して、文京区内の保育園と連携した七夕イベントを実施。	7月7日	課外活動 (学生一般募集あり)
	13	菊坂町会主催「菊坂子ども探検隊」への協力参加	文京区菊坂町会が実施する「菊坂子ども探検隊」において、子どもたちへ菊坂跡見塾の歴史や建物などの解説を行う。	8月20日	課外活動 (学生一般募集あり)
	14	行こうよ！ 文京浴場巡 ～学生プロジェクト～	文京浴場組合さんより依頼により立ち上げた企画。大学生・大学と連携して文京区内の浴場や浴場組合の活動について若い世代への認知度向上を連携して行っていく。 文京浴場組合より10万円程度の補助有。	8月～12月	課外活動 (学生一般募集あり)
	15	ひきこもり等支援者連絡会	文京区のひきこもり支援について、文京区教育推進部児童青少年課、文京区教育センター、文京区社会福祉協議会、青少年健康センター、NPO法人サンカクシャ等と定期的な連絡会を開催している。地域の諸団体と、ボランティアの組織化、及び跡見学園女子大学教員が心理専門家として参与することの検討を進めている。サンカクシャのボランティアの組織化に関しては、授業時間を利用してサンカクシャの活動概要説明と共に履修生に呼びかけを行った。さらに、文京区教育センター、青少年健康センター（茗荷谷クラブ）、サンカクシャとは本大学と提携し、大学院（臨床心理学専攻）における学外実習先として、数名の修士生をご指導頂いている。また、将来展望として、ひきこもり青年の居場所活動として跡見学園女子大学心理教育相談所さくらルームを活用することも検討中である。	2019年3月～	教員のみの活動
	16	杉並区学校保健会	杉並区教育委員会の管轄で、学校保健会の講演会の講師	7月～8月	教員のみの活動
	17	講座講師	2022年度前期 江東区森下文化センター講座 「これだけは観たい名作バレエ5選～バレエを楽しむためのエッセンス～」	5月18日、 8月31日	教員のみの活動
	18	葛飾区男女平等等推進審議会委員	学識経験者としての助言		教員のみの活動
	19	港区市街地再開発事業事後評価委員会	港区内で実施された再開発事業の事後評価	2022年4月1日～3月31日	教員のみの活動
	20	年間約15案件程度地域活性化支援事業を応援しています。数が多いのでこのアンケートでは記載しきれません。	全件とも政府、都道府県、自治体からの依頼です。全事業とも学生の観光教育と連携できないか、常に交渉を行っています。	通年	教員のみの活動
新座・埼玉	21	新座市における環境教育に対する協力	新座市の小学生を対象に環境教育を行う「環境教育支援ネットワークきづき」（代表：荻原洋志）が主催する環境教育イベントにマネジメント学部のインターンシップの一環としてい毎年2名程度の学生が参加している。	7月下旬	ゼミ・授業等 正課教育活動
	22	トラベルライティングアワード新座賞2022 への参加	トラベルライティングアワード新座賞は、2018年度から新座市産業観光協会や新座市シティプロモーション課、立教大学、十文字学園女子大学、跡見学園女子大学が連携して、作品募集・審査を行うとともに、各大学から学生運営事務局員が参加し、募集告知、二次審査などの運営を行なう、という活動です。2021年度半ばに、旧村上ゼミの活動の一つとして引継ぎ、学生の作品添削、審査などに加わりました。今年度は、年度初めから、基礎ゼミ学生を対象に作品応募を呼びかけるとともに、安島ゼミ、臺ゼミから各1名ずつの学生運営事務局員が参加しています。	4月から作品募集告知などが始まり、9月末の一次審査、10月の二次審査、12月の最終審査が行われ、2023年1月に表彰式が開催される予定です。	ゼミ・授業等 正課教育活動
	23	インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究	三郷市内にある緑資源の有効活用を目的に、既存の公園を障害の有無にかかわらず子どもや保護者が安全に、そして安心して利用できるように再構築するプロジェクト。	不定期（今年度中に運営委員会があと2回開催される予定）	ゼミ・授業等 正課教育活動

		活動名称	活動概要と目的	活動時期	活動区分
新座・埼玉	24	新座市北部第二地区地域福祉推進協議会主催「遊びの広場プロジェクト」への協力参加	新座市北部第二地区地域福祉推進協議会では、地域のつながりづくりのために子ども向けの「遊びの広場プロジェクト」を定期的に開催している。子どもたちと地域の大人たちを結び、大人同士のネットワークをつくることが活動の目的である。そのプロジェクトに企画担当、運営スタッフとして学生とともに参加している。	通年	課外活動 (学生一般募集あり)
	25	深谷市方言調査	埼玉県北部のエリアを対象とした方言調査。ゼミの学生(希望者)を連れて、現地に赴き、当地生え抜き話者10数名に現地のことばについて質問紙調査を行う。調査成果は報告書として現地に還元する予定。	8月27日、28日	課外活動 (学科・サークル等)
	26	わこらぼフェス	和光市で年1度行われている市民参加型イベント ステージ企画を半年かけて検討し、実施する	1月～5月末	課外活動 (学生一般募集あり)
	27	新座市立児童センター主催「かえっこストリート」への協力参加	新座市立児童センターが主催する「かえっこストリート」へ学生とともに運営スタッフとして参加する。かえっこストリートは、子どもたちが不要になったおもちゃを交換する会で、子どもたちがSDGsや経営思考を学ぶ機会とすることをねらった企画である。	2022年8月7、14、21、26、27、28日	課外活動 (学生一般募集あり)
	28	新座市障害者地域活動センターふらっとの交流	「障害者の自立」「就労」「共に暮らすこと」をめざした取り組みを展開する新座市障害者地域活動センターふらっとにおいて、ふらっとの利用者さんと本学学生がともに農作業を行うことで、作業のお手伝いのみならず、「共に暮らす」地域の一員としてお互いを知るきっかけとする交流活動を実施。	2022年6月15、22日	課外活動 (学生一般募集あり)
	29	新座市社会教育委員	社会教育に関する諸計画を立案。教育委員会の諮問に応じ、これに対して意見を述べる。上記の職務を行うために必要な研究調査を行う。		教員のみの活動
	30	本学主催の秋期公開講座講師	本学主催の秋季公開講座で、1時間半の公開授業を、地域の皆様に向けて実施。「映画祭制作現場から実践コミュ力を磨く」というタイトル。	12月3日	教員のみの活動
	31	三郷市行政不服審査会委員長	学識経験者としての助言	通年	教員のみの活動
	32	彩の国コンソーシアム　公開講座	一般の方を対象に、「川越の街とナレーション」「話のやり取りを聴くことから始める方法」のふたつのテーマで講演。参加者に実際に声を出していただくなど、参加型の講演会で地域のみなさまと交流する。	2022年9月6日	教員のみの活動
	33	三郷市男女共同参画審議会への委員としての参加 (教員のみ)	本学と地域連携協定を結んでいる三郷市の男女共同参画審議会の委員をつとめており、審議会へ委員として石崎が出席している。	審議会の開催は年2回程度	教員のみの活動
その他	34	里親養育支援	里親や養親の養育支援活動として、里親研修講師や里親サロン出席、個別相談を行っている	今年で8年目	教員のみの活動
	35	静岡県東伊豆町地域活性化事業	主に観光の観点から、静岡県東伊豆町地域活性化を目的とした事業を、塩月ゼミの参加希望学生と行う。文献・ネット調査とその発表、現地調査とその報告等を実施する。現地調査代の一部は、年度末に町より補助金が支給される。	2022年6月～2023年3月	ゼミ・授業等 正課教育活動
	36	名前はありません。	今年は、合宿活動誘致促進への高知市の補助金を申請する予定があります。 将来的に、自治体の補助金申請を手伝い、学生も参加できるプロジェクトをつくりだそうかという話は、関係者としています。	隔月のオンライン交流ゼミと基礎ゼミ・演習ゼミの3泊での現地研修旅行	ゼミ・授業等 正課教育活動
	37	大井沢地域づくり振興プロジェクト	山形県西村山郡西川町大井沢の集落存続を研究し提案・実践する 現在のところ補助金はないが、今後、町から補助金申請等は予定されている	通年	ゼミ・授業等 正課教育活動
	38	実践ゼミ スーツセレクト・レディス マーケティング提案PBL コナカ株式会社 (神奈川県横浜市)	新製品提案マーケティングPBL	秋学期	ゼミ・授業等 正課教育活動

	活動名称		活動概要と目的	活動時期	活動区分
その他	39	青森・下北&函館観光分野での活動視察と交流の旅	青森県が推進している津軽海峡圏交流圏プロジェクトにかつて委員として関わりを持ったが、その後の同事業の進捗状況視察と推進する民間団体・個人との交流を基礎ゼミナールの学外実習として実施する。ツアーでは青森県庁にて同プロジェクト担当職員との意見交換会も行う。研修成果は青森県庁などへフィードバック予定。	2022年9月12日～9月15日	ゼミ・授業等正課教育活動
	40	盛岡市との地域連携に基づく調査研究活動	3か年調査研究の2年度目で、盛岡市より与えられたテーマである「もりおか短角牛」のブランド化、販売促進に向けて調査研究を実施している。今年度は「もりおか短角牛」の特徴でもある夏山冬里方式という飼育方法や生産者との交流を通じて、認知度向上を図るためのモデルツアーの実施や、銀座にある岩手県のアンテナショップでのイベント開催を予定している。なお、学生の盛岡での調査研究活動については、盛岡市より交通費・宿泊費等の助成を頂いている。	令和3年度～5年度(本年度は2年度目)	課外活動(学科・サークル等)
	41	吉野秀雄艸心忌世話人会	吉野秀雄艸心忌世話人会：第一回釈迢空賞受賞者である歌人吉野秀雄を偲び、彼の歌を後世に伝えるための活動を行っている会。毎年7月に鎌倉瑞泉寺で艸心忌が開催されるが、今年度は新型コロナのために未開催。	7月	教員のみの活動
	42	吉野秀雄顕彰短歌大会記念講演会講師	吉野秀雄顕彰短歌大会記念講演会講師：高崎市ゆかりの歌人である吉野秀雄を顕彰し、高崎の文化振興をはかることを目的として、毎年高崎市で短歌大会が開催されるが、今年度は11月19日（土）に開催予定。その記念講演会の講師として講演予定。	11月19日	教員のみの活動

順不同、分類・記載は筆者判断による
学内の地域交流関連活動に関わる調査資料にもとづき筆者作成

活動地域としては、「文京・東京」地域での活動が20件、「新座・埼玉」地域での活動が13件、「その他」地域での活動が9件となっている。

地域交流センターでは、2019年度、2020年度、2021年度と跡見学園女子大学において実施、実施計画のある地域交流活動について調査を行ってきた。そこで把握された地域交流活動の件数の推移は下記のようになっている。

表2：2019年度～2022年度の地域交流活動の件数の推移

年度	実施地域：文京・東京	実施地域：新座・埼玉	実施地域：その他	総数
2019年度	33	22	28	83
2020年度	27 (約18%減)	11 (50%減)	25 (約11%減)	63 (約24%減)
2021年度	18 (約55%減)	5 (約77%減)	10 (約64%減)	33 (約60%減)
2022年度	20 (約39%減)	13 (約41%減)	9 (約78%減)	42 (約49%減)

( ) 内には、同項目の2019年度比減少%を示した。
(出典 金子 2020：12、新垣 2021：46-68、新垣 2022：19)

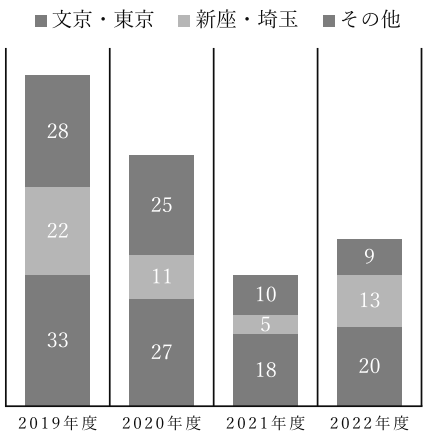


表2からは、地域交流活動が2019年度と比較して2022年度は約49%減少しているが、2021年度と比較すると増加しておりコロナ禍からの「回復」傾向が確認できた。

しかし、別の傾向もみられる。今回は42件の地域交流活動があったが、1名で複数件回答したのが6名であった。内訳は、1名2件が3名、1名3件が1名、1名5件が1名、1名6件が1名となっている。そこからは、跡見学園女子大学では、一部の教員によって地域交流活動が実施されている傾向をみることができる。

（2）地域交流活動における交流先担当組織・部署

また、地域交流活動を実施する教員からのカウンターパートの属性についての回答結果は次のようになっている。

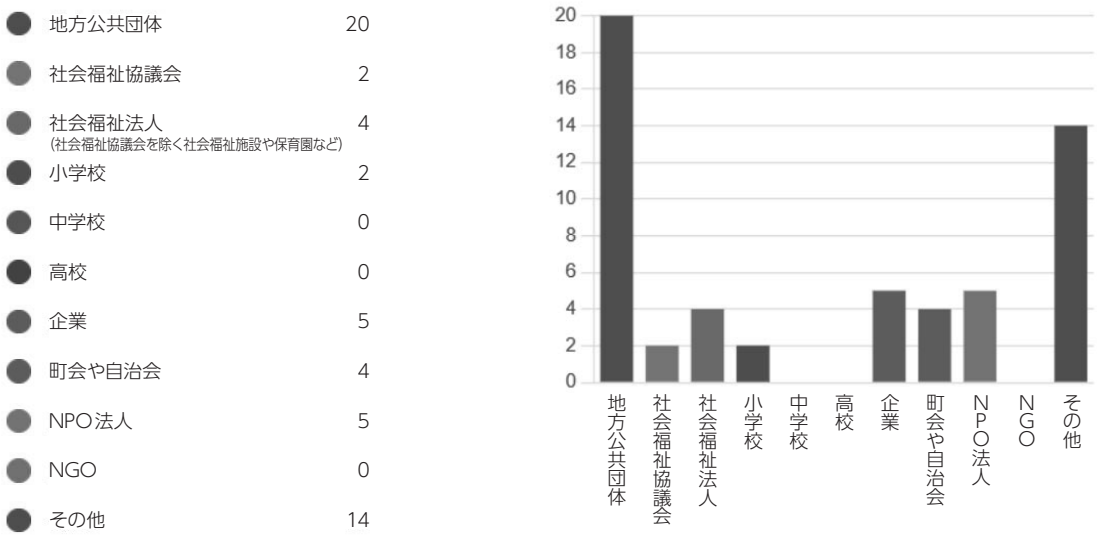


図1：地域交流活動における交流先担当組織・部署

最も多いのが「地方公共団体」で20件、続いて「その他」が14件、「企業」が5件、「社会福祉法人（社会福祉協議会を除く社会福祉施設や保育園など）」が4件、「町会や自治会」が4件、「社会福祉協議会」が2件、「小学校」が2件となっている。「その他」については、一般社団法人や地域の協議会などが具体的な回答としてあがっている。

地域交流活動は大学教育において必須というわけではないが、大学に対し地域交流活動が求められているという状況があるのは周知の通りである。そこで求められている地域交流活動の内容がわかる一例として、文部科学省の中央教育審議会における議論が挙げられる。中央教育審議会では2018年11月に「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」において「国が提示する将来像と地域で描く将来像」という題で大学が地方公共団体や産業界と地域社会の将来について共有・理解する議論の場をつくることが求められている［中央教育審議会 2018：40］。それを受け、中央教育審議会大学分科会でも2021年12月に「これからの時代の地域における大学の在り方について―地方の活性化と地域の中核となる大学の実現―（審議まとめ）」において大学が行う地域との協働や地域貢献を行う人材育成の具体例が示されている［中央教育審議会大学分科会 2021］。要約すると、地域交流活動と貢献を行いつつそれが人材育成ともつながる教育を行うことを、現在の大学は求められている。

それに対し図1の集計からは、地域交流活動における交流先としては地方公共団体、社会福祉協議会、町会や自治体、企業などとの連携が行われていることがわかる。そのため本学では、傾向として大学に求められる地域交流活動が行われているということができる。

（3）地域交流活動に対する補助・助成の有無

さらに、地域交流活動を実施する教員からの地域交流活動に対する補助・助成の有無についての回

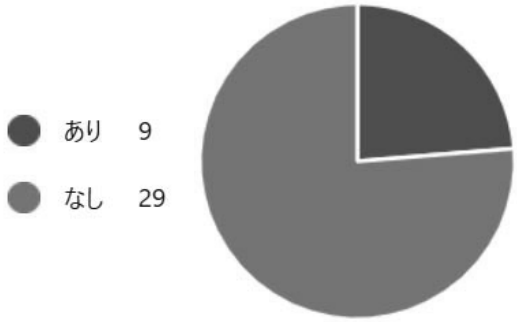


図2：地域交流活動に対する補助・助成の有無

答結果は次のようになっている。

図2の回答結果からは、地域交流活動のほとんどは補助・助成がないままに行われている現状がわかる。

3．まとめ

今回の調査によって、跡見学園女子大学における地域交流活動が昨年度よりも増加しておりコロナ禍からの「回復」傾向が確認できた。

地域交流活動とは地域とのコミュニケーションによって生まれ、維持される。だが、コロナ禍によりコミュニケーションが断絶した活動、細々とでもコミュニケーションを継続した活動、オンラインでのコミュニケーションを行った活動などがあったわけで、活動件数だけをみれば「回復」といえるが、それはコロナ前からの回復なのかそれとも「新生」なのかを知ることは、今後の地域交流活動への支援を考える際に重要である。それは、次の調査課題として残る。

また、今回の調査からは「回復」傾向にある地域交流活動が、一部の教員によって実施されている傾向がみえてきた。もちろん、地域交流活動は教員に課せられた義務ではない。しかし、それが社会的に大学に求められているということも事実である。さらに、地域交流活動のほとんどが補助・助成を受けずに行われているという調査結果とあわせて考えると、一部の教員に大きな負担がかかっている現状が浮かび上がってくる。

そのため学内でも地域交流活動に対する補助・助成の仕組みを考えていくことも、今後の課題である。この課題については、すでに2019年度にも指摘されている［金子 2020：15］。参考となる先行事例の一例としては、拓殖大学において2010年度から実施されているSDGs、社会貢献等の学生の取り組

みに対し大学が助成を行う「学生チャレンジ企画」がある。この学生チャレンジ企画では、学生からの企画書提出、審査、助成決定、中間報告、成果報告、最終報告を行う仕組みが確立している。

跡見学園女子大学における地域交流の状況を少しでも改善することが地域交流センターの課題である。だが、大学に対して地域交流活動が求められる状況がある一方で、跡見学園女子大学においては地域交流活動への補助・助成が少ないという課題についてはセンターのみでは対処することは不可能である。そのため、大学としても、今後、どのように地域交流活動を大学の取り組みとして位置付けるかという方針とそれに伴う施策を示すことが必要となるであろう。

引用文献

・新垣夢乃、2021、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について―特に新型コロナウイルス感染症流行による影響に注目して―」『ゆかり』2
・新垣夢乃、2022、「跡見学園女子大学の地域交流活動への新型コロナウイルス感染症流行の影響に関する分析」『ゆかり』3
・金子祥之、2020、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状と課題―学内調査を通じた実態把握―」『ゆかり』1
・中央教育審議会、2018、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf 2022年12月29日参照）
・中央教育審議会大学分科会、2021、「これからの時代の地域における大学の在り方について―地方の活性化と地域の中核となる大学の実現―（審議まとめ）」（https://www.mext.go.jp/content/20220112-mxt_koutou01-000019888-001.pdf 2022年12月29日参照）

特集

コロナから「回復」傾向下の地域交流活動

跡見学園女子大学地域交流センター

地域交流センターでは、2019年度より継続して跡見学園女子大学内における地域交流活動の実施状況に関するアンケート調査を実施してきた。

2019年度の地域交流活動は83件であったが、2020年度には63件、2021年度には33件とコロナ禍で地域交流活動は約60%減少した。

2022年度の地域交流活動は38件となり、昨年度に比して若干の「回復」が見て取れる。本特集では、その「回復」のなかでそれぞれの現場でどのような地域交流活動が行われているのかをご覧いただければと思います。

未来の健康を作る食育プロジェクト2022

生活環境マネジメント学科　石渡尚子

1．はじめに

石渡ゼミでは、2013年から6年間にわたり、地域の高齢者の孤食解消・外出頻度の向上を目的とした「高齢者のための共食プロジェクト」に取り組んできた。この成果が評価され、平成30年度に農林水産省が主催する第2回食育活動表彰で消費安全局長賞を受賞した。この経験を活かし、昨年度から地域の高齢者ばかりでなく、子どもの食生活改善を目的とした「未来の健康を作る食育プロジェクト」に取り組んでいる。

今年度のプロジェクトテーマには“和食”を選んだ。この背景として、日本人の食習慣の変化が挙げられる。令和2年度に文化庁が行った「日本の食文化等実態調査」によると、和食を好む日本人は1998年から2020年の約20年間にかけて20%以上減少しており、その一方で洋食を好む人は継続的に増加傾向にあると報告されている(1)。この結果から、ユネスコ無形文化遺産にも登録された日本人の健康の維持・増進に役立つ伝統的な食文化である“和食”の存在感が、日々の食生活の中で薄れつつあることが推察される。また、農林水産省は、和食文化の保護・継承の中心的な担い手として小学生を挙げ、「学校で学んだ内容を子どもたちが家庭に持ち帰って親に伝え、それが家庭に浸透していき、食文化が継承されていく」としている(2)。

一方、「令和3年度学校保健統計（文部科学省）」によれば、肥満傾向児の割合は男女ともに小学校高学年が最も高く、特に男子は9歳以降1割を超えていた(3)。約30年前と比較して現在は肥満傾向の子どもの数が約2倍に増え、およそ10人に1人が肥満児という結果になった。子どもの肥満の約7割は成人肥満に移行し、肥満度が高いほど生活習慣病を合併するリスクが高まる。その原因の1つに食の欧米化による脂肪の多い食事がある。

以上のことから、将来、主体的に健康維持・増進できるような大人を増やすことを目的に、子ども時代に和食を軸としたバランスの取れた健康的な食習慣を身に着けてもらうための食育活動を展開することになった。今年度は文京区内の小学5年生を対象に、和食の中心食材である「ま（豆類）ご（ごま）わ（わかめ等の海藻類）や（野菜）さ（魚介類）し（しいたけ等のきのこ類）い（いも類）」を取り上げ、和食を軸とした食習慣の大切さを伝える食育授業を実施した。

2．2022年度の和食の食育出張授業

（1）事前アンケートによる小学生の食習慣把握

小学生の食習慣の現状を知り、ニーズに合った授業内容を組み立てるため、5月下旬に対象となる小学生の食習慣アンケート調査を実施した。今回は家庭科の授業で食事や栄養について学び始める小学校5年生を対象とした。アンケート回収後6月下旬までに結果の集計と分析を行い、その結果を授業実施校の教諭や栄養士と共有し、授業内容や難易度を調整した。

（2）文京区内の２つの小学校における食育出張授業の実施

７月上旬までに授業内容を固め、７～８月に90分の対面授業（通常授業の２コマ分）で使用する授業用資料（掲示ポスターやパネル、ワークやクイズの配布物、食育アニメーション等）を作成した。授業を実施する２校とも５年生は２クラスあるため、それぞれの教室で同様の授業が実施できるよう、学生は２つのグループに分かれリハーサルを繰り返した。その上で、和食の日である11月24日と翌週の12月１日に各校の５年生全員を対象に90分間の対面授業を行った。

（3）食育出張授業の効果測定

授業時に生徒さんへ渡した学生オリジナルの食育ブックの中に、「まごわやさしい」の各食材を食べたかどうか確認するチェックリストを付けた。これに１週間の摂食記録を記入してもらい、後日回収して、出張授業の効果を測定した。表１に11月24日に出張授業を実施した５年生（41名）の結果を示した。事前調査と比較し「ごま」「野菜」「いも類」は「毎日」または「週に３～６日」と比較的高頻度で摂取している生徒の割合が増え、食べないと答えた生徒は0%になったことから、授業後に、多くの生徒が「まごわやさしい」を意識した食生活を送っていることが示唆された。一方、「魚介類」や「きのこ類」の摂取頻度は低下していることか

表１　和食の食育授業受講者による「まごわやさしい」食材の１週間の摂取頻度の変化

※ ・・・授業の効果があったと推測できる部分
・・・効果がなかったと推測できる部分

	毎日	よく（3～6日）	たまに（1～2日）	食べない
	授業前 → 授業後	授業前 → 授業後	授業前 → 授業後	授業前 → 授業後
まめ	38% → 17%	44% → 48%	18% → 31%	0% → 2%
ごま	8% → 19%	26% → 65%	56% →14%	10% → 0%
海藻	20% → 9%	40% → 46%	34% → 39%	6% → 4%
野菜	53% → 65%	43% → 34%	4% → 0%	0% → 0%
魚	8% → 2%	47% → 29%	41% → 46%	4% → 21%
きのこ類	4% → 2%	32% → 29%	46% → 53%	18% → 14%
いも類	10% → 9%	32% → 63%	52% → 26%	6% → 0%

ら、小学生の食事で供されることの少ない食材の魅力が伝わる授業構成や生徒が食べたい、作りたいと思うようなレシピ提案が必要であることがわかった。

授業を受講した生徒さんの事後アンケートから、普段の食生活が和食離れになっている自覚や給食や保護者が提供する食事バランスの良さへの気づき、また、授業後は「まごわやさしい」食材を意識した食事を実践している様子が伺われた。

3．おわりに

これまで数年間、学外での食育活動は困難な状況にあった。以前であれば、先輩の経験やノウハウを活かして毎年、活動内容をアップデートできていたが、この数年間でそれらの伝承が絶たれたことから、一から出直しとなった。このような状況でも、今年度の学生たちは諦めることなく、希望していた小学生への食育出張授業を対面で実施し、好評を得ることができた。これは、メンバーひとり一人が、自分たちはなぜこのプロジェクト活動をするのか、そのミッションを常に意識し、行動していたことが大きい。これにより、各自がこのプロジェクトで担うべき役割を自覚し、得意な分野で力を発揮することで、チーム力が高まった。この活動を間近で見ていた後輩たちが先輩たちのマインドを受け継ぎ今後の食育活動に励んでくれることを期待している。

参考文献

（1）文化庁「日本の食文化等実態調査（令和２年度）」
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/syokubunka/index.html（2023-01-09）.
（2）農林水産省「和食の食育　食べて学ぶ日本の文化」
https://www.maff.go.jp/j/council/seisaku/syokusan/bukai_17/pdf/ref_data_2.pdf（2023-01-09）.
（3）文部科学省「令和３年度学校保健統計」
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa05/hoken/kekka/k_detail/1411711_00006.htm（2023-01-09）.

「バナナうんちで元気な子！ ～生活リズムを整えよう～」2022年度食育活動

生活環境マネジメント学科　石渡尚子

1．はじめに

今年度から石渡ゼミでは生活習慣病を予防する特定非営利活動法人 日本成人病予防協会と協働し、低学年の小学生を対象とする食育活動に取り組んでいる。同協会では平成22年度より「バナナうんちで元気な子　～生活リズムを整えよう～」と題し、文部科学省、「早寝早起き朝ごはん」全国協議会、公益社団法人日本PTA全国協議会後援のもと、全国の小学校で約900講座の食育授業を協会の食育講師陣により行ってきた(1)。この活動は小学校低学年のうちから身体のしくみを知り、「早寝早起き朝ごはん」の生活リズムを保って、「バナナうんち」で健康な排便習慣を身につけることを目的としている。今回、生活習慣病予防に貢献する新たな人材を育成するため、次世代を担う若い世代の講師を育成する「大学生講師の育成プロジェクト」が開始されたことを機に、石渡ゼミ３年生もこのプロジェクトに参加することになった(2)。

2．食育講師になるための試験

食育講師になるためには、協会の規定として「健康管理検定２級（後援：文部科学省）」に合格しなければならない。「健康管理検定２級」では、体内リズムの観点から、食育授業のテーマとなっている“便”をはじめ、栄養素や睡眠などについての知識を習得することになる。３月末に３年生全員が検定テキストを受け取り、春学期の間、各自勉強を続けた。協会による合格対策講座を受講した上で、本試験に臨んだ結果、７月末の試験に13名全員が検定に合格した。

さらに、食育講師として教壇に立つためには、講師実技試験にも合格しなければならない。検定合格後、講師実技講習を受講した上で９月の１か月間、実技試験の練習に励んだ。その結果、10月初旬に実施された実技試験にも全員が合格し、石渡ゼミ３年生13名は無事に食育講師として認定された。

3．東京都内の小学校での食育授業実施

本授業は小学校1～3年生対象の45分授業である。授業は協会から提供された台本や資材をベースに、授業中に飽きさせないような工夫を凝らした学生オリジナルな授業内容とした。3～4名が1グループとなり、4グループが同レベルの授業ができるように練習を重ね、秋学期期間中に都内5校の小学校で350名以上の生徒さんへ食育授業を実施した[(1)]。

〈出張授業実施日程〉

10/27　文京区立大塚小学校（3年生45名）
12/15　国本小学校（2年生50名）
12/17　板橋区立新河岸小学校（1年生21名）
12/23　中央区立月島第三小学校（1年生189名）
1/14　葛飾区立渋江小学校（1年生52名）

4．おわりに

学生にとって、自分が学んだ知識を小学生にもわかるように説明することは想像以上に難しかったようだ。大人に対するような教え方では理解が得られない。練習では完璧と思えた授業が、いざ、低学年の小学生を前にすると想定外の反応があり、都度、臨機応変な対応が求められた。だからこそ、授業が終わるたびに振り返りを行い、改善点を共有して、次の授業に活かすというPDCAサイクルを回す重要性が理解できた。今後の食育活動でも、この経験から得られた「相手が理解しやすいように伝える」ことを常に心がけてほしい。

参考文献

（1）特定非営利活動法人日本成人病予防協会　広域食育推進民間支援事業『バナナうんちで元気な子！』
https://www.japa.org/education/report01/（2023-01-09）
（2）特定非営利活動法人日本成人病予防協会 社会貢献活動
食育活動「バナナうんちで元気な子」の大学生講師育成プロジェクトがスタートしました！
https://www.japa.org/csr_info/11103/（2023-01-09）

防災フェスタにおける研究報告
―3年ぶりの対面形式参加から得たもの―

赤松瑞枝

1．はじめに

赤松ゼミ3年生は2017年から文京区防災課が主催する防災フェスタに参加し、研究成果をブースにて発表している。8月の最終日曜日に教育の森公園で開催される同フェスタでは、多くの企業や団体がブース出展を行い、防災に関する情報発信をすると共に、自衛隊や消防局等の協力のもと地域住民や来場者が防災訓練を行っていた。

2020年及び2021年は中止となったが、2022年は出展ブースの大幅な縮小等新型コロナウィルス感染防止対策を十分に取り、12月へと時期をずらして3年ぶりに対面開催することとなった。本ゼミもブース出展は出来なかったが、研究内容をまとめたパンフレットを作成し、来場者に直接手渡しする形式で報告・啓発活動を実施することになった。試行錯誤の連続であったが、この取り組みを通して大きく2つの成果を獲得できた。

2．活動を通して得た成果

2－1．効果的な報告方法の検証

前述のように、ブース出展ではなく、学生自身が作成したパンフレットと寒さ対策として購入したミニカイロを手に会場内を周り、来場者に声をかけながら了解が得られた方にお渡しする形式での参加となった（図1）。煙ハウスやはしご車乗車などの体験コーナー、防災課企画のスタンプラリー設置場所に、子ども連れで並んでいる方が主に受け取ってくださった。感染予防対策のため、午前中の担当、午後の担当と2チームに分かれて参加し、準備した200部のパンフレットを全て配布したが、午前中のほうがスムーズに配布できていた[(1)]。応援や激励を寄せてくださった方も多く、そうした温かいコメントに

図1：当日の様子

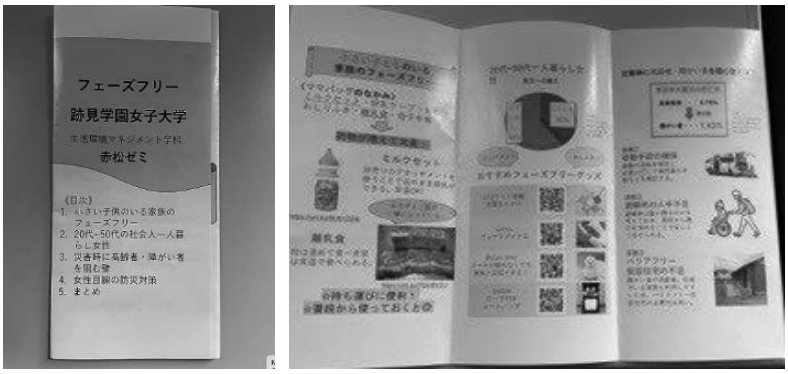


図2：フェーズフリー啓発パンフレット

支えられてやり遂げることができたと学生が振り返っていた。

後日ゼミで検討した結果、予想以上に小さな子どもを複数連れた来場者が多く、抱っこしたり手を繋いだりしているため、パンフレットとカイロを袋に入れてまとめて渡したり、子どもが喜ぶようなグッズを準備したりという工夫をすべきだった、後半ペースダウンしたとは言えあと50部ほどは配布できた、カイロは一家族に複数渡すこともあったので倍は準備すべきであった、等が反省点として挙げられた。また自分たちの取り組みに関心を持ってくださる方が多かったので、やはりブース出展をしてしっかりと説明をしたい、パンフレットはブースへ誘導する手段として作成・配布すると良い等、紙媒体配布は限界であるという意見も多く寄せられた。SNSによる情報発信、会場でのパンフレット配布と、様々な方法を経て検証した結果、コロナ前のブース出展による研究報告が最も望ましい方法であることが明らかになった。

2－2．研究対象検討過程における視野の拡大

昨年に引き続き、「フェーズフリー」[(2)]をテーマに調査研究を実施することにした。詳細な研究対象についての検討過程において大きな成長が見られた[(3)]。

女性にターゲットを絞り、その中で年齢や家族構成の違いに着目して調査をするという方向性と、高齢者や障がい者、子育て中の人など様々な属性をターゲットにするという方向性の2種類が示された。これまでは、それぞれの立場を理解した上で、多数決を取って方向性の統一を図っていた。しかし今回は、さらに話し合いを重ねることで、「どうすれば両方の意見を取り入れた形で研究を進められるか」を見出すことに挑戦した。その結果、来場者が女性に限定されていないので、多くの人に成果物を手に取ってもらうために、後者の方向性を重視する、とは言え女子大生の取り組みであるので女性ならではの視点からの提案を盛り込むことも、PRポイントになる、したがって、女性も調査対象の属性の一つとして扱う、という決定がなされた（図2）。

3．おわりに

ダイバーシティやインクルージョンが求められる現代社会においては、自分とは異なる意見に耳を傾けたり、そうした立場を尊重したりしながら協働できる人材が求められている。今回、賛成と反対の先

にあるものをつかむことをゼミ生全員で目指し、視野を広げることができたことは、就職活動を目前に控えた３年生にとって非常に有意義な経験であった。さらに企画主催者や教員から強制されることなく、学生自身でブース出展の有効性に気づいたことも意義深い。しかも防災課担当者より、参加者をコロナ前並に戻すべく[(4)]、ブース数を例年規模に戻して集客を図りたいとのコメントがあったため、社会情勢に左右されるものの、ブース出展が再開できる可能性が高い。今年度得られた知見を活かしながら、更に地域に貢献できる活動の実施を目指したい。

補注

（1）来場者の滞在時間が想定外に長く、午後はお声がけしても「もう受け取りました」との反応が多かった。
（2）フェーズフリーの定義や研究の意義については、『ゆかり跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書3』にて報告している。
（3）筆者は、基本的に企画の趣旨やこれまでの参加方法について説明するのみであり、調査研究のテーマ、成果のまとめ方、当日の配布方法は、全て学生同士が討議して結論を出している。その結論が適切だったかどうかについても、企画後の反省会によって学生自身が判断している。討議が停滞しているように感じた場合は、筆者がヒントを与えることがある。
（4）2022年は2,619名。コロナ前は3,000人超であった。

引用文献

・赤松瑞枝「コロナ禍における地域活動 ―防災フェスタ中止に伴う啓発パンフレット作成を通して―」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書3』跡見学園女子大学地域交流センター、p.29-p.30、2022

2022年度 B-ぐる映像制作プロジェクト 活動報告

地域交流センター長　土居洋平

1．はじめに ―プロジェクト概要および今年度の活動概況―

B-ぐる映像制作プロジェクトでは、文京区を巡るコミュニティバス「B-ぐる」の車内で放映されている動画の一部を本学学生が制作している。過去の『ゆかり』にて既に記してあるように、B-ぐる沿線協議会からの依頼を受けて2012年度にゼミ活動の形でスタート[(1)]し、2015年度から地域交流センター（注：2015年当時は庶務課地域交流担当）で所管するようになった。活動11年目となる今年度も、地域交流センターの呼びかけで集まった21名の学生が参加し、3チームに分かれての映像制作活動を行っている。また、この原稿を執筆している23年1月初旬現在、2作品（22年10月及び23年1月）が公開されている。

2．コロナ禍3年目における活動の展開

（1）コロナ禍前後の変化

B-ぐる映像制作プロジェクトは、コロナ禍の影響を受けながらも2020年度以降も途切れることなく実施をしているものである。ただし、2020年度はメンバーの一般募集は行わずに2019年度からの継続メンバーとその口コミでの募集に留め、作品数も減らした形での活動となった。2021年度には2019年と同程度の活動を再開し、今年度も2021年度と同じ形でプロジェクトを進めていった。ただし、2019年度までと2022年度で、若干の違いもあった。それまでは、一旦参加した学生の殆どが年度を超えて卒業まで活動を継続していたのであるが、2022年度については、卒業生でなくても2021年度から継続をするメンバーが約半数となってしまったことである。

これは、コロナ禍前と異なり、1作品あたり週1回のペースで1ケ月半程度行われる企画会議がオンラインで行われるようになったことが関係しているかもしれない。この活動では、通常、年間3作品が作成される。また、1作品には3～5の企画が盛り込まれる。各企画は2名前後の学生が担当し、チーム編成から1ケ月半～2か月にかけて週一回企画会議で進捗状況を報告し、沿線協議会の担当者や映像制作のアドバイザーからのコメントを受け、企画立案・取材先候補の検討、絵コンテの制作、取材先への説明や撮影協力の交渉を進めていく。コロナ禍前までは、この過程において学生同士で様々なコミュニケーションが行われ、交渉や撮影のノウハウの継承などもされていった。また、コロナ禍前は気軽に、チーム単位での懇親会なども行われていた。

しかし、2020年度以降は、企画会議はオンラインで行うようになった。これは、2021年度も変わっておらず、企画の検討・調整を進める段階で企画班を越えた学生同士のコミュニケーションを深めることが難しかった。もちろん、オンライン会議でもチームビルディングをしてから実際の企画会議に入るが、企画会議が軌道に乗り出すと、企画の内容の検討についてはオンラインでも支障なく議論が進むものの、それ以外の何気ないコミュニケーションを深めていくことは難しかった。また、コロナ禍

になってからは懇親会等で学生間のコミュニケーションの促進を図ることは難しく、コロナ禍前のような企画班を越えた学生同士の関係の形成が困難な状況となっている。そのこともあり、元々関係がある学生同士で企画班を作った場合、新たにこの活動を通じた学生間の関係の形成につながりにくかった。その結果、1年目の活動で自分自身の活動成果を得た学生が、翌年に他の学生にその成果を継承しようと活動に残るモチベーションが低下してしまったのである。

写真：「いちようさん」企画撮影の様子

（2）2022年度の活動の展開

とはいえ、2021年度参加メンバーで在学生のうちの半数強である8名の学生が継続して参加し、チームリーダー等を分担しながら例年通りの活動のスタートということとなった。まず、4月中に継続メンバーの3年生4名で全体の代表、チームリーダーの役割分担を決め、参加者募集の準備等を行った。また、5月初旬からポータル経由で新規参加者の募集が行われ、新たに10名の参加者を得ることができ、18名で活動がスタートしたた。なお、11月にCチームメンバーを更に募集した結果、さらに数名の参加者を得て、今年度は累計で21名の学生が活動に参加している。最初の募集に応じたメンバーが確定後、5月23日（月）および30日（月）に対面＋オンラインのハイブリッド形式で最初の会合を行った（ただし、新規メンバーの多くはオンラインでの参加であった）。2回の会合を通じて3チームの編成を行い、以降、Aチーム（活動期間（以下略）：6～9月）、Bチーム（9～12月）、Cチーム（12～1月）の3チームに分かれて活動を展開していった。継続メンバーが8名ということもあり、各チームとも継続参加者1：新規参加者2の割合でのチーム編成となった。

Aチームは6月に活動を開始し、オンラインでの企画会議を経て8月に撮影を行った。また、9月には編集作業日を3日ほど設け、映像編集とテロップ付け・加工の作業を行った。これは、具体的な映像編集指導を受けながらの活動となる関係で、完全対面での実施となった。また、完成した映像は10月1日からB-ぐるバス車内で放映された他、10月中旬からはYouTubeの「B-ぐるチャンネル」（https://www.youtube.com/channel/UCaY7ZHeVai5y91237H-tewA）で公開されている。同じく、Bチームは9月から会合をはじめ、11月初旬までの企画会議を経て11月下旬～12月初旬に撮影が行われ、年末にかけて編集作業を行った。ただ、企画担当学生が新型コロナウイルスに罹患したこともあり、公開日が1月初めではなく上旬に後ろ倒しとなっている。また、Cチームは12月中旬から活動を開始し、1月から2月初旬にかけて企画会議、2月中旬の撮影と3月中旬までの編集を予定している。このあたりは、コロナ禍前および2021年度と同じスケジュールで活動が展開している。

また、今年度も既に、例年制作してきた「いちようさん」（樋口一葉を模した“いちようさん”が登場し、文京各所を巡りながら紹介する企画）は年間を通じて作成されているほか、文京区内の飲食店の紹介や、ボルダリングや合唱を体験しながら紹介する動画が制作されている。

これまでと同様、企画立案はもちろん取材交渉・撮影ともに学生主体で行うため、学生にとって学び

の多い活動になった。また、成果が映像作品という形で残り、YouTubeで常時確認ができるものであることから、学生にとっても達成感を得られやすく、成果も示しやすい活動となっている。

注

（1）過去の『ゆかり』では開始年度を2013年度としていたが、経緯を確認したところ2012年度からの活動であることが判明した。

「文京まちたいわ」との協働―「文京まちたいわフェス」の本学での実施

地域交流センター長　土居洋平

1．はじめに―「文京まちたいわ」および「文京まちたいわフェス」とは？―

「文京まちたいわ」は、文京区内のまちづくりに関わる有志による任意団体である。この団体が設立されたきっかけは、2013年から16年にかけて文京区が実施した「文京ソーシャルイノベーションプラットフォーム」という、文京区内のまちづくりの担い手育成事業であった。この事業を受講した区内のまちづくり活動の関係者、これから活動をしようとする人々が、事業終了後もお互いの近況報告をしたり、新たな活動の相談をしたりする場を設けたいということから「文京まちたいわ」は設立された。そして、現在も、毎月11日に定例の会合を行い、近況報告や新しい活動の提案などが行われている。

また、月1度の定例の会合とは別に、半年に一度、まちづくり関係者の交流や活動発表を中心とした「文京まちたいわフェス」を行っている。第一回は2018年2月に行われ、翌年以降は2月と8月（または9月）に実施されてきた。また、コロナ禍以前は、文京区総合福祉センター「リアン文京」を会場に、毎回、80～100名程度の参加者があった。

2．「文京まちたいわフェス」と本学の関わり

「文京まちたいわ」が設立されて間もない2017年の夏ごろから、筆者もミーティングに参加するようになる。当時、コミュニティデザイン学科が設立3年目を迎え文京キャンパスにも学生が来るようになり、文京区内での連携相手を探していた。また、同年4月に筆者が地域交流センター長に就任し、文京区内での本学の地域連携のカウンターパートを探していた。その関係で、文京区内の様々な会合に出席しており、そこで関係のあった竹形氏（文京まちたいわ事務局）から誘われたのがきっかけであった。

2018年2月の初回の「文京まちたいわフェス」（以下、フェスと略）は、別業務との関係で参加が適わなかったものの、定例のミーティングに通い、学生も関わるようになったこともあり、2019年2月のフェスから、本学地域交流センターとして出展するようになった。また、フェスには自分のゼミの学生のほか、ポータルで運営のボランティアを募集し、毎回、学部を問わず10名前後の学生が企画や運営に協力するようになっていた。

2020年度と2021年度の夏は、コロナ禍の影響で、オンライン形式のフェスになる。ただし、文京区内のまちづくりに関わる複数の拠点から配信という形で実施され、運営には筆者や学生も引き続き協力をしてきた。また、2021年度の下半期の頃には、次第に一部対面での実施が検討されはじめた。ただ、コロナ禍前に実施をしてきたリアン文京では、100人規模で距離を保って人が集まることは難しく、新たなフェス会場が模索されていた。その折、本学に文京キャンパスを会場として使用したい旨の相談があった。

学内で検討した結果、文京区内の地域活動の促進に資するイベントであり、そこに本学が協力することは意義があるということから、本学が協力名義を提供することを前提に会場の使用が許可された。

3．本学での「文京まちたいわフェス」の実施

以上の経緯をもとに、昨年度、2022年2月11日に「文京まちたいわフェス2022・冬」が実施された。当日は、本学文京キャンパスの3階各教室および廊下部分を活用して、午前中のトークセッション、午後のパフォーマンスセッションが行われた。ただ、この時期は感染拡大期と重なり、実際には本学には発表者とスタッフのみが集まり、一般参加者はオンラインで参加という形式となった。とはいえ、本学からも、筆者のほか、コミュニティデザイン学科を中心に10名以上の学生が運営スタッフとして参加している。また、ポスターセッションや活動報告に、本学地域交流センターとして出展・参加した。

写真1：距離を保った演奏の様子

また、今年度に入り、2022年9月4日には「文京まちたいわフェス2022・夏」が開催された。夏フェスは、パフォーマンス中心のイベントという位置から、文京区内を中心に活動するパフォーマーが、2号館3階の廊下部分につくったステージでマジック、バンド演奏、太鼓などの多種多様なパフォーマンスを行った他、ハンドクラフト作家が自身の作品を紹介したり、ハンドクラフトワークショップを行ったりした。また、本学軽音部からの1組のバンドが参加している。当日は、一般参加者も含めて80名弱の参加があったが、3号館のほぼすべての教室と廊下部分を使用したこともあり、距離を保った形でのイベント実施が可能であった（写真1）。

図1：学生作成のイベントチラシ

さらに、今後、2023年2月12日には、「文京まちたいわフェス2023・冬」が本学において実施の予定となっている。昨年度は対面で集まったのはスタッフと発表者のみであり、一般参加者はオンラインでの参加となったが、この原稿を執筆している1月初旬現在時点では、一般参加者も含め対面でのイベント開催が予定されている。本学学生も、企画段階から関わっている学生も多く、イベントチラシの作成などを学生が行った（図1）。また、夏フェスで親子連れの来場者も多く参加していたことから、子ども向けの縁日も本学学生が中心となって企画されている。

「文京まちたいわフェス」は、文京区のまちづくりの関係者が交流し、互いの活動の様子を知る機会であり、また、様々なパフォーマンスも行われる楽しいイベントとして定着しつつある。今後も、本学地域交流センターとして、文京区のまちづくりに貢献する観点、あるいは、まちづくりに関わりながら学生を育て入るという観点から、本イベントへの協力を行っていきたい。

菊坂七夕祭り

秋谷香菜子・新垣夢乃・磯田みずき・小山凪咲・水村美穂・吉田璃音・松尾映理奈

1．はじめに

跡見「学芸員」in菊坂では、2021年度より、文京区にあるMiratz本郷第二保育園と連携し、旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）を会場に菊坂七夕祭りを開催してきました。残念ながら、2021年度は当日の降雨により中止となりましたが、2022年度は無事に開催することができました。本報告では、菊坂七夕祭りの準備や開催内容について報告します。

実施メンバーは、秋谷香菜子（跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科３年）、新垣夢乃（同 地域交流センター助教）、磯田みずき（同 文学部人文学科２年生）、小山凪咲（同 文学部人文学科２年生）、水村美穂（同 文学部人文学科３年生）、吉田璃音（同 観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科３年）、松尾映理奈（同 観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科３年）となっている。吉田、松尾については跡見「学芸員」in菊坂のメンバーではなく、菊坂七夕祭りのみのオブザーバー参加メンバーとなっている。

2．開催の経緯

跡見「学芸員」in菊坂では、文化財となっている旧伊勢屋質店の活用を探る手段を考えてきた。そのなかで、地域の子どもたち向けに伝統的なイベントを開催し、旧伊勢屋質店を活用する案を企画した。

また、開催経緯の背景には、子どもの人口が増加する文京区は、園庭がない保育園が多い実情がある。歴史のある旧伊勢屋質店を活用することで、子どもたちは伝統的な空間において七夕を経験してもらえたらというのがねらいであった。

さらに、今回の菊坂七夕祭りでは、メンバーの水村が在住の埼玉県の地域では、竹林の管理が難しくなっており、伐採した竹が活用できれば地域貢献にも資源の有効活用にもなるのではないかという提案があった。そこで、埼玉県で伐採した竹を菊坂七夕祭りにおいて活用した。

3．菊坂七夕祭りの開催

活 動 名：菊坂七夕祭り

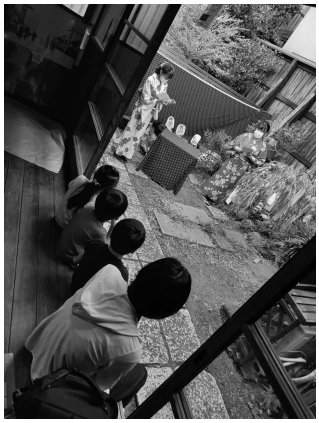
日　　時：2022年7月7日（木）10：00～20：00

場　　所：旧伊勢屋質店

活動内容：文化財となっている旧伊勢屋質店へMIRATZ本郷第二保育園の園児たちを招待し、園児たちと一緒に笹飾りづくり、竹灯籠づくりを実施し、跡見生上演の人形劇鑑賞を行った。園児が制作した笹飾りや竹灯籠は夜間ライトアップし、旧伊勢屋質店にて展示した。

参加人数：29名（内訳：MIRATZ本郷第二保育園20名（園児14名、教員6名）、跡見側7名。夜間も50名ほどの方が展示を鑑賞・撮影していかれた。

笹飾りをつくる園児



人形劇を鑑賞する園児

園児たちがつくった竹灯籠

園児たちとの記念撮影
（Miratz本郷第二保育園Facebookより）

竹灯籠の夜間展示

2021年度の開催が中止となってしまったこともあり、菊坂七夕祭りははじめての開催でした。ノウハウがないため準備には慌ててしまった点もありました。特に、古い建物ということで段差が多い旧伊勢屋質店ということもあり子どもたちの安全には細心の注意を払いました。そのため、ケガもなく全日程を終えることができました。

参加した子どもたちも熱中したり、キラキラした目で笹飾りや竹灯籠を眺めており、楽しそうに過ごしており手ごたえを感じました。さらには、旧伊勢屋質店のように古い建物は、子どもたちには珍しかったようで、屋内を見て回り、不思議そうに見ていました。これは文化財の活用という目的についても、若い世代に知ってもらうという面から成果があったのではないかと考えています。

また、昼間に子どもたちが制作した竹灯籠を夜間に旧伊勢屋質店の軒先に展示したところ、多くの方が足を止め撮影していかれたり、子どもたちが保護者の方と再訪するなどの場面がありました。

今回のノウハウを活かし、細部をアップデートさせた形で2023年度も菊坂七夕祭りを開催したいと考えております。Miratz本郷第二保育園の皆さま、また今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

菊坂町会主催「菊坂子ども歴史探検隊」への協力について

新垣夢乃・黒木真悠・小山凪咲・弘真生・黛沙也加・渡辺恵未

1．はじめに

2022年8月より文京区菊坂町会では、「菊坂子ども歴史探検隊」という町会の子どもが隊員となって地域の歴史や文化を学ぶ企画がスタートした。

この菊坂町会に位置する旧伊勢屋質店にて活動する跡見「学芸員」in菊坂では、この菊坂子ども歴史探検隊に参加、企画の実施などで協力を行ってきた。本報告では、菊坂子ども歴史探検隊への協力について報告する。

2．第1回 菊坂子ども歴史探検隊

活 動 名：菊坂子ども歴史探検隊
日　　時：2022年8月20日（土）
場　　所：旧伊勢屋質店、菊坂町会地域
参　　加：新垣夢乃、黒木真悠、小山凪咲、黛沙也加
活動内容：菊坂町会内を散策しながら、各ポイントでレクチャー、クイズを出題し地域の歴史を学び、夏休みの自由研究の課題として提出できるようなプログラムを実施。今回は、長泉寺（テーマ:「菊坂」の由来）⇒旧伊勢屋質店（テーマ：旧伊勢屋質店ってなに？）⇒樋口一葉旧居跡（テーマ：樋口一葉ってだれ？）を巡った。学生たちは、各ポイントでのレクチャーやクイズ出題、子どもたちの引率を担当した。

掲示されたチラシ

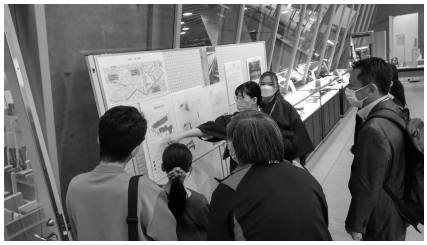
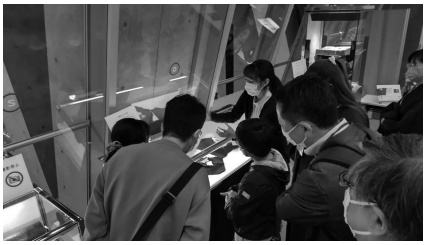
子どもたちへのレクチャーの様子

子どもたちとの集合写真

3．菊坂子ども歴史探検隊in跡見学園女子大学

活 動 名：菊坂子ども歴史探検隊in跡見学園女子大学

日　　時：2022年10月22日（土）
場　　所：跡見学園女子大学文京キャンパス２号館１階
参　　加：新垣夢乃、黒木真悠、小山凪咲、弘真生、渡辺恵未
活動内容：跡見「学芸員」in菊坂のメンバーが企画した発掘成果展「発掘された跡見女学校―明治・大正・昭和の女学校生活―」の開催を契機に、発掘成果展に菊坂子ども歴史探検隊を招待し展示解説を実施した。また、今回の発掘成果展が考古学的な調査の成果を展示するものであったため、発掘調査体験プログラムとして土器発掘と土器接合体験を実施した。

展示解説の様子

発掘調査体験プログラムの様子

4．むすび

普段の跡見「学芸員」in菊坂の活動は、旧伊勢屋質店が所蔵する資料の調査、破損した資料の修復、調査成果をもとに企画展を準備・開催することが中心である。これは一見したところでは、専門的に内向きになってしまう活動のようにも思える。しかし、その専門的に学んだこと、知ったことを、子どもたちに理解してもらえるように説明するということは、学芸員にとっては必須の能力である。そのため、菊坂子ども歴史探検隊との協力関係は私たちにとっても貴重な機会であった。そして、学んだことを通して地域交流活動を行えたことは、旧伊勢屋質店の活用の一つの定型にしていきたいと考えております。

末筆ながら、菊坂町会の皆さま、菊坂子ども歴史探検隊の皆さまには感謝を申し上げます。また、来年度も引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

「行こうよ！ 文京浴場♨ ～学生プロジェクト～」

古澤実怜・門戸智和

本プロジェクトは2022年8月1日から始まりました。「レトロの良さを現代に活かす」をテーマに掲げ、跡見学園女子大学と拓殖大学の学生が共同で文京浴場組合を盛り上げる目的で活動しています。

主な活動として「SNSでの発信」と「イベントによる地域交流」の2つを展開しています。

SNSでは、TwitterとInstagramを利用した記事投稿を行っています。

Twitterでは、銭湯で行われる日々のイベントの案内、営業状況の告知を行っています。また、地元企業や他地域の浴場関係者等とのつながりの獲得にも力を入れており、高い発信力・拡散力を持っているアカウントとのコネクションを得ることでプロジェクトのPR効果の向上と地域連携の強化に繋げられていると実感しています。

Instagramでは、画像や記事を豊富に投稿が出来る特徴を活かし、より仔細な内容の記事を投稿しています。内容は浴場の種類や特徴の紹介、またInstagramの利用者層に合わせて銭湯の入り方や美容効果の解説等を若い層に向けて展開しています。若者の銭湯利用者が減少傾向にある中、今後も、大学生ならではの目線から銭湯の魅力をアピールを続けていきたいと考えています。

イベントによる地域交流では、文京区の公衆浴場事業として行われていた森鴎外没後100周年記念事業「鴎外の湯スタンプラリー」（2022.9.25～2022.12.25）に伴い、活動を行いました。銭湯デザイナーである塩川浩司さんの依頼を受け、本のしおりを文京区の書店に配布しました。若者離れという共通点を持つ、銭湯と書店が手を取り合うことで少しずつ町の活気を取り戻せるのではないかと考えました。書店には一店舗ずつ交渉を行い、24店舗中計14店舗の書店に協力を頂きました。これらの経験から、地域内やSNSでの交流がプロジェクトの認知度向上に必要不可欠であると感じ、銭湯を通じたコミュニケーションを最も重要な要素と位置付けて広報活動を行っています。

引き続き、若者を中心とした新しい利用者層の誘引、“地域交流の拠点”として親しまれてきた銭湯の魅力の再発見とPRを進めていきたいと考えています。

ぜひ、文京浴場で“湯”意義な時間を過ごしませんか？

メンバー一覧

秋山由衣（跡見学園女子大学）	石原雄太（拓殖大学）	上原涼花（拓殖大学）
小澤初稀（跡見学園女子大学）	亀井優佑（拓殖大学）	國光ひな（跡見学園女子大学）
黒川莉央（跡見学園女子大学）	小山凪咲（跡見学園女子大学）	志田菜々未（拓殖大学）
関谷航介（拓殖大学）	高崎瑞生（拓殖大学）	富井胡花（跡見学園女子大学）
土居千風優（跡見学園女子大学）	長谷川実希（跡見学園女子大学）	平賀真一（拓殖大学）
古澤実怜（跡見学園女子大学）	星陽加（跡見学園女子大学）	宮崎慈野（拓殖大学）
森田羽菜（拓殖大学）	門戸智和（拓殖大学）	

五十音順

大黒湯さんの紹介記事
Instagramの投稿にて

鴎外の湯スタンプラリーの様子
Instagramの投稿にて

豊川浴泉さんの開店前の様子
Instagramのリールにて

ふくの湯さんの周辺スポット紹介
Instagramの投稿にて

文京区開催の「認知症サポーター養成講座」への3・4年ゼミ生の参加について

心理学部臨床心理学科　阿部洋子

1．文京区の高齢者あんしん相談センター駒込分室の先生方による特別講義

文京区開催の「認知症サポーター養成講座」を出張講義としてお願いするようになったのは、平成27（2015）年からであったかと記憶致している。「文の京、介護予防体操」を含め、3・4年生のゼミ生さんたちは、文京区から多くの刺激を与えて頂いている。ところが、新型コロナ感染症の蔓延のため、残念ながらこの3年間は御来校頂くことを控えていた。今年度、状況が少し改善されたことから、令和4（2022）年6月30日（木）に、文京区の高齢者あんしん相談センター駒込分室（駒込地域包括支援センター分室）の3名の先生方に御来校頂き、私のゼミ（臨床心理学演習ⅠA、ⅡA）において、御講義を給わった。私のゼミが高齢者の方を対象にしたゼミであり、認知症に関する様々な知識を学ぶと共に、回想法やユマニチュードなど認知症の方々を対象とする心理療法、対応の技法を学ぶゼミであるということから、本来の「認知症サポーター養成講座」に比べるとプラスアルファの内容を提供して下さるという御高配を給わった。多くの配付資料を頂き、パワーポイントや動画資料を御提示下さった。誠に感謝に堪えない。以下に学生たちの感想文の抜粋を記載させて頂くが、ゼミの中で既に説明したことであっても、それを具体的な現場経験を御提示頂くことで、強い印象を与えて頂き、知識の定着、あるいは忘れていたことを思い出すなど多大なプラスの影響を与えて頂いた。一方、私自身としては、既に講義で提供したはずの「地域包括支援センター」、「認知症と物忘れの違い」、「認知症者の人口比率の将来予測、人口の5人に1人」などという知識が定着していなかったことを知る機会にもなり、反省点ともなった。

2．学生たちの感想文

全文提示することは出来ないため、一部削除、改変した形で提示する。御講義から認知症についての知見を深めたということだけではなく、グループワークを通じて、人間を見る目の優しさが増したのではないかと感じる。多くの学生さんたちは、①認知症は誰もがなり得る身近な病気であることを知ることで、ネガティブ感情が低減する、②穏やかな雰囲気で対応したい、③さりげなく援助できる「人間杖」になりたい等を感じており、授業担当者としても身につけて欲しいと思っていることを定着させて頂き、有り難いと感じている。

① 日本における認知症の現状や認知症の症状、認知症になった時の対応・支援の仕方等を学ばせて頂いた。特に「誰もがなり得る身近な病気」という言葉が印象的だった。サポートをする御家族の方々のストレスやそれが原因で生じる虐待を防ぐためにも周囲の人々がサポートすることや理解ある姿勢を示すこと、ねぎらいの言葉をかけること等が重要であることも学ばせて頂いた。

② 認知症の原因疾患や症状に関して、特に「記憶の壺」に例えた説明は分かりやすかった。高齢者の人口が増え、しかも高齢者のみの世帯が増えていることから、より一層、地域のサポートが重要になっ

てくると感じた。私はコンビニエンスストアでアルバイトをしており、御高齢の方もよく買い物に来るので感情や気持ちに寄り添って、認知症サポーターとして７つのポイントを参考にお声がけしていこうと思った。

③ 社会が高齢化していく中で認知症とどう付き合っていくべきか、出会った場合どう対応していけばいいのかを、グループワークの中での話し合いや映像を通して知り、知識を活かせる余裕のある接し方が出来るように努力したいという思いが生まれた。心理学を学ぶ人間がどのように関わっていくべきかを考えるきっかけになり、とても貴重な機会を頂けた。

④ 配付資料に記載されていた細かいデータを見て、認知症について他人事だと考えていてはいけないと感じた。グループワークを行ったことで自分の意見と、他のメンバーの意見の違いを知ることが出来た。声のかけ方などの意見を共有したことでサポートの仕方が少し広がったように感じた。

⑤ 周りに認知症の方がいた場合、相談窓口を知っておいて紹介するだけでも大きな支えになると思った。他にも権利や法律なども重要で、知っていれば必ず当事者の方をサポートできると思った。高齢化が進んでいる今、私たち若い世代が支えていかなければ、高齢者が生活する環境は改善されないと思った。グループワークで話し合ったように、穏やかな雰囲気で、相手を尊重して接しようと思った。

⑥ 都内の高齢者人口の１割以上が認知症であり、急速に高齢者が増え続けているというデータからも、認知症の正しい知識を持ち、早めに受診し、相談できる場所を知っておくことが必要だと思った。文京区だけでも８つの高齢者あんしん相談センターがあり、そこで保健師・看護師・社会福祉士・ケアマネージャーなどの専門職の方が職員としていらっしゃり、色々な角度からアドバイスして頂き、相談できることは非常に心強いと感じた。私もさりげなく援助できる「人間杖」の1つになりたいと思った。

⑦ 駅のホームで彷徨っている方を見かけたことがあるが、勇気が出ず、声をかけることが出来なかった。この講座を受けてから、実際に困っていそうでも、困っていなかったとしても声をかけることが大事だと思った。

⑧ 認知症はメディアや書籍により、その症状やサポートの仕方、支援している団体や施設などが、一般的に知られるようになってきたが、いざ家族や身内が認知症になり、明日から介護するという状況下になったら早急に対応が出来るかどうかは分からないと思った。その際に高齢者安心センターや包括支援センターが近くにあると、家族や身内、本人が安心して今後の生活を送れるのではないか。また支え合いのネットワークを築くことで、一人暮らしの高齢者でも安心して生活ができ、孤立しなくなるのではないかと感じた。

⑨ 自分の祖父母や親に認知症の疑いがあっても、日常生活で大きな支障がなかったらまだ大丈夫だと思い、病院に行くのが遅くなってしまうと思った。様子が変わった高齢者がいた場合、警察や行政機関に連絡することは出来るので、先ず、自分は何が出来るだろうと考えて行動したいと思った。

⑩ 認知症予防や脳を鍛える方法についても学ぶことが出来た。グループワークで考えた折、人それぞれ声の掛け方や気にするポイント、行動の順番が違っていたが、常に温かい心を持って見守り、その場に合わせた適切な援助ができるように知識を持っていたいと思った。優しく接することで自分も気持ち良く感じられると思った。

地域交流活動を通した学生の学び

跡見学園女子大学マネジメント学部マネジメント学科講師　横堀応彦

1．はじめに

本学マネジメント学部マネジメント学科横堀ゼミでは現代社会とアートのつながりに関係する様々な問題について研究を行っている[(1)]。2022年度の3年生のゼミ活動[(2)]では実際にイベントを一から企画して、交渉、事前準備、実施までの全てのプロセスをゼミ生自身で行うことを目標とし、文京区内の保育園と連携してクリスマスに合わせたイベントを実施する企画を立案した。その結果MIRATZ本郷第二保育園のご協力を得て、2022年12月13日にゼミ生が保育園を訪れてクリスマス会に向けたオーナメントの制作を3歳から5歳の子どもたちと行った。本稿では、企画実施までの道のりを示した後、参加した学生の感想を紹介することを通して地域交流活動を通して学生が得た学びについて述べる。

2．企画実施までの道のり

今年度横堀ゼミの3年生には15名のゼミ生が所属しているが、15名のうち大坂あみさん、小松愛実さん、小室風樺さん、斎藤亜有華さん、杉原萌花さんの5名が企画メンバーとなり、夏休み中にオンラインで企画会議を4回実施した[(3)]。会議を経て文京区内の保育園と連携してクリスマスに合わせたイベントを実施する企画を立案し、本学地域交流センター新垣先生に企画書を送付して連携先の候補となる保育園の紹介を依頼した。その結果、旧伊勢屋質店での七夕イベントで連携しているMIRATZ本郷第二保育園（以下、MIRATZ）を紹介いただき、10月5日に企画メンバーの2名（小室さん、斎藤さん）と一緒にMIRATZを訪れて企画説明を行った。以下、企画メンバーが実際に作成した企画書を一部抜粋して紹介する。

ゼミ企画のご提案

［前略］コロナ禍で多くのイベントが中止される中、私どものゼミがきっかけとなり子供たちに楽しんでもらえる企画をプロデュースしたいという思いから、この度3年生のゼミで文京区内の施設と連携した企画を計画しました。学生が主体となって実施しますので何かとご不便をおかけする点もあるかと存じますが、ご検討いただけますと幸いです。

【企画概要】

◎ゼミ生が保育園に伺い、クリスマスをテーマにした企画を行う。

企画案①　廃材を利用したモザイクアートや、クリスマスツリーのオーナメントを作成

企画案②　（可能であれば）クリスマス会のようなものを開催

企画案③　冬休みに家族に渡すメッセージカードづくり

◎その準備過程などを撮影し、メイキング動画を作成する。（その際、プライバシーの関係上、子どもたちの撮影には十分配慮いたします。）　［後略］

このうち企画案の①と③は2022年12月13日にクリスマス会に向けたオーナメントの制作とメッセージカード作りを行うことになり、②は翌週の12月20日にクリスマス会を実施することになった。その後、ゼミ生は制作チームとクリスマス会チームの2チームに分かれ、各チームでガントチャートを作成してプロジェクト管理を行った。制作チームは廃材（トイレットペーパーの芯）を使用したクリスマスツリーの作成やオーナメントの事前準備を行い、クリスマス会チームはシューティングゲームの的作りや宝探しゲームの準備、手作り帽子の作成に取り組んだ。11月22日のゼミでは各チームがリハーサルを行い、内容について互いにフィードバックを行った。その上で作成した最終的なスケジュール案を保育園へ送付し、12月7日にゼミ生（前出の2名）が保育園を訪れて最終打ち合わせを行った。そして12月13日にクリスマス工作を行い、最後に集合写真を撮影した（写真1）。12月20日のクリスマス会はコロナ感染拡大の影響で中止となったが、ゼミで対応策を協議した上で、クリスマス工作の際に撮影した写真や動画をもとに記念動画して園に提供することにした。その動画は12月23日に園の関係者のみで行われたクリスマス会で上映された。写真2はゼミ生が制作したクリスマスツリーが園内に飾られ、ゼミ生の手作り帽子を被ってクリスマス会を楽しんでいる子どもたちの様子である。

写真1：クリスマス工作の際の集合写真

写真2：クリスマス会の様子

（提供：MIRATZ本郷第二保育園）

3．地域交流を通して学生が得た学び

（1）参加した学生の感想

12月の企画終了後、ゼミ生にはクリスマス会の振り返りレポートを提出してもらった。以下、その中から一部抜粋して紹介する。

・**学生A．** 新型コロナウイルスで思うように学校にも通えなかったので今回のゼミ企画はとても良い経験になりました。3.4.5歳児を相手にどうしたら喜んでもらえるのか、どのような作業だったらやりやすいかなど園児の立場になって考えることがとても大変だったと感じています。しかし、その分喜んで楽しんでくれた姿をみられて準備してきてよかったと感じました。

・**学生B．** 私は夏休みの企画会議の段階から参加したが、企画を通してゼミ生が一つのものを作り上げたい、コロナ禍であまりイベントに参加できない子どもたちに楽しんでもらえる企画を行いたいという目的を持って企画を考えてきた。その意識を持ちながら、今回は制作のみだったが、子どもたち

の楽しそうな様子を見られたことがよかったと思う。

・**学生C．**企画を一から立ててそれに向けての準備を行い実行することは初めての経験だったので、自分のためにもなったと思います。次に企画を行うときは、今回の反省点などを踏まえて取り組みたいです。

・**学生D．**クリスマス会の準備に入る前に、ガントチャートや予算書を作りましたが、それを更新しながら進めることができていなかったなと反省しました。今回制作チームとクリスマス会チームに分かれて作業をしていた中で、お互いの進捗の状況をしっかり把握できていなかったと思うので、またこのような企画ができた際にはガントチャートをしっかり更新しながら共有していければと思います。

・**学生E．**事前に園に訪問させていただいた時に提出した資料にはもっとわかりやすく具体的に要点をまとめる必要があったと思います。対面でのヒアリングが数回あったからしっかりと先方に伝えることができたものの、文面のみのやり取りとなっていたら今回のようには行かなかったと思います。こちらで用意する材料や必要な道具の用意について、やりたいと考えていることだけでなく、何をいつ行い、どのように準備を進めていくかを簡単に書いておくべきでした。当日の動きだけでなく、私たちの準備内容を記載することでより状況が見えやすくなったのではないかと思ったからです。

・**学生F．**反省点は、全員が内容や流れを理解できていなかったことです。企画から参加していた3人と、それ以外の人とで把握できている内容などに差が生じ、3人から何かを頼むことばかりだったので、全員が作り方や流れを把握しきれていませんでした。当日、予想外のことばかりでバタバタしてしまい、スムーズに行えなかったのが心残りであり、一番の反省点だなと思いました。情報共有して、全員が流れや手順を完璧に理解できていれば、負担が偏ることもなく、もっと良い流れで出来ていたのかなと思います。

・**学生G．**クリスマス会の準備では、どういったものだったら子ども達ができて楽しめるかを常に考えながらの構成を練りましたが、実際に3～5歳の子ども達がスムーズにできるのかが自分たちだけでは分からない部分も多くあったので、その点が一番難しかったです。リハーサルを通して、ゲームで投げるものは変えた方が良いなどの改善すべき部分も見つかり、リハーサルの重要性を改めて感じました。

（2）学生が得た学び

学生Aが指摘するように、2022年度の3年生は高校3年生の3月からコロナ禍が始まった世代であり、大学1年生と2年生の授業はほぼ全てオンラインで行われ、コロナの影響を強く受けた学年である。このような学年のゼミ生にとって、ゼロからイチを作り出す仕事を経験したことは、学生B～Cの感想にもあるように1つの成功体験として今後の就職活動に向けた大きな自信に繋がったと思われる。学生D～Gの感想には事前準備の反省点および今後の改善点が具体的に示されており、このような学びは卒業後どのような職業に就いたとしても応用できる教訓となったに違いない。

4．おわりに

このように学生にとって大きな学びの機会となった地域交流活動を行うことができたのは、本企画実

施にあたり多大なご協力を賜った中村文光子園長をはじめとするMIRATZ本郷第二保育園の皆様、新垣先生をはじめとする本学地域交流センターの皆さんのお陰である。この場を借りて感謝申し上げる。なお中止となったクリスマス会に代わる企画については、2023年1月のゼミで対応策を協議し、バレンタインをテーマとしたイベントを2023年2月14日にMIRATZで実施予定である。想定外のことが起きた場合の対応方法について実際に経験したことも、学生にとっては貴重な学びの機会となったに違いない。

注

（1）筆者がゼミを担当している2019年度から2022年度現在までの卒業論文の題目例は以下の通り。「若者の心を救うクリープハイプの音楽（*）」「声優のアイドル化現象」「乃木坂46から見る非アイドル層ファン獲得成功の鍵」「宝塚で上演される作品の傾向と動員数の変化」「ネット音楽進化論―ネット発アーティストの台頭が意味すること―（*）」「ゲーム内のボスキャラクターの悪意の喪失について」「2.5次元ミュージカル～次元の狭間に存在する金字塔～（*）」「ジャニーズオタクの行動心理」。このうち（*）印の論文はマネジメント学部の優秀論文審査で入賞したもの。

（2）授業科目名は「展開ゼミナールIA・IB」。毎週火曜日の1時限目（9：00～10：30）に文京キャンパスで開講。

（3）メンバーが輪番で各回の議事録を作成し、打ち合わせの内容はゼミ内で共有できる環境を整備した。

実践ゼミ
B-Rサーティワン アイスクリーム株式会社（東京都品川区）とのコラボレーション
新商品企画提案PBL

マネジメント学部マネジメント学科教授　細川 淳

マネジメント学部細川ゼミでは毎年度、B-Rサーティワン アイスクリーム株式会社（東京都品川区）（以下「B-Rサーティワン社」）とのコラボレーションにより「サーティワン アイスクリームの画期的な新商品を企画する」というテーマでPBL（Project Based Learning：課題解決型学修）を実施している。

毎年度、ゼミ生たちが3～4人のチームを組み、綿密に企画したサーティワン アイスクリームの新商品についてのプレゼンテーションを作成、B-Rサーティワン社の経営職や商品企画・店舗開発のマネジメント職の方々に本学新座キャンパスにご来校いただき、ゼミ生たちのプレゼンテーションをご講評いただいている。

最前線のプロの面前で企画プレゼンテーションを行うという、ゼミ生たちにとって緊張感あふれる場面であるが、ゼミ生たちは毎年度笑顔いっぱいでこの課題に挑んでいる。

プレゼンテーション終了後は、同社の皆さまが優勝・準優勝などの順位を決め発表する。そしてご用意いただいた賞品を授与していただく。ゼミ生たちは賞品に大よろこびの表情を見せるが、優勝を逃したチームはさっそく反省会を開いている。

1．PBLの位置づけ

細川ゼミでは「コア＋3」という学修目標を掲げている。「コア」とはゼミ生各自のアイデンティティの再発見と再定義であり、「＋3」とはその上に立った①クリエイティビティ、②ロジカル・シンキング、③関係性を築く力の養成である。ゼミのすべてのプログラムは「コア＋3」のうちの1つまたは複数を養成・開発するように組まれている。

「コア＋3」をバランスよく養成してやることにより、ゼミ生たちが学生時代だけでなく、むしろ社会に旅立った後にこそ自らの足で立ち、たくましく人生を歩んで行けるように訓練している。

サーティワン アイスクリーム新商品開発PBLでは「コア＋3」の全要素を各自が発揮して臨むことになる。訓練の成果を試す2年次でのハイライトである。

2．PBL実施までのプロセス

当ゼミでは春学期に筆者がブランド戦略およびマーケティングの基礎に関するレクチャーを行い、ゼミ生たちがPBLに取り組むための基礎知識を与えている。

これによりゼミ生たちはブランド・アイデンティティの枠組みを理解し、子供時代から慣れ親しんできたサーティワン アイスクリームがブランドとしてどう立脚しているかをあらためて認識する。続いてマーケティングの基礎を学び、「アイスクリーム」というジャンルでも複数の細分化市場が存在することを知り、その中で提案する新商品がどのような顧客をどのようなシチュエーションでターゲットとするのかという、企画立案の道筋を教わる。その上で製品、価格、販路、広告販促のマーケティング・ミックス（戦略）に結び付けていく。

3．PBL対象としてのサーティワン アイスクリーム

2年次秋学期のPBLの対象として、サーティワン アイスクリームが好適である理由がある。

まず、サーティワン アイスクリームが学生たちにはなじみ深いという点がポイントである。ほぼすべての学生がサーティワンを食べた経験があり「好き」という感情を持っている。つまり、PBLの入口としてのハードルが低いのである。

また、サーティワン アイスクリームは一部例外を除き、すべてサーティワン アイスクリーム・ショップで販売されている。したがってこのPBLではマーケティング・ミックス（戦略）のうち販路が固定されているため、ゼミ生たちは製品、価格、広告販促の3要素に集中して企画をたてることが可能となる。

ただし筆者は販路の企画提案を禁じてはいない。実際毎年販路提案をするチームが出てきている。

今年度（2022年度）では、丸の内・日本橋エリアへの出店を提案したチームがあった。これはオフィスで働くキャリア層に向けた企画で、商品提案とともに日本を代表するオフィス街への出店を提案した。今年度はB-Rサーティワン社の東日本の店舗開発の責任者にご参加いただいており、「丸の内、日本橋などのオフィス街はサーティワンにとっては未開拓エリア。今まで1店舗も出せていない。この企画で新しい市場機会に気づかせてもらって目からウロコが落ちた」と絶賛していただいた。

また2年前には一つのチームが建築設計ソフトを駆使して具体的な店舗レイアウトを提案した。同社の取締役人事部長にご参加いただいたが、「学生でここまでやるとは」と驚いておられた。

4．今年度（2022年度）の企画提案

以下に今年度の新商品企画提案の概要を紹介する。

チーム1　「エコでワクワク　マクロビアイスクリーム」

若い女性キャリア層は高糖質・高カロリーのアイスクリームを食べることに対する一種の「罪悪感」

を持っている。そこで、マクロビオティックに即した商品を提案。さらに独自のトッピングを選べるようにすることでシズル感を演出した。

このターゲット層はエコや社会性への関心が高いので「食べられるスプーン」を提供してプラスチックごみの削減に寄与するとともに、カップのQRコードから寄付サイトにアクセスできるようにした。

また上述のように丸の内・日本橋エリアを中心としたオフィス街への出店を提案した。

チーム２　「バタフライ・ローズ・マジック」

サーティワン アイスクリームの看板商品であるポッピングシャワーは、口中でパチパチとはじけるキャンディーの小さな粒をアイスクリームに混ぜ込んだ商品で、この遊び感覚が長年愛されてきた。しかし、サーティワンの「顔」として長くとどまりすぎた感は否めない。

そこで「第二のポッピングシャワー」として、トッピングソースをアイスクリームにかけることでアイスクリーム自体の色が変わるという視覚のワクワク感を演出した商品を提案。（実際の安全な食材を提案しているが、ここでは詳述を避ける。）企画立案に当たっては実際に複数のトッピングソースとフレーバーをかけ合わせて味覚を検証した。

チーム３　「頑張る大人へおくる癒しのひととき」

アイスクリームと言えば「甘い」というのが常だが、大人の顧客を想定してフレーバーとトッピング・スパイスのかけ合わせによって「甘じょっぱい」商品を提案。まずアイスクリームのみを食べて大人の味覚を楽しんだ後、トッピング・スパイスをかけると驚きの変化が楽しめる。

さらにこの商品とワインとのマリアージュも提示、おしゃれなおつまみとしての楽しみ方も提案している。

５．WIN-WINの効果

毎年度、このPBLを経た後にはゼミ生たちの「コア＋３」の力が増進している事が顕著に見てとれる。加えてプロの前でプレゼンテーションをしたという経験を経て、各自の中に自信が植え付けられている。

このPBLはB-Rサーティワン社の皆さまにとってもよい刺激となっているとの評価をいただいている。各年度のプレゼンテーション資料をPBL実施後にお送りしており、同社では商品企画部門その他に回覧をしていただいているとのことである。

同社役員の方から、「自分たちはアイスクリームづくりのプロである。しかしだからこそ固定概念や現実の制約条件に拘泥するあまり、発想が硬直化、陳腐化しがち。細川ゼミのプレゼンテーションを受けると、その硬直した発想をぶち破ってくれる」と評価していただき、毎年楽しみにして頂いていると

の事である。

ある年度ではひとつのチームがマシュマロを使った商品を提案した。このPBLには同社商品企画室長が参加していただいていたが「実はマシュマロを使った商品を企画したが、市場に投入してよいか悩んでいた。今日のプレゼンテーションを聞いて背中を押してもらった。デビューさせようと思う」とのコメントをいただいた。

またこのPBLは本学入学案内やホームページで紹介しているが、例年この記事を見て跡見への入学を決めたと筆者に伝えてくる学生がいる。本学の入学者確保に若干なりとも貢献できているのは光栄なことである。

秋期公開講座講師「映画祭制作現場から実践コミュ力を磨く」について

文学部コミュニケーション文化学科教授　松浦雅子

2022年12月3日、地域の方々対象の秋季教養講座「映画制作現場から学ぶ ～実践コミュニケーション力～」にて、講師を務めさせて頂きました。映画好きの高齢の方々を中心に集まって頂き、一緒に学ぶ貴重な機会を得ることができました。その内容を元に、異なる他者とのコミュニケーションにおける、“他者の視点”と“想像力の翼”ついて、ここにまとめてみたいと思います。

1．日本語なのに、なぜ、伝わらない？

私は今、文学部コミュニケーション文化学科で、様々な視点から、実践的な「日本語コミュニケーション」を学生達に教えています。我々日本人は、幼い頃から母国語として、日本語でコミュニケーションをしてきており、それは、当たり前の日常になっています。しかし、誰しも、そうやって長い間親しみ、使ってきた日本語であるのにも関わらず、「何故かうまく伝わらなかった」「コミュニケーションが難しい」と感じた経験があることと思います。それは、難しい仕事の交渉や会議の場だけではなく、普段の日常生活の中でも、頻繁に起こっています。

では、なぜ、親しみのある母国語を使いながらも、「コミュニケーション」がうまくいかないのか。今回は、そんな疑問を、「映画制作現場でのコミュニケーション」から、考察していきます。

2．映画制作現場でのコミュニケーション

私は、長年、映画やドラマ、演劇の世界で、作品を創作する現場にて、演出・脚本家として働いて参りました。映画の現場には、多い時は、総勢百名を超えるスタッフ達が集結します。それぞれの部門は、演出部、俳優部、撮影部、照明部、録音部、美術部、衣装部、ヘアメイク部、編集部、と専門の特殊なスキルを持ったスタッフ達が、それぞれのプロフェッショナルとして組を形成。一人一人が、役割も性格も年齢性別も、異なる集団です。

まさに、映像制作現場には、全く異なる背景や感覚、経歴や経験を持つ、それぞれのエキスパートが集結し、一つのゴールに向かって創作をしていきます。しかも、そのゴールの正解は、一つとは限らないのです。それぞれの部署から出てきた素晴らしいアイデアを一つにまとめ、時には対立し、時には融合しながらゴールに向かう、言わば、特殊な戦いの場とも言えます。

そんな中、いつも痛感したのは、相手の心の中の声に耳を傾けるという、「聞く力」の大切さでした。そして、本当に伝わるための「実践コミュニケーション力」の重要さです。どうすれば、お互いの強い個性を活かしながらも、尊重し、分かり合えるのか。母国語であっても、繊細な感覚を表現し他者に伝えることは、困難さを伴うことばかりでした。例えば、役者さんに、「もっと悲しい表情を」と演出するだけでは、何も伝わりません。登場人物が、どのような心情で、何故にその様な行動になっているのか

を考え、さらに例えば、凪の様な海の哀しさ等、喩えなども使って芝居を演出しながら、演技プランについて、俳優とコミュニケーションしていくのです。照明ひとつとっても、とても微妙な意図を伝えたい時が多々あります。強い、弱い、という量的なものだけではなく、太陽光のような力強い光で、ハイ（明るい部分）が飛び気味で、暗部とのコントラストをくっきりと出し、主人公の心の中を浮き彫りにしたい、というような指示をします。言葉で伝えにくい質的な微妙なセンスを、なんとか伝えたいと、言葉を生み出し駆使します。創作の現場では、このように、明確な量的指示以外の、もっと繊細で質的なコミュニケーションが非常に重要になってきます。

3．コミュニケーションという、「自己表現」

実は、この「伝わるための」最適なアウトプットという“表現”を探していく作業は、まさに、我々の日常でのコミュニケーションの方法と同じかもしれません。どうすれば、微妙な質的な気持ちまでを伝えることができるのか。もちろん、お互いの小さな誤解の上に成り立つのも、コミュニケーション。自分は伝えたと思っていても、他者に「伝わっている」というのとは大きな隔たりがあるのも、コミュニケーションです。だからこそ、それぞれの個性や背景や気持ちを、自分の言葉を紡ぎながら、「独自のコミュニケーション」として、私たちは、“表現”しなければいけないのです。またそこに、「伝わるコミュニケーション」の喜びが生まれるとも言えるのです。

スタッフ達は皆、ゼスチャーや表情等、様々な非言語をはじめ、オノマトペや多種多様なコミュニケーションを使いながら、なんとか、言葉にならないクリエイティブで繊細な感覚までも共有し伝え合うために、努力します。そんな混沌とした現場にて、毎回違うメンバー達と、協働してきた中で感じたことは、真のコミュニケーションとは、大変に複雑で困難を伴うものだということ。でも、だからこそ、伝わった時の嬉しさ、共感の喜びは格別とも言えるのかもしれません。映画は、スタッフ全員の思いを共有し合い、一つの作品になっていきます。全く違う人間達が、アイデアを出し合い、一つの作品を作っていく喜びが創作を支えているのです。これが、映画が「総合芸術」と言われる所以なのだと思います。

4．コミュニケーションは、“創造”である

映像制作現場でのコミュニケーションは、それぞれが、専門のプロフェッショナルであるということを認め合い、お互いをリスペクトするところから始まります。日常のコミュニケーションも、実は全く同じだと思います。皆、全く異なる感性や背景、気持ちや言語感覚を持っていることこそ、当たり前なのです。しかし、我々は、そんな大前提をたまに忘れて、何故、伝わらなかったのか悩みます。しかし、コミュニケーションにとって、一番大切なことは、まさに、“他者の視点”を持ち、相手への“想像力”を大きく膨らませることだと思います。相手の痛み、喜び、そんな心の中の声を想像する。私たちは、他者への想像力の翼を持ち続けることが、大変重要だと痛感します。

大学では、いつもの母国語である日本語を使いながら、どうすれば、他者に自分の意見や気持ちを、

しっかり伝えることができるかを、実践形式で教えています。事実を正確に伝えるだけでなく、パワーワードやキーワードを使って、その心情や背景、匂いまでを他者と共有できるための演習を行なっています。それは単に、日本語が上達するだけではなく、まさに、我々人間だけが持つ「クリエイティビティ」という想像力を思う存分に開発し、伸ばしていくことに他ならないと思います。まさに、コミュニケーションは創造なのだと思います。

この現代は、まさに、マニュアルのない新しいメディア時代と言えるでしょう。SNS、IOT、メタバース等の新しいメディアコミュニケーションが、我々のコミュニケーションのあり方を大きく変えようとしています。人と人との繋がり方・方法論が、未曾有の激変をしています。そんな、地球全体が一瞬にして繋がりながら、また他方ではコミュニケーションが分断しつつある時代です。だからこそ今、我々は、想像力の翼を大きく広げ、他者の視点を持ち、俯瞰でこの世界を見つめ直し、より良きコミュニケーションを創造していきたいと考えています。

「トラベルライティングアワード新座賞」への学生参加状況と今後
―「トラベルライティングアワード新座賞」設立の経緯を踏まえて―

観光コミュニティ学部観光デザイン学科　臺 純子

1.「トラベルライティングアワード新座賞」設立の経緯と推移

「観光を学ぶということ　第2回」（公益財団法人日本交通公社、2019,『観光文化』241号，pp.41-pp.43.）や「新座めぐり・トラベルライティングアワード新座賞」（新座市産業観光協会）によると、「トラベルライティングアワード新座賞」は、もともと立教大学観光学部交流文化学科の舛谷ゼミで行われていた「トラベルライティングアワード」や「学生奨励賞」に端を発している。

「トラベルライティングアワード」は、「トラベルライターの奨励を目的」として、日本語機内誌に掲載されたトラベルライティングから、優れた作品を表彰するゼミ活動として始まったという。ゼミ生が多くのトラベルライティングを読んで評価する活動を続ける中で、「自分たちも書いてみたいという声」があがり、「学生の紀行文を表彰する「学生奨励賞」が新設された」と紹介されている。こうした過程を経て、2017年、立教大学から新座市への提案により設立されたのが、新座市をテーマとした作品を学生が執筆し、優秀作品を選ぶ「トラベルライティングアワード新座賞」であった。その後の推移を表1にまとめた。

表1　「トラベルライティングアワード新座賞」の推移

回 数	年 度	応募作品数	新座賞 受賞作品数	跡見 入賞者数	跡見 学生 運営委員数	備考
第1回	平成29 (2017)	196	10	－	－	「トラベルライティングアワード新座賞」設立
第2回	平成30 (2018)	330	9	2	－	新座市産業観光協会主催に移行。十文字学園女子大学、跡見学園女子大学も参加
第3回	令和1 (2019)	423	10	2	5	学生運営事務局　開始
第4回	令和2 (2020)	411	12	0	5	コロナ禍により、立教大学のみ作品応募
第5回	合和3 (2021)	400超	12	2	5	(8月頃、前任者から担当を引き継ぐ)
第6回	合和4 (2022)	未発表	未発表	未発表	2	

出典：「新座めぐり・トラベルライティングアワード新座賞」https://www.niiza.net/twa/ から筆者作成

2017年度、第1回は、応募作品数196作品から、優秀賞10作品が選出されている。第2回目となる2018年度からは、新座市産業観光協会主催に移管され、立教大学舛谷ゼミのほか、十文字学園女子大学小林ゼミ、跡見学園女子大学村上ゼミが加わり、新座市内3大学すべてが参加する取り組みへと拡大した。さらに2019年度、第3回からは、3大学から学生運営委員を送り出し、応募作品を下読みして選考対象作品を絞り、表彰式の運営・連絡などで、自治体などとの調整に関わるなど、作品応

募に加え、地域連携の要素が加わった。

この企画の発案者である立教大学観光学部には、「観光文学４（トラベルライティング）」[(1)]という科目があり、観光広報・宣伝、旅行情報に関わる経験豊富な抜井ゆかり氏[(2)]が、実践的な教育・指導を行ってきた。この授業内で指導した400前後の作品の中から、「トラベルライティングアワード新座賞」への応募作品を学内選考する形となっており、ゼミ単位の参加というより、「観光文学４（トラベルライティング）」履修者の最終課題的な位置づけになっているといえよう。

2.「トラベルライティングアワード新座賞2021」の途中引継ぎ

跡見学園女子大学は、第２回以降、２名の「新座賞」受賞者を輩出してきた（表１）が、第４回2020年度は、コロナ禍により、学生が夏休みに新座市内に出かけることができず、作品応募を見送った。これは十文字学園女子大学も同様で、2020年度の作品応募は、立教大学のみであった。

前任者からの引継ぎによると、「「観光グランドデザイン」の履修生および、基礎ゼミ生（ほとんどが重複）の新座市の魅力再発見の課題レポート」として位置付けてきたとのことで、作品応募はゼミ生に限定されていない。しかし学生運営委員は、毎年５名のゼミ生が担当してきた（表1）。

2021年度、前任者の基礎ゼミは安島先生が担当されることとなり、ゼミ活動の一つである「大学生観光まちづくりコンテスト2021」[(3)]への応募指導は、安島先生と筆者で手分けすることになった。夏休み直前になって「トラベルライティングアワード新座賞」について、学生運営委員がすでに活動を開始していること、また作品応募については、ゼミ生全員に、夏休み中、現地取材、原稿執筆などを行うよう指導が行われていたこと、事務局への作品提出が９月末であることなどが分かり、当該ゼミのアカデミックアドバイザーであり、またトラベルライター経験があることから、市役所との連携窓口および学生に対する作品指導を、筆者が引継ぐことになった。

作品提出締切などがゼミ生に周知されていたとはいえ、トラベルライティングは、通常の大学講義科目のレポート課題などとは、対象の選び方・見方、文章の書き方、構成、言葉選びなどが大きく異なる。読み手が、書き手と同じ場面、空気を共有・共感できるように、そして、そこに行ってみたい、経験してみたい、と読者を誘い出す映像作品を撮影・編集するようなイメージで組み立て、それを文章のみで表現する仕事である。

そこで８月中旬に、Teams　を使って、トラベルライティングの特徴を説明し、９月に入ってから、８月末をめどに提出された原稿について、コメントをつけて返信し、再提出されたものをさらに添削する、などの指導を行った。そして10編の候補作品を選び、９月末に新座市シティプロモーション課に提出した。

その後、３大学の学生運営委員が中心となって、30作品を10作品に絞り込み、その後、新座市シティプロモーション課、新座市産業観光協会、各大学教員、関係者などによる選考を経て、最優秀賞、優秀賞、新座賞が決まるという流れで審査が進み、2021年度は、跡見学園女子大学参加者のうち、２名の作品が新座賞に選ばれた。

２名とも、最初に提出した原稿から、冗長な部分を削って、もっとも伝えたいことに焦点をあて、トラベルライティングの特徴ともいえる５感に基づいた表現を工夫して、再々提出しなおすなど、努力を

惜しまなかったことを紹介しておきたい。

3.「トラベルライティングアワード新座賞2022」参加状況

「トラベルライティングアワード新座賞2022」参加を継続することにしたが、担当する基礎ゼミでは任意参加とした。その理由としては、基礎ゼミの履修人数が少なかったこと、2022年度も安島先生が基礎ゼミを担当されるため、筆者が2クラスの基礎ゼミのアカデミックアドバイザーを担当することになり、2つのゼミ生が参加しやすいようにと考えたからである。

「トラベルライティングアワード新座賞2022」について、2クラスの基礎ゼミ生に説明し、学生運営委員は、それぞれのゼミから最低1名の希望者を募ることとした。2021年度、トラベルライティングの特徴を説明した際にも、当該年度の学生に説明したが、トラベルライティングで求められる文章力は、実は就職活動の志望動機や自己紹介をまとめる際にも、非常に役立つことを、企業の人事課勤務での経験から学んできた。そのため「トラベルライティングアワード新座賞」への作品応募は、単なるゼミ活動というより、就職活動にもつながるものであり、学生運営委員は、自治体や観光関連団体との連携を実体験するインターンシップ同様の機会でもある。

学生運営委員は、両ゼミから各1名の応募があり、ほぼ1年間にわたる活動を行ってきている。しかし残念なことに、作品応募については2名にとどまった。それぞれにコメントを返信したが、再提出に対応した学生はそのうちの1名のみであり、事務局への提出は1作品となった。

ただ、夏休み中、実家に帰省するため新座市を題材にすることはできないが、地元である秋田市の魅力を「トラベルライティング」でまとめてみたいと申し出た学生がおり、別途、添削指導を行った。以前から、将来、地元の情報発信につながる仕事をしたいと話していた学生だが、トラベルライティングに取り組む中、観光情報の発信について、さらにモチベーションが高まり、2022年秋学期から、筆者が知己のPR代理店で、観光情報発信の流れや仕事内容を実地で学んでいる。

4.「トラベルライティングアワード新座賞」参加継続のために

すでに2022年度の選考は終了したが、現時点では未発表のため、本稿で結果を記載することは差し控える。事務局からは、参加作品の母数が格段に多い大学の作品が受賞する割合が高い点について、疑問が呈されたという報告もあった。

2023年度に向けては、応募作品数を一定程度確保することを目指し、基礎ゼミのプログラムとして、「トラベルライティングアワード新座賞」全員参加を求める旨、来年度に向けた基礎ゼミ募集で説明した。

本企画が新座市のプロモーションに果たす役割だけでなく、学生自身の成長につながるという点を考えると、将来的にも継続的に参加できるような方法や仕組み、たとえば立教大学のように、トラベルライティングに関する講義科目を新設するなど、次期カリキュラム改訂に向けて、学部あるいは学科で検討していく必要があると考えている。

補注

（1）立教大学シラバス検索で遡れる2014年度以降、2019年度までの科目名は「トラベルライティング」であった。
（2）抜井ゆかり氏：株式会社トラベル・キッチン代表。編集ディレクター、観光広報アドバイザーとして、観光広報・宣伝に関するアドバイス業務なども行っている。
（3）「大学生観光まちづくりコンテスト」とは、2011年に開始されたコンテストで、観光庁、経済産業省、文部科学省、総務省、日本観光振興協会、日本旅行業協会が後援している。大学生を対象に、地域を活性化させる「まちづくり」企画の内容・プレゼンテーションを競い合うもので、毎年、いくつかの地域が対象地として指定され、主にゼミをベースとした学生グループが、いずれかの地域を選び、事前説明会出席・現地調査、地域との調整・連携などを行いながら企画を練り上げていく。教職員が指導することが応募要件となっており、学生だけで応募することはできない。

引用文献

（1）公益財団法人日本交通公社、2019,『観光文化「観光を学ぶということ 第2回」』、241号、pp.41-pp.43.
https://www.jtb.or.jp/tourism-culture/bunka241/241-07/（2023年1月13日閲覧）
（2）新座市産業観光協会、「新座めぐり・トラベルライティングアワード新座賞」）
https://www.niiza.net/twa/（2023年1月13日閲覧）

新座市北部第二地区地域福祉推進協議会主催「遊びの広場プロジェクト」への参加

新垣夢乃

1．参加の経緯とねらい

筆者は、2020年度より新座市北部第二地区地域福祉推進協議会（以下、北二福進協）の「遊びの広場プロジェクト」へ継続的に参加させていただいています。2021年度の秋学期からは、コミュニティデザイン学科のプロゼミの学生とともに参加し、2022年度も同様にプロゼミの学生たちと参加させていただいています。

「遊びの広場」は、「障がいのある子もない子もいろんな年代の人達と一緒に遊んだりお話したりできます。子どもたちが自由にのびのびと遊べる場を皆さんで作りませんか？」という目的を掲げた場です。

遊びの広場のポスター

2022年度は、学生たちに遊びの広場で「障がいのある子もない子もいろんな年代の人達と一緒に」遊べるプログラムを、遊びの広場に参加し、そこで見た・聞いた・話した内容から考え、実施していくという課題を設定してみました。硬い言葉でいえば、フィールドワークという調査・研究手法を学びながら、地域内でダイバーシティを考えていくという表現になるのでしょうか。それを硬い言葉のままで学ぶのではなく、実際の現場で考えながら、自分たちなりの調査手法を獲得してもらえたらということを考えています。

2．参加の様子

参加学生（コミュニティデザイン学科1年）

浅川沙耶、今井舞、北村純玲、髙野真央、長谷川依吹、横田日菜、川島夏希

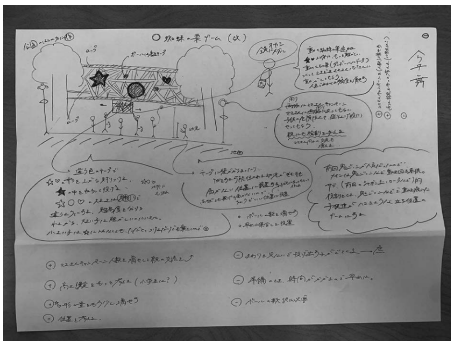
2022年度の秋学期は、筆者と学生の計８名で次のような日程で参加を計画しています。

10月23日（日）14時～16時30分：東裏公園（新座市大和田1-23-19）
11月27日（日）14時～16時30分：北野第二公園（新座市北野2-9-22）
12月25日（日）14時～16時30分：北野第二公園
1月22日（日）14時～16時30分：北野第二公園
2月26日（日）14時～16時30分：北野第二公園。イベント「きたにフェスタ冬」を開催。

2022年11月27日の遊びの広場の様子（子どもたちと学生が一緒に遊んでいる）

2021年度の「北二フェスタ」の様子（学生たちも参加してプログラムを実施）
（2021年度はコロナ流行のため北二フェスタは中止。遊びの広場のみを開催しました）

調査報告時の板書



ディスカッションを経て改善されていくプログラム

本稿を執筆する2022年12月22日時点では、学生たちは各自で遊びのプログラムを考え、遊びの広場に参加し子どもたちと一緒になって遊び、授業では遊びの広場でそれぞれが気づいたことを調査報告を行い、各自が遊びのプログラムを改善し、それをもとにプレゼンテーションとディスカッションを行っています。この流れを繰り返しながら、2023年2月26日に開催予定の北二福進協主催「きたにフェスタ冬」にて遊びのプログラムを実施予定です。

3．むすび

北二福進協は、新座キャンパスの位置する中野も含まれる、まさに地元の地域福祉推進協議会です。地域の一員として連携し活躍しながら、その活躍の場が学生たちの学びの場ともなればよいなと考えております。

末筆ながら、北二福進協の皆さま、新座市内の子どもたちには毎回あたたかく迎えていただき、誠に感謝を申し上げます。北二フェスタにむけて、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

新座市障害者地域活動センターふらっととの連携の記録

新垣夢乃

1．交流のスタート

新座市障害者地域活動センターふらっと（以下、ふらっと）は、特定非営利活動法人ふくしネットにいざが運営する自立支援施設である。ふらっとが目標とする自立は、「障がいがあっても地域で共に暮らすためには、福祉サービスを受け身で提供されることではなく、障がい者自身が社会参加していく意識を持てるように暮らしていくことです」（「ふくしネットにいざが目指すもの」http://fukusinetniiza.org/guide.html（参照2022年12月22日））と掲げられている。そこからは、地域のなかで共に暮らすこと、地域との交流が重視されていることがわかる。このふらっとは、跡見学園女子大学新座キャンパスから徒歩で15分の場所にあり、跡見はまさに地域の一員であるといえる。

ふらっととの交流がスタートした経緯としては、2022年5月に跡見学園女子大学心理学部の宮崎圭子先生、小栗貴弘先生よりふらっとの代表理事である井ノ山正文先生をご紹介いただいたことがきっかけとなっている。

2．交流活動について

2022年は、ふらっとが行っている農場ので活動、農場で育てた作物の収穫祭、クリスマス会などでふらっとと学生たちの交流を重ねてきた。

・6月15日：ふらっと農園 草取り活動（参加学生：4名、引率：新垣）
　内容：ふらっと農園の草取り活動をふらっと職員、利用者と共に実施。
・6月22日：ふらっと農園 草取り活動（参加学生：3名、引率：新垣）
　内容：ふらっと農園の草取り活動をふらっと職員、利用者と共に実施。
・9月20日：ふらっと農園 畝づくり＆サツマイモの植え付け活動（参加学生：6名、引率：新垣）
　内容：ふらっと農園の畑を耕し作物の植え付け作業をふらっと職員、利用者と共に実施。
・9月27日：ふらっと農園 畝づくり＆サツマイモの植え付け活動（参加学生：6名、引率：新垣）
　内容：ふらっと農園の畑を耕し作物の植え付け作業をふらっと職員、利用者と共に実施。
・11月1日：ふらっと収穫祭 運営側として参加（参加学生：2名、引率：新垣）
　内容：ふらっと農園で収穫した野菜や収穫したサツマイモで焼き芋をつくり販売するイベント。焼き芋調理や販売スタッフをふらっと職員、利用者と共に実施。
・11月2日：ふらっと収穫祭 運営側として参加（参加学生：1名、引率：新垣）
　内容：ふらっと農園で収穫した野菜や収穫したサツマイモで焼き芋をつくり販売するイベント。焼き芋調理や販売スタッフをふらっと職員、利用者と共に実施。
・12月17日：クリスマス会 運営側として参加（参加学生：2名、引率：新垣）
　内容：地域の保育園、集会所にてハンドベル演奏会を実施。会場への引率、受付、演奏をふらっと職員、利用者と共に実施。

6月15日の草取り活動の様子

11月1日の収穫祭の様子

12月17日のクリスマス会の様子

3．むすび

本学では新座キャンパス周辺で学生が参加できる社会貢献、地域交流活動は多いとはいえない。そのため今回のふらっととの交流は、新座キャンパスに在学する1、2年生の学生に貴重な機会をいただいたものであった。

改めて、ふらっとの皆さまには感謝を申し上げます。来年度も引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

新座市立児童センター主催「かえっこストリート」へのボランティア参加について

新垣夢乃

1．交流のスタート

2022年度から新座市立児童センターとの交流をスタートしました。交流のきっかけは、筆者が新座市北部第二地区地域福祉推進協議会主催の「遊びの広場」へ参加し、そこへ新座市立児童センターを運営するNPO法人新座子育てネットワークの市来陽子氏も「どこでも児童館@遊びの広場」として参加されたことで交流がスタートしました。この「どこでも児童館」とは、児童館の外で児童館が実施しているプログラムを提供する活動のことです。

この交流をきっかけとして、新座市立児童センターが主催する「かえっこストリート」へ学生と共にボランティア参加することができました。

2．かえっこストリートとボランティア内容

かえっこストリートは、子どもたちが「子ども店長」という経営者となり、各自不要になったおもちゃを交換したり、他の経営者のお手伝いをしておもちゃに交換可能なポイントをもらうというイベントです。子どもたちに経営思考を意識させ、なおかつSDGsにもつながるというイベントとなっています。

このかえっこストリートを開催する準備段階では、子どもたちの企画会議である「かえっこ会議」が3週間にわたって実施されます。そこで、子ども店長は収益目標の設定、商品や人員の設定などを大人と一緒になって考えていきます。

今回は、学生とともにかえっこ会議、かえっこストリートに参加し子どもたちとの会議、お店のスタッフなどとしてボランティア参加しました。

具体的なスケジュールは次のようになっています。会場はすべて新座市立児童センター（埼玉県新座市本多1-3-10）です。

（かえっこ会議）

・2022年8月7日（土）9時30分～11時：学生2名参加
・2022年8月14日（土）9時30分～11時：学生3名参加
・2022年8月21日（土）9時30分～11時：学生5名参加

（かえっこストリート）

・2022年8月26日（金）9時30分～15時：2名参加
・2022年8月27日（土）9時30分～15時：4名参加
・2022年8月28日（日）9時30分～15時：6名参加

かえっこストリートの様子
（出典：新座市児童センターTwitter（https://twitter.com/honda_j_center/status/1563114352135155712?s=06）参照2022年12月22日）

インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究
―アカデミックインターンシップにおける課題解決型学習を通して―

赤松瑞枝

1．はじめに

本学と2017年に相互協力に関する包括協定を結んだ埼玉県三郷市では、インクルーシブ公園[(1)]の整備を行っている。これは県内初の試みとして注目されており[(2)]、筆者及びゼミ生も共同研究者として携わってきた。その経緯と進捗状況について報告する。

2．共同研究の経緯と進捗状況

2－1．共同研究の経緯

筆者は、2020年2月から2021年3月に実施された「三郷市緑の基本計画」策定事業に、公園運営委員会委員長として参加した。事業終了後、策定後の課題や実現に向けての優先順位について討議したところ、基本方針2「花と緑を生かした愛着を感じる場所の創造」：資源のまちづくりへの利活用がフォーカスされ、中でもこれまで不十分であった「子どもの居場所づくり」[(3)]に資する公園整備に着手する必要性が指摘された。さらに具体的な方法を検討する中で、市担当者から国内には未だ事例が少ないインクルーシブ公園を整備・運営することを目標にしたいとの提示があり、筆者の専門分野（福祉住環境）との関連性が高いテーマであることから、共同研究を行うことになった。さらに、赤松ゼミ2年生が、福祉住環境や福祉のまちづくりについて学び、毎年キャンパス改良案等実践的な課題に取り組んでいる旨を報告したところ、ぜひゼミ生の意見も取り入れたいとの運びとなり、2021年度夏期に実施するアカデミックインターンシップを利用して、インクルーシブ公園の整備をテーマにした課題解決型学習行い、三郷市への提案を行うことになった。

2－2．課題解決型学習

2021年6月に、インクルーシブ公園の整備・運用を目指す三郷市役所みどり公園課の取り組み及びその一部としてインターンシップ実習を行うことについて、副市長から了解を得た。またみどり公園課に加えて、子ども政策室や障害福祉課とも協働することになった。

実習は新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、実地見学を除きオンラインで実施した。まず2021年8月10日に、顔合わせを行い、みどり公園課の業務と意義、働き方についてご説明いただいた後、ゼミ生が春学期の活動報告行った。その後「三郷市に整備するインクルーシブ公園に必要なものは何か」という課題とその取り組み方を提示いただいた。翌日、筆者及び学生1名が研究対象となる三郷市内の公園3箇所の実地見学を行い、各公園の特徴と現在の利用状況についての説明を受けた。この情報をゼミ全体に共有し、その後ゼミ生14名が4グループに分かれて、必要な情報収集や分析、検討を行い、グループごとに提案内容を説明する資料を作成した。

9月30日に三郷市役所の担当各位に対するプレゼンテーションを実施。車椅子利用者も遊ぶことが

できる遊具の種類や休憩できるベンチ、広場を囲むフェンス、名称等を提案した。後日詳細なフィードバックが文書で送付され、工夫できていたところに対して評価いただくとともに、より詳細に検討すべき点についての指摘がなされたため、秋学期のゼミを利用して再度情報収集等に取り組み、10月末日に最終提案資料をまとめて送付した。

2－3．その後の進捗状況

三郷市は2022年度予算に遊具購入費等を計上し、年度内の設計と工事の実施を確定した。学生の提案を基にイメージプランの素案が作成され、市内の障害児支援団体の関係者や障害児の保護者等に意見聴取。寄せられた意見を適宜反映させたイメージプランの改定を行った。さらに「インクルーシブ公園懇談会」が組織され、三郷市役所のみどり公園課、障害福祉課、子ども政策室の担当者を事務局とし、市内の子育て及び障害児支援団体関係者や筆者が構成員となって、改定されたプランやの公園の名称について検討したり、広報手段や利用にあたって考慮すべきことなどについて討議したりした。

年度内にもう一度懇談会が開催された後、2023年2月に工事が完了し、3月に開園する予定である。公表前のため詳細な記述は出来ないが、ゼミ生の提案は最終プランにも反映されている。

3．おわりに

ゼミでの学びが実際のまちづくりに反映されるという、教員にとっても学生にとっても大変貴重な機会に恵まれた。学生は責任の大きさを実感しながらも、固定観念にとらわれることなく情報収集に励み、意見交換を重ねてアイディアをまとめていった。プレゼンテーション時も緊張していたが、事前準備を重ねた結果、どの学生も質疑応答を含めて誠実に対応ができていた。学生の提案を最大限活かすため、筆者は説明資料をわかりやすく作成するポイントのみ指導することにしたが、三郷市から、障害のある子どもが楽しく遊ぶことができるように、また見守る親が安心して過ごすことができるように、どのグループも丁寧な調査のもと配慮のある提案がなされていた、との評価をいただくことができた。改めて具体的な課題設定と主体的な取り組みが、学生の成長に欠かせないことを実感した。

開園後は運営や実態把握調査等に引き続き携わっていく予定である。インクルーシブ公園のコンセプトが独り歩きせず、さまざまな立場の人に活用されるようになるには、開園後の取り組みが一層重要になる。市役所関係各位を始め、公園利用が想定される親子や、教育・福祉の専門家、近隣住民等と協働しながら、多様性を認め助け合い、支え合う経験を重ねられる空間づくりに努めていきたい。

補注

（1）障害の有無に関わらず、あらゆる子どもが家族や友達などと安全に、安心して遊ぶことができるよう設計、整備された公園のこと
（2）2022年5月13日及び2022年7月18日　東京新聞朝刊埼玉版に関連記事掲載
（3）無料または低額で利用でき、子どもが一人でも安心して行くことができる場の総称。

引用文献

・東京新聞デジタル版　https://www.tokyo-np.co.jp/article/177064（最終閲覧 2023年1月9日）https://www.tokyo-np.co.jp/article/190323（最終閲覧 2023年1月9日）
・三郷市みどり公園課「三郷市緑の基本計画」令和3年4月

福祉領域の実践家から学ぶコラボレーション授業

心理学部臨床心理学科講師　福島里美

1．はじめに

心理学を実践に活かすには、理論的学習に加えて、地域社会の現状や当事者のニーズを知り、自分に何ができるか自己吟味する学びも必要である。ここでは、地域の課題に取り組む実践家と心理学を学ぶ学生との交流を通して、福祉現場の専門家養成を目指した取り組みを３つ紹介する。

2．児童福祉現場におけるキャリア形成を学ぶコラボレーション授業

（1）子ども支援の最前線「児童相談所」の今を知る！ ―児童福祉現場の仕事と試験対策を学ぶ―

児童相談所に関心をもつ学生は多いが、児童虐待支援以外の役割や業務内容はあまり知られていない。また大変な職場とのイメージが先行し、児童相談所への就職は敬遠される傾向にある。こうした課題に取り組むため、心理学部と児童相談所開設を目指す文京区とで連携し、児童相談所に対する学生の理解を深める機会を設けた。「障害者・障害児心理学」の６月20日の授業に文京区の児童相談所準備担当職員を招き、100名強の学生が受講した。授業では、①文京区児童相談所設置に向けた取組み、②児童福祉司や児童心理司経験者による業務紹介、③職員課人事係による職員採用試験の案内を

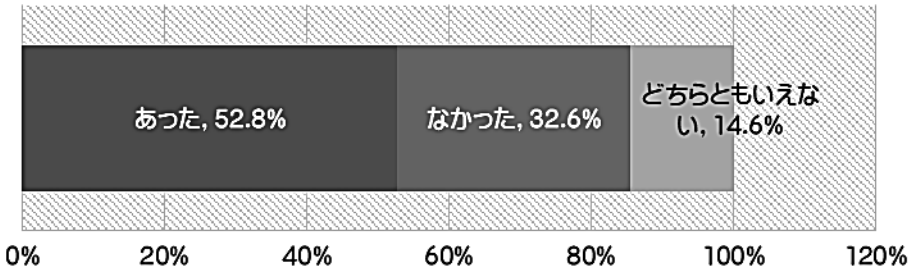


図１：「受講後、児童相談所のイメージに変化はありましたか？」への受講者の回答

伝えた。

授業後は、業務や公務員試験等について質問や相談をする学生の列が休み時間まで続いた。受講後アンケートでは、回答者89名中64名が「大変よかった」、25名が「良かった」と回答した。さらに48名が、新設する児童相談所の愛称を提案した。学生の記述の頻出語から受講前後のイメージを比べると、受講前は、「児童虐待」「保護」「忙しい」といったイメージに偏っていたが、受講後は、知的障害児の「手帳判定」や「公務員」の業務、他機関との「連携」など、現実的な児童相談所への理解が深まったことを示す結果が得られた。

（2）NPO法人チャイボラとのコラボレーション ―児童養護施設で心理学がどう活かされるか―

NPO法人チャイボラは、施設への就職希望者のサポートや、施設の人材確保、人材定着のサポートを行うなど、児童養護施設を含む社会的養護の施設の人手不足解消に取り組む法人である。福祉に関心をもつ学生の集まる福島ゼミでは、12月9日にチャイボラのスタッフを招き、児童養護施設の就職や仕事内容を紹介する時間を設けた。児童福祉に関心のある他の学生も受講できるよう周知し、計38名の学生が受講した。授業では、チャイボラの大山代表から児童養護施設の概要を学び、次に大学で心理学を専攻した児童指導員と、公認心理師資格を持つ治療指導担当から、施設職員のキャリア形成

写真1：児童養護施設の動画を用いた大山代表による講話

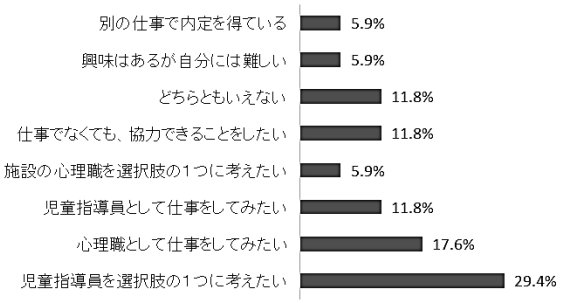


図2：児童養護施設で仕事をしたいですか？（受講後の回答）

や、心理学を仕事にどう活かすかについてお話をうかがった。

授業後は、「女性職員の妊娠出産に対する子どもの反応」や「子どもがネガティブな遊びを繰り返すときの対応」等、様々な質問が挙がり、丁寧にご返答いただいた。受講後アンケートでは、回答者の88.6%が「受講して良かった」と答えた。また回答者の31.6%が児童養護施設へのイメージが変わったと答え、「明るく家庭的な雰囲気」「親のいる子が多いと分かった」というイメージの変容が記述された。

3．医療福祉のテーマを扱う映画監督を招いたコラボレーション授業

心理学を学ぶと、様々な心身の課題に対し、心理面に偏った解釈をしがちである。「子どものこころとからだ」の授業では、多角的な視点から子どもの心身の課題を考えるため、11月28日に映像作家・映画監督の澤則雄氏を招き、子宮頸がんワクチンを取り巻くテーマの映画「私たちの声を聞いてください」を上映した。映画は、副反応に苦しむ当事者への取材から構成され、講話ではワクチン接種を推奨するPR動画も紹介し、ワクチンのメリットとデメリットを伝えた。アンケートに回答した124名のうち、計90%の111名が「大変良かった」「良かった」と回答し、受講後アンケートには様々な感想が書かれた。アンケート結果を澤監督にフィードバックし、「読み応えがあります。批判的な意見も数件ありますし、さすが跡見ですね」とお返事をいただいた。

写真２：澤監督の講話の様子

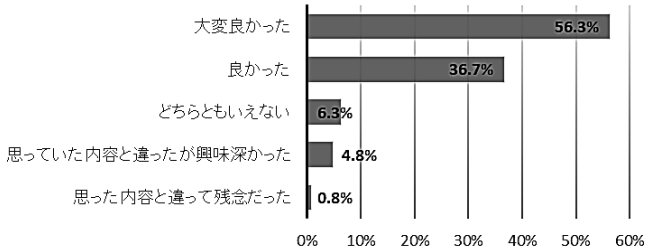


図３：澤監督の映画と講話後の感想

４．まとめ

上述のように、福祉現場の実践家や、社会的な弱者の声をアドボケイトした映画監督との交流を通して、福祉現場を取りまく課題を学生と共有した。繊細な課題も含まれる中、受講者は鋭い感性で各テーマと向き合い、地域交流の成果が得られたといえる。今後もこうした交流を通して、福祉現場の専門家養成につなげたい。

塩月ゼミによる令和４（2022）年度静岡県東伊豆町地域活性化事業報告
―「サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町 オリジナルカクテルレシピ開発事業」を中心に―

観光コミュニティ学部観光デザイン学科教授　塩月亮子
観光コミュニティ学観光デザイン学科３年　有井花織

１．はじめに

観光デザイン学科塩月ゼミでは、静岡県東伊豆町と跡見学園女子大学が令和元（2019）年11月19日に地域連携協定を締結して以降、ゼミ生（含むもとゼミ生）の有志により地域活性化事業に携わってきた。

昨年度は新型コロナウィルスの影響を受けたため、秋まではオンライン活動がメインであったが、なんとかコロナ禍の間隙をぬい、12月末には１泊２日の現地調査を行うことができた。そのときのモチベーションを維持したまま、今年度は昨年度から継続して行ってきた「サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町　オリジナルカクテルレシピ開発事業」という、サッポロビール株式会社と東伊豆町とのコラボレーションによる地元特産品のミカン「いずのはる」を用いた新たなカクテルの企画提案に力を注いできた。その成果が、令和５（2023）年２月の東伊豆町の旅館やホテル等でのオリジナルカクテル、およびオリジナルグラスの販売として実を結ぶこととなった。

そこで、本稿では、本プロジェクトの今年度の経過・成果と、令和４（2022）年９月に実施した現地調査[(1)]に関する報告を行う[(2)]。

２．「サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町 オリジナルカクテルレシピ開発事業」

令和３（2021）年夏頃から、我々は東伊豆町との連携女子大学として、「サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町 オリジナルカクテルレシピ開発事業」に携わってきた。今年度はオリジナルカクテル、およびオリジナルグラス提供に向けての準備が最終段階に入り、今まで以上に打ち合わせを重ね、我々学生もさまざまな役割を任せていただいた。

まず、令和４（2022）年８月29日（月）には、サッポロビール株式会社の小日向有里氏、小林弘明氏、東伊豆町役場の鈴木宏規氏、東伊豆商工会の山田将夫氏、二人の湯宿湯花満開の石島専吉氏、熱川プリンスホテルの嶋田眞一朗氏、東伊豆農協の方々、我々跡見学園女子大学10名の学生でZOOMにて打ち合わせを行った。オリジナルカクテル提供にあたっての今後のスケジュールや具体的なカクテルレシピ、オリジナルグラスの作成、学生の役割や発売期間の再確認が主な議題であった。そして、我々はキャッチコピーを含めたオリジナルカクテルの紹介文、POPデザインの考案と、各施設へのアポイントメントや連絡を任せていただいた。POPデザイン案作成にあたり、９月には学生自身が連絡を取り、東伊豆農協の野田政哉センター長や土屋明浩場長からオリジナルカクテルのメインとなる「いずのはる」のロゴを提供していただいた。東伊豆の魅力は何なのか、町のイメージはどのようなものか、その魅力やイメージをどうフレーズやデザインに落とし込むか等、各人が考えブラッシュアップを重ね、形にし

ていき、POPのデザイン案は22個集まった。そして我々学生で検討し、そのうち2案を最終候補として提出した。

約2年間かけてサッポロビール株式会社、東伊豆町、跡見学園女子大学が当事業に熱意を持って取り組んできた。もうまもなく今までの成果が実を結ぼうとしており、オリジナルカクテル、およびオリジナルグラスの提供が開始される。実現に向けてあと一歩、サッポロビール株式会社や東伊豆町の皆様とともに、我々学生一同も最後まで自分たちの役割を全うしたい。

3．現地調査

令和4（2022）年9月27日（火）～9月28日（水）の2日間にかけて行った、東伊豆町における現地調査について報告をする。参加学生は筆者（有井）を含め総勢7名であった（表1参照）。

受け入れてくださったのは東伊豆町役場観光産業課主任主事 鈴木宏規氏、同じく東伊豆町役場観光産業課 梅原伊織氏で、東伊豆町が用意してくれた車で観光地を中心にさまざまな場所を視察した。前回訪問時（2021年12月18日（土）～12月19日（日））は年末かつ様々な宿泊先を体験するという意図で5カ所に分かれて宿泊をしたが、今回は全員稲取温泉東海ホテル湯苑という宿泊施設にお世話になった。

表1：2022年度東伊豆町訪問参加者名簿

氏名	学年
有井花織	3年
石川華	3年
大塚日向	3年
千代田紗良	3年
星野日和	3年
三浦七海	3年
土方あかり	4年

（作成者：有井花織）

次に今回の訪問の行程を記す。

【令和4（2022）年9月27日（火）】

① 9：30～11：00　各自で熱海駅へ集合→役場の方が用意してくれた車で東伊豆町へ移動

② 11：00～12：00　東伊豆町に到着

・参加者の4年　土方あかりさんは卒業論文制作のヒアリングのため、旅館組合にて女将さんと面談

・他6名は女将さんたちに挨拶後、梅原伊織氏とともにSNS用の素材収集も兼ねて磯Sea Garden IKEJIRIや志津摩海岸周辺を散策

③ 12：10～13：30　東伊豆町稲取にある古民家カフェ DJARM12（ジャルーン12）にて昼食

④ 13：35～14：00　稲取岬を一望できるふれあいの森展望台を視察

⑤ 14：50～15：30　映画「アキラとあきら」の舞台であり、あいみょんのMVなどにも登場した東伊豆町風力発電所を視察

⑥ 16：00～17：30　ニコニコ会工房訪問（写真1）

・雛のつるし飾りの基本の形である桃、うさぎのどちらかを各人自由に選択し、制作を体験した

⑦ 18：00～　稲取東海ホテル湯苑にチェックイン

⑧ 19：00～　稲取東海ホテル湯苑にて夕食。金目鯛の煮付けや刺身など地元食材を使用した料理を

食す（写真２）

※夕食後、稲取高原にて星空観察の予定だったが、あいにく天候に恵まれず、残念ながら中止となった。

写真１：雛のつるし飾り
（2022年９月27日 土方撮影）

写真２：東伊豆町の郷土料理
（2022年９月27日 有井撮影）

【令和４年（2022）年９月28日（水）】

① 7：30～　稲取東海ホテル湯苑にて朝食→チェックアウト

② 9：05～9：15　稲取漁港を散策

③ 9：40～10：15　素戔嗚神社を視察（写真３）

④ 10：40～11：00　熱川温泉を散策（写真４）・SNS用の素材収集や魅力再発見を目的として

⑤ 11：00～　直売所こらっしぇ視察

⑥ 12：00～13：00　Manas Caféにて昼食

⑦ 13：50～14：30　細野高原を視察

⑧ 15：00～16：00　伊豆アニマルキングダム訪問（写真５・６・７）・SNS用の素材収集等

⑨ 18：00　東伊豆町役場の車で伊東駅まで移動・解散（時間の都合上熱海駅には戻らず）

写真３：素戔嗚神社
（2022年９月28日 有井撮影）

写真４：熱川温泉の大黒天
（2022年９月28日 有井撮影）

写真5：伊豆アニマルキングダム①
（2022年9月28日 有井撮影）

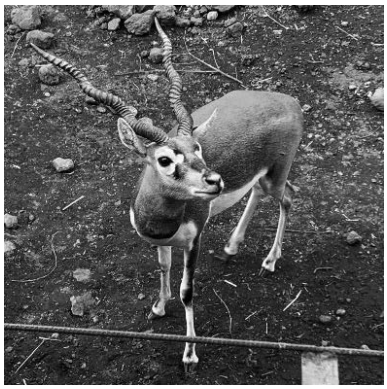


写真6：伊豆アニマルキングダム②
（2022年9月28日 有井撮影）

写真7：伊豆アニマルキングダム③
（2022年9月28日 有井撮影）

4．おわりに

以上、令和4（2022）年度の活動のうち、サッポロビール株式会社・東伊豆町とのコラボレーション事業の経過および成果、そして東伊豆町での調査を中心に述べてきた。これらの活動以外にも、ゼミ生たちは東伊豆町観光産業課の鈴木宏規氏にご指導をいただきながら、月に2回ほど開催されたオンライン会議への参加やInstagramへの東伊豆町紹介写真投稿、雛のつるし飾りの練習など、数多くの事業に携わった。また、昨年度のリーダーだった土方あかりさんは、今年度の卒業論文のテーマに東伊町を選び、「地域活性化における旅館と女将の可能性―静岡県東伊豆町を事例に―」を完成させた。複数の女将さんたちへのインタビューとその分析が掲載されている本卒業論文は、今後の東伊豆町の活性化を考えるうえで、大切な示唆を与えるものとなるだろう[(3)]。

今年度はコロナ禍の影響で、恵比寿にあるサッポロビール株式会社への訪問は断念したものの、夏季休暇中には東伊豆での調査を実施でき、令和5（2023）年1月末には、さらに2回目の現地調査を実施する予定となっている。この調査は本事業のプレスリリースを兼ねたものとなる（表2）。また、2月には女性人材交流会（企業で活躍している女性による会社や仕事内容の説明会。東神開発株式会社や株式会社POLA、コニカミノルタ株式会社株式会社、東急株式会社など複数の企業が参加）や、東京の二子玉川高島屋における東伊豆町PR事業活動などがなされる予定である。このような一地域をめぐる様々な活動は、ゼミ生たちが地元の方々の声を聴く現地調査の重要性や、産官学のコラボレーションによる地域活性化の可能性、他大学の学生との交流の意義などを学び、社会貢献活動に寄与したという自信をはぐくむ貴重な機会となると考えられる。

表２ カクテル連携事業（プレスリリース用）

サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町オリジナルカクテルレシピ開発事業

（サッポロビール株式会社・跡見学園女子大学・東伊豆町）

１　事業趣旨・目的

当町が主催した女性人材交流会をきっかけにつながりができたサッポロビール株式会社と、包括連携協定を締結している跡見学園女子大学が連携し町の特産品を使用したオリジナルカクテルの開発を産学官共同で行う。

町内宿泊事業者を中心に、大手企業とコラボレーションしたカクテルを開発し町の定番商品に育て上げることにより、宿泊客への特産品の PR 効果や大手企業と連携したことによる PR 効果により新規顧客の獲得を目指す。

２　事業内容

事業名　サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町オリジナルカクテルレシピ開発事業
内　容　産学官連携による特産品を使用したコンテンツ作り・販売
日　程　令和５年２月１日（水）～
参加者　町内宿泊施設経営者及び担当者
連携企業　サッポロビール株式会社
担当者　広域法人営業本部　部長　小林弘明
　　広域法人営業部　課長代理　小日向友里
連携大学　跡見学園女子大学
担当者　副学長　塩月亮子
実施主体　東伊豆町産業団体連絡会
協　力　町内宿泊施設

３　効果

・宿泊客に向けての特産品 PR
・特産品の新たな活用方法の創出
・宿泊施設での提供によるカクテルの定番化（認知度 UP）
・大手企業とのコラボレーションによるプロモーション効果
・産学官連携強化

４　参加事業者

施設名	代表者名	組合名	備考
熱川プリンスホテル	嶋田愼一朗	熱川温泉旅館組合	
ふたりの湯宿　湯花満開	石島正和	熱川温泉旅館組合	
志なよし	池田亮馬	熱川温泉旅館組合	
石花海	定居宏康	稲取温泉旅館組合	組合長
銀水荘	加藤晃太	稲取温泉旅館組合	
東海ホテル湯苑	瀧大輔	稲取温泉旅館組合	
水生の庄	上嶋寿男	稲取温泉旅館組合	

5　プロジェクトメンバー

組織名	出席者
サッポロビール株式会社	小林明弘　渡辺直人　小日向友里
跡見学園女子大学	塩月亮子　塩月ゼミメンバー
東伊豆町産業団体連絡会	
JA ふじ伊豆	野田政哉　土屋明浩
一般社団法人東伊豆町観光協会	井坂浩樹　前田陽司　青嶋優太郎
東伊豆町商工会	山田将夫
稲取温泉旅館組合	石花海、銀水荘、東海ホテル湯苑、水生の庄（松田公留美、髙村和美）
熱川温泉旅館組合	熱川プリンスホテル、ふたりの湯宿湯花満開、志なよし
稲取温泉旅館組合　女性部	定居比佐子、加藤早苗、加藤央美、瀧悦子、村木さとみ、鈴木きよみ、村木友香
東伊豆町	山田義則　加藤宏司　栗田將　鈴木宏規

（東伊豆町役場作成）

注

（1）令和5（2023）年1月29～30日にも、今年度第2回目の現地調査が実施される予定である。

（2）本稿の2章と3章は塩月ゼミ3年生で本プロジェクトの学生リーダーである有井花織が執筆し、それ以外は教員の塩月亮子が執筆した。

（3）本卒業論文執筆に当たり、インタビューを設定・同席してくださった東伊豆町観光産業課　観光商工係　主任主事の鈴木宏規氏をはじめ、貴重なお時間を割いてインタビューに答えてくださった「いなとり荘」女将の村木さとみ様、「稲取東海ホテル 湯苑」女将の瀧悦子様、株式会社喜久多グループ（「石花海」）女将の定居比佐子様、「銀水荘」若女将の加藤央美様には、指導教官として心から感謝申し上げます。

大井沢観光マップ作成プロジェクト実施報告

観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授　土居洋平

1．はじめに―プロジェクト実施に至る経緯―

大井沢は、山形県西村山郡西川町の山間部にある一地域（大字）であり、筆者が前任校の時代から長く教育・研究のフィールドとしてお世話になってきたところである。また、大井沢を含む西川町は、2015年度に本学と包括連携協定を締結しており、町内では本学学生が活動を行う機会が多い。実際、筆者のゼミナールでも、大井沢や町内他地域と連携した活動を継続的に実施してきた。しかし、コロナ禍の影響を受け、2020年3月以降、一旦、全ての活動がストップしてしまった。とはいえ、2020年度中もオンラインを用いた協議等は継続し、前号に詳細を記したように、2021年度にはオンラインを活用した活動が再開している。具体的には、西川町の新しいお土産品を学生目線で企画し、それを町内の事業者が開発・試作提供するというプロジェクトが行われた。

2021年度の活動そのものはオンラインを用いて行うもののみで、実際に学生が町内を訪れるということはなかった。ただし、秋学期以降、筆者が単独で西川町内を訪れ役場、観光協会、商工会等の関係各所とお土産品開発プロジェクトの実施調整を進めてきた。その際、2022年度からは、教員だけでなく学生も含めて対面での活動を再開する方向で相談・検討を行ってきた。そのなかで、2022年度に大井沢の新たな観光マップ作成が検討されていることから、この作成への協力が求められたのである。

2．プロジェクトの概要

大井沢観光マップ作成プロジェクトは、西川町の補助事業を大井沢区（地域自治組織）が受託する形で実施しているもので、大井沢の新しい観光マップを2022年度中に作成するプロジェクトである。既存のパンフレットは、10年以上前に作成されたものであり、地区内の新たな動きが必ずしも反映されたものではないこと、また、この間の情報通信環境の変化に対応していないことから、今回の企画が立ち上がった。本学コミュニティデザイン学科土居ゼミナールでは、この活動に協力し、移動・滞在費について補助事業からの支援も得ながら、観光マップ作成への協力を行っている。具体的には、新しい観光マップの基本デザインの提案、大井沢関係各所への取材と観光マップのコンテンツ作成、印刷用のデータの仕上げを学生が中心となって行っている。

3．プロジェクトの経過と観光マップの作成

2022年度も上半期は、本学でもゼミ等の一部科目をのぞいて学籍番号の奇数・偶数に分かれた半数登校であったこともあり、ゼミ内でも遠隔地で大規模に活動を再開する機運はいまだ醸成されていなかった。ただ、学期開始以降、新型コロナウイルスの感染者が減少した時期がある程度続いたことや、

規定に則った感染対策を施せば遠隔地での活動も認められる可能性があることから、次第に、学生の中でも遠隔地での活動を希望する者が増えていった。

また、西川町においては４月に町長選挙があり、新たに40代の若手町長が誕生して、次々と新しい活動が打ち出されていること、また、同じ時期に大井沢区においても区長の交代があり、大井沢において新たなプロジェクトを推進する機運が高まっていることもあり、夏前頃から学生が訪問することを前提にしたプロジェクトの実施が検討された。

（1）プロジェクト打合せと拠点整備

まず、６月中旬に筆者と小人数の学生で大井沢区を訪れ、大井沢区長から、観光マップ作成に向けた地域の現状についての講義を対面で受講した。また、学生は大井沢各所を訪れ、まずは地域の様子や魅力を体感した。また、コロナ禍前に使用していた旧教員宿舎の清掃等を行った。この旧教員宿舎は、大井沢小中学校が廃校する前は、同校に勤務する教員が学期中に長期滞在していた施設で、現在は、大井沢区長が個人で所有している。コロナ禍前に、ここを改装して学生が気軽に宿泊できるようにリフォームしており、今回は、再度使用できるようにするとともに、コロナ禍ということもあり、適切に距離をとって滞在できるような準備等を行った。

写真１．区長から説明を受ける学生たち

（2）大井沢区での地域行事への参加と打合せ

その後、７月に秋学期の授業形態レベルが引き下げられ、完全対面を基本にするということが公表されたこともあり、遠隔地での活動を希望する学生がさらに増加した。そこで、７月下旬の地域保全活動（草刈り）や９月の例大祭に筆者と８～９名の学生が参加し、大井沢区の方々や同じく外部から来ている他大学の学生とも交流を深めた。また、そうした行事の前後に、観光マップ作りに向けた打合せを行い、具体的な観光マップ案の制作に向けた調整を行ったり、大井沢の新しい取組みの体験等を行った。

写真２．新しい取組み「こけ玉づくり」体験

（3）マップ案の作成・検討と取材

その後、秋学期がはじまると、ゼミナールの時間も使っての観光マップの具体的なデザインの検討に入った。大井沢を訪れたことのある学生がバランスよく３つの班にわかれ、具体的なプランの検討を行った。検討にあたっては、ふるさと回帰センター（有楽町）等も訪れ、他地域の同種の観光マップの特徴分析なども行われプランを練り上げていった。そのうえで11月初旬に、大井沢区から区長ら４名を本学文京キャンパスに招き、学生による観光マップ案の提案と調整が行われることとなった。結果、３案の各々の特性を活かした１案へと調整が図られ、11月中に基本的なデザインの詰めの作業が行われた。その後、12月初旬および１月上旬に、学生５名が大井沢を訪れ、掲載予定事項に応じた追加の取材を行っている。

（4）マップの仕上げと納品

この原稿を執筆している１月上旬現在、追加取材をもとに学生が観光マップの仕上げの作業を行っており、２月中旬には印刷用の納品データを大井沢に提出できる予定となっている。納品後、大井沢側での内容確認の後に校正を行い、年度内に印刷が完了する見込みである。

４．活動を振返って

今回は、コロナ禍を経て久々の、筆者のゼミでの遠隔地での地域活動となった。当然、以前とは異なる感染対策が必要であり、大学の指針を参照しながら具体的な対策を詰めていった。ただし、遠隔地での活動は、食事や入浴、睡眠等を学生が共にすることになり、滞在時間の経過とともに感染対策への意識が希薄になることもあり、対策の徹底という点では、課題がまだ残るものとなった。

また、３年振りでの西川町内での活動ということになり、以前に町内に訪れたことのある学生は殆どが卒業しており、大井沢の地域の方々と学生との関係はまた一から構築するということになった。その点は、ある程度は想定していたことではあったが、当然のことながら、これまで先輩から後輩に受け継がれてきた遠隔地での滞在ノウハウ・慣例なども失われていた。例えば、過去、初めて大井沢に行く学生の多くは、他の地域活動で既に知り合いの先輩等に、持っていく道具や気を付ける点等を確認したようであったが、今回は、そうしたノウハウは失われており、また、筆者もそうしたノウハウが失われているという点に気づくのが遅れ、現地で急遽対応が必要になることもあった。

とはいえ、今回のプロジェクトの中で訪問を重ねる度に、地域住民と学生との関係や滞在ノウハウは再度、蓄積されはじめている。また、今回の活動をもとに、2023年度以降の協働の活動なども検討されつつある。2022年度の活動は、ウィズコロナやアフターコロナに向けた活動の試金石となっており、2023年度以降は、新しい形で遠隔地での活動が展開できるものと考えている。

青森・下北＆函館　観光分野での活動視察と交流の旅について

観光デザイン学科教授　磯貝政弘

観光を学ぶ学生にとって「現地での経験」に優る学びの場はない。といっても座学が無意味ということではない。座学を通して得られる知識を、自分の思うままに使えるようになるまで理解を深めるためにそれはあると思う。この思いを実践する試みとして、2018年から2年連続してハワイへのスタディツアーを催行した。

ハワイを旅行先とした理由は、観光地となるまでの歴史の普遍性と現在の州政府が進める観光政策の「観光地としての持続可能性」を学生たちが体験を通じて知ることが出来ると考えたからである。そのために、出発前に事前学習会を開催し、研究者や事情に精通した実務家による講義を受講させた。

こうして一定の予備知識を得た学生たちには、さらに、ハワイ滞在中の全日程で現地の大学生をリーダーとするグループ行動を課すことにした。このことによって、観光地としてのハワイを観光客の視点からだけではなく、ハワイで暮らす生活者の視点からも理解が進むことを期待した。観光スポットの魅力を知るだけではなく、その土地の風土、歴史によって形成された固有の生活文化への関心が芽生えることで、ハワイという“世界”への理解が深まることを狙いとしたのである。

この考え方は、「青森・下北＆函館」ツアーを計画する際にも踏襲したつもりである。

このツアーの計画は、2年生の基礎ゼミナールにおいて練り上げていった。

10名のゼミ生に対して、旅行先を青森県にしようと提案したのは私である。青森県ならではの風土や文化、歴史の特異性を実体験を通じて知ること、過疎と経済的な低迷に喘ぐ県内各地の村や町を元気にしようと献身的な（ただし、楽しみながら）活動を続ける個性的な人たちを学生たちに紹介したいと思ったからである。そして、私が最初に提案したのは、三内丸山遺跡から始まり、下北半島と津軽半島を巡る3泊4日の旅であった。

しかし、これをたたき台にして学生たちとの議論を重ねる間に。津軽半島は諦めて、下北半島の大間からフェリーで函館へ渡る案に変更となった。「学びだけの旅では面白くない」という学生たちの、当然といえば当然の要望を受け入れることになったというのが実情であるが、函館と対比することで青森県の観光地としての課題が明瞭になったという点で、学生たちの主張を認めたことは、結果としてよかったのだと考えている。

では、このツアーの日程の概要をここで紹介する。

9月12日（月）：新幹線で青森へ。ホテルにチェックイン後、古川市場で「のっけ丼」の昼食。ねぶたの優秀作品が展示される資料館ワラッセ見学後、青森県庁会議室にて観光担当の県職員から「青森県の観光の歴史と現況」についてレクチャー＆意見交換。

9月13日（火）：貸切バスにて恐山を見学し、その後は新幹線函館延伸を契機に生まれた青森県庁の「青函海峡交流圏構想」を通じて活動を開始した「マグロ女子（通称マグ女）」の強烈な個性と出会う旅。第一のマグ女は食育コミュニケーター、下北の魅力づくりコーディネーターとしてむつ市で活動する峯里砂子さん。峯さんのスタジオで調理実習と青森の人々

の暮らしについて話を聴く。続いて下風呂温泉で木工業を経営する坂本愛さんのガイドで温泉街散策などを巡る「潮風散歩」。水槽を泳ぐイカに触れる体験にも興じる。宿泊は本州最北端、マグロで知られる大間。

9月14日（水）：マグ女の代表格である島康子さんの「まちづくりゲリラの観光まちづくり道場」に参加。大間観光とマグロ丼の昼食後、フェリーターミナルで函館から到着した船客に大漁旗を振って出迎える歓迎セレモニーを行う。

以上の日程を終了し、青森に別れを告げ、3時間の船旅を経て、夕刻の函館に到着。

ホテルの部屋へ荷物を入れると、さっそく全員揃って市電に乗り込み、大急ぎで駆け付けたのは函館山山頂である。夜景は、やはり学生たちにとって函館旅行のハイライトであった。

函館山の展望台は、9月の平日にもかかわらず観光客で混雑を極めていた。気温も東京の真冬並み。ついさきほどまで歩いていた大間の町から下北半島へと続く黒い影を見つけて大騒ぎした後で、逆方向に目を転じるとそこには独特の形に広がる函館の夜景がまぶしくきらめいている。下北の黒い影との落差は、大いに学生たちの心を大いに揺さぶったことと思う。

翌15日は15時過ぎの函館駅出発まで自由行動とした。

五稜郭へ出かけ、五稜郭タワーから間近に横たわる下北半島を眺望した学生もいれば、八幡坂、赤レンガ倉庫街などを歩き回ったり、朝市に出かけたりした学生もいた。時間がいくらあっても足りない、と思わせるだけの豊富で多彩な観光資源が揃った観光地として函館の評価が定まっていることを改めて実感させられたのではないだろうか。一方で、学生たちの青森は、観光という観点からどのように位置づけられたのだろうか。

学生たちにはツアーを通じて考えた青森の観光地としての課題や「マグ女」の活動に関する感想などをレポートにまとめ、9月末までに提出することを求めていた。

レポートに示された内容のなかで、ほぼ全員に共通して言及されていたのは、豊かな自然、ねぶたの迫力は認めるものの、愉しみ、賑わいという点で青森市、下北半島ともに函館とは比べようもない、という評価であった。テーマパークのように、楽しく魅力的な観光スポットが揃った函館に対して青森には何もない、というのである。

青森市「ねぶたの家　ワ・ラッセ」を見学する学生たち

大間フェリーターミナルで、大漁旗を振って到着する観光客をで迎えするイベントに参加した。

青森港に出来たばかりの砂浜で集合写真

遠慮がちにとはいえ厳しい評価を下された青森県ではあるが、大間で泊まったホテルに程近い漁港の防波堤から、海峡を隔てて横たわる北海道の緩やかな山並みの向こうに沈む陽に見入る学生たちの姿を目の当たりにして、その感性の瑞々しさに心打たれたことをここに書き留めておきたい。また、マグ女として活動する３人の女性たちと共に過ごした時間も、短いものではあったが貴重な体験として学生たちの心に深く残ったようだ。これだけでも良しとしたいところであるが、もう一つ、コロナ禍の２年間には望むことが出来なかった、ゼミという場を通じての強い仲間意識を生み出すことが出来た点でも、ツアーを実施したことには大きな意義があったと思っている。

最後に、このツアーを計画するにあたり、青森県内の日程調整、宿泊及び交通機関の手配、そして何よりも３人のマグ女との交流プログラムのコーディネートを、旅行会社「また旅くらぶ」に委託したが、この会社をほぼ一人で切り盛りする高木まゆみさんもまたマグ女の一人である。高木さんには、2017年２月にも「地吹雪体験」ツアーをコーディネートしていただいた。地元に密着し、地元の情報を知り尽くした旅行会社の存在がなければ、今回のようなスタディツアーを計画することは難しかっただろうと思う。この場を借りて感謝の気持ちを記しておく。

また、学生たちの学びの機会を提供していただいた青森県庁には、学生たちが書いた旅行後のレポートを基に報告書を作成し、フィードバックした。観光行政を推進するうえで、何らかのヒントをそこから読み取っていただけることを期待している。

第３回「文の京書道展」開催報告

文学部人文学科教授　横田恭三

１．はじめに

３年前、中国武漢から始まったコロナウイルス感染が流行し、人類を脅かすパンデミックとなり、多くの機関や人々が苦しめられました。本学でも例外ではなく、地域の交流活動の多くが中止や延期、あるいは縮小を余儀なくされました。昨年度よりある程度の活動が許可されたため、「文の京書道展」を開催し、ようやく３回目の展示を無事に終了することができましたので、ここにご報告します。

２．２カ所の展示会場

例年と違うことは、展示会場を２カ所に分けて、展示期間にも長短が設けられたことです。というのも、当初、文京シビックセンターの地下１階にあるアートウオールだけで開催する予定でしたが、そもそもこの展示スペースは、若手芸術家を育成するために設けられた壁面であることから、当局より30歳以上の作家は参加できないとのお達しを受けました。この点に関して比較的緩やかだった昨年は我々書道科教員の作品４点を展示しましたが、これは例外中の例外であって、本来は避けなければならないことであることが分かりました。たまたま地域交流課の小又さんから、1階ギャラリーシビック（展示室1A）に展示の空きができたことを知らせていただき、1週間という短期間ではありますが、急遽、文京アカデミア講座受講生と我々書道科教員の作品、さらに招待高校の作品を、本学学生の作品と切り離して展示することにしました。招待する高校生の作品を一緒に展示する理由は、会場に施錠が義務付けられていて、管理がきちんとできるためです。したがって、会期は以下の二つに分け、それぞれ展示しました。

Ⅰ.「文の京書道特別展」

目　　的：①関東を中心とする主な高等学校に対する本学教職課程（書道）の認知
　　②文京区との連携による生涯教育推進及び社会貢献
会　　場：文京区シビックセンター　一階　ギャラリーシビック（展示室1A）
展示期間：7月3日（日）～7月7日（木）
開館時間：7月3日（日）午後1時～午後5時
　　7月4日（月）～7月6日（水）午前10時～午後5時
　　7月7日（木）午前10時～午後4時
作品点数：30点
搬　　入：7月3日（日）9：30～12：00
搬　　出：7月7日（木）16：30～18：00

出品者

①本学書道科担当教員の作品（4点）

②有力高等学校生徒（こちらで依頼、埼玉３校、千葉１校）各１点＝４点　表具した作品

③文京区アカデミー講座受講生　八つ切りサイズの用紙に書いたもの（18点）、書き初め用紙サイズに書いたもの（2点）合計20点

出品者名簿（敬称略）

アカデミア講座生

村田光代　創作「精誠所至」　住野知恵子　創作「莫笑人短」　海野　正　創作「莫笑人短」
小松いづみ　創作「春満乾坤」　田中啓子　創作「鴻飛鶴舞」　安間一雄　創作「全面勝訴」
平尾容子　創作「江流有声」　渡邉嘉之　創作「好古以求」　芳野由美　創作「江流有声」
岩越さかえ　創作「好古以求」　生田教夫　創作「「好古以求」　小野田一枝　創作「心気平和」
大津守史　創作「江流有声」　小田俊江　創作「鴻飛鶴舞」　名波典子　創作「温故知新」
織田昌子　創作「温故知新」　滝沢晴美　創作「温故知新」　桑原一瑛　創作「春満乾坤」
中山恵里子　創作「心気平和」

＊アカデミア講座受講生の出品は希望制にしましたが、ほとんどの方が参加されました。

〈高等学校の招待作品〉

埼玉県立大宮光陵高等学校３年　松田日菜　臨　光明皇后〈樂毅論〉

「夫求古賢之意、宜以大者遠者先之。必迂廻而難通、然後已焉可也。今楽氏之趣、或者其未尽乎。」

埼玉県立坂戸西高等学校３年　仲田柚稀　臨〈曹全碑〉

「臨槐里。感孔懐。赴喪紀。嗟逆賊。燔城市。特受命。」

埼玉県立松山女子高等学校３年　高野結花　臨　伝小大君〈香紙切〉

「春のはじめころ　よしのぶ　はるかぜのふくときがたのこほりうすみ　そでのたもとをけさやとく覧」

千葉県立国府台高等学校３年　水無瀬心花　臨　呉昌碩〈行書自作詩軸〉

「文曰。鉄老詩如枯木禅、妙于情出天然。商量听雨听風去、満眼江湖同放船。一官匏系鬓蒼然、著作無多信可傳。十載揚州応夢覚、幾時帰孝廉船。甲寅冬、呉昌碩。」

〈書道科教員賛助出品〉

跡見学園女子大学兼任講師　　森岡　隆　「傳教大師歌」

　あきらけくのちの佛の御世(みよ)までも　　ひかりつたへよ法(のり)のともし火

跡見学園女子大学兼任講師　　津田貞巌（好一）　「邵康節の詩〈福昌県にて雨に会う〉」

　創作　「雲勢移峰緩　　泉聲（声）出竹遅　　此時無限意　　唯有翠禽知」

跡見学園女子大学兼任講師　　伊藤亜穹（亜美）　創作　「處靜脩閑」（黄子久の句）

跡見学園女子大学教授　　横田閑雲（恭三）　創作　「虚無」

　　同　　横田閑雲（恭三）　創作　「外露柔間　中含挺勁」（清・王澍『竹雲題跋』より）

Ⅱ．第３回「文の京書道展」

目　　的：①本学学生の書道表現力の向上のため

　　②本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供

　　「文の京書道展」は、第一に本学学生の書作品発表の場を提供し、ひいては書表現力の向上を目指しています。また文京区民をはじめとする地域の方々に本学書道科を認知してもらいながら、書芸術を鑑賞する機会を提供するという目的があります。

会　　場：文京区シビックセンター　地下一階　アートウオール

展示期間：７月６日（水）～７月26日（火）

開館時間：７月６日（水）午後１時～午後５時

　　７月７日（木）～７月26日（火）午前10時～午後５時

作品点数：25点
搬　　入：7月6日（水）9：30～11：30
搬　　出：7月27日（水）10：00～11：30
出品者
1．本学学生有志　19名　25点
文京区へ申し込みする段階で主たる出品者の個人情報を事前に提出しなければならないため、複数の作品を出品できる学生を「主たる出品者」となってもらいました。

〈跡見学園女子大学〉
人文学科四年　松田亜美　　臨　米芾〈蜀素帖〉（北宋）
　　松田亜美　　臨　伝小野道風〈小島切〉（平安）
　　松田亜美　　臨　伝西行〈一条摂政集〉（平安）
人文学科三年　中島礼乃　　臨　伝藤原行成〈升色紙〉（平安）
　　中島礼乃　　臨　伝藤原行成〈関戸本古今集〉（平安）
　　中島礼乃　　臨　伝小野道風〈小島切〉（平安）
人文学科二年　林田美咲　　臨　伝紀貫之〈高野切第三種〉（平安）
　　林田美咲　　臨　〈賀蘭汗造像記〉（北魏）
人文学科四年　三村侑綺　　臨　空海〈風信帖〉「風信雲書　自天翔臨」（平安）
人文学科四年　秋庭愛実　　臨　鄧石如〈隷書五言詩軸〉（清）
観光デザイン学科一年　千野心優　　臨　王羲之〈集王聖教序〉「松風水月未足　比其清華仙露明珠。」（東晋）
コミュニケーション文化学科一年　新倉みのり　　臨　褚遂良〈雁塔聖教序〉「妙道凝玄遵之。莫知其際法流湛寂」（唐）
現代文化表現学科一年　小林莉菜　　臨　王羲之〈十七帖〉「吾前東。粗足作佳観。吾為逸民之懐久矣」（東晋）
臨床心理学科二年　多賀谷美咲　　創作〈酔眠花〉「野寺訪僧帰帯月　芳林携客酔眠花」
マネジメント学科一年　三橋千晴　　臨　王献之〈歳尽帖〉「承々掾安和。慰馳情。姉三兄緒患。故爾不損。」（東晋）
現代文化表現学科四年　嵐美香子　　臨　孫過庭〈書譜〉「譬夫絳樹青琴。殊姿共艶。随珠和璧。異質同妍、何必刻鶴図龍。竟慙真体。得魚獲兎。」（唐）
人文学科四年　秋庭愛実　　創作「さいはての駅に下り立ち雪あかり　さびしき町に歩み入りにき」
人文学科三年　山崎　遙　　臨　詔版「廿六年、皇帝尽併兼天下。諸侯黔首」（秦）
人文学科三年　権田彩瑠　　臨　鄭道昭〈鄭羲下碑〉「父官子寵、才徳相承、海内敬其栄也。」（北魏）
人文学科二年　牧島倫子　　臨　孫秋生造像記「敬郭霊淵董王洛都、董万度李文壇。」（北魏）
人文学科三年　福井夏実　　臨　顔真卿〈自書告身〉「服労社稷。靜専由其直方。動用謂之。」（唐）
人文学科一年　結城咲来　　臨　孫過庭〈書譜〉「思遏手蒙五合交臻。神融筆暢。暢無・・・。」（唐）
コミュニケーション文化学科一年　前田友紀恵　　臨〈高貞碑〉「即其氏焉。自茲已降。冠冕継及。世済其德。」（北魏）
人文学科一年　藤原　悠　　臨　虞世南〈孔子廟堂碑〉「識〆象之在川。明商羊之興雨。知来蔵往。」（唐）
現代文化表現学科三年　羽生真衣　　臨　王羲之〈蘭亭序〉「是日也。天朗気晴、恵風和暢。仰観宇宙之大。」（東晋）

3．展覧会の総括と今後の方針

今回は本学学生、アカデミア講座受講生、有力高校の生徒作品（招待）、本学の書道指導者の４者の作品を対象とし、海外からの作品はコロナ禍の最中でもあり、郵便物の遅配や未配があってはいけないため、依頼を中止としました。

昨年度の総括で、今後の方針について、以下の３点に集約しました。

1．文京区アカデミア講座受講を引き受けるかどうかとは別に、上記コンセプトの展覧会を継続したい。

2．文京区の協力を求めつつも、当書道展が掲げている目的は今後も維持したい。

3．会場が展示に不向きであることは、改善を要望するが、現行の会場でも最低限、実施可能である。

上記1. 2．は予定通り達成できました。3については今回たまたま一般展示会場に空きができたため、タイミング良く申し込むことができましたが、今後どのように展開できるかは不確実な面があります。本学の参加学生が年々増加していますが、さらに充実させるためには、毎年継続して開催するということが重要になるものと思われます。また有力高校から作品を借り受けることで、高校側の指導者と交流ができ、ひいては受験生の獲得につながることが期待できます。この点についても、より充実した方法を模索していきたいと考えています。

以上、簡単ではありますが、第3回「文の京書道展」についてご報告致します。

最後になりましたが、地域交流課の絶大なるサポートをいただき、ここまで歩みを進めてくることができました。とりわけ新垣先生・小又さんには計画立案から搬出業務に至るまで長期にわたりご援助くださりありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

文京区大塚仲町町会と跡見学園女子大学の合同プロジェクト

観光コミュニティ学部　佐野美智子

1．プロジェクト開始までの経緯

文京区大塚仲町町会との合同プロジェクト開始の発端は、2021年5月に地域交流センターから各学部教授会を通して行われた呼びかけに手を挙げたことである。文京キャンパスがある大塚地域にて、地域を学びの拠点としつつ地域貢献に資する教育プログラムを検討する、という地域交流センターの目的に賛同した大塚仲町町会からの連携打診を受けた呼びかけである。

観光コミュニティ学部社会調査士課程では、必修科目として春・秋連続履修の社会調査実習（佐野クラス）において、毎年「文京区エリアスタディ」を実施している[(1)]。キャンパス周辺エリアを調査対象地域として様々なテーマで、各種社会調査技法を活用した調査実習を重ねてきた。2018年度には「新旧住民が築く新しい地域の形とは？ ―大塚3丁目地域満足度調査―」を実施した。同調査は大塚3丁目の3つの町会（大塚窪町町会、大塚仲町町会、氷川下町会）の協力を得て、実習クラスと佐野ゼミが共同で実施したもの。年度末に調査成果報告書を刊行した際に調査結果のフィードバックの一環として開催した報告会は、アンケート回答者のうち参加を希望された方々や町会関係者の皆さんの出席をいただき、出席者相互の交流の機会となった。こうした経験を踏まえ、地域調査では結果を地域に還元して有効活用してもらうことの重要性と、大学が地域の多様なステークホルダーを結ぶハブとなれる可能性について認識するようになっていた。

センターからの呼びかけに応じた後、2021年7月には、センターの橋渡しにより大塚仲町町会メンバーとの初回打ち合わせを行った。11月には町会常任理事会に出席して、共同プロジェクトの目的および行動計画について説明した。そして2022年4月に、センターの新垣先生の協力を得つつ、町会との合同プロジェクトがスタートしたのである。

2．プロジェクト初年度（2022年度）の活動の流れ

合同プロジェクトは2年間のプロジェクトとして始まった。プロジェクトのテーマは、「地域に暮らす人たちが“住みやすいまちだと実感できる”まちづくり」。2022年度は、その第一弾として、地域の現状把握と課題の明確化を目的に、表1に示すスケジュールで活動した。メンバー構成は、町会員10名、学生21名、教員2名（地域交流センターから新垣先生がサポート役として参加）の合計33名である。

（1）町会の方々からお話をうかがうこと（第1回会合）からスタート

プロジェクトは、5月1日（日）第1回会合にて、町会メンバーから地域の話を聞くことから始まった（写真1）。町会メンバー全員から、「地域の今昔」「良いところ／悪いところ」「地域の課題」等について、

表1：2022年度プロジェクト活動の内容

4～5月	・第1回会合（町会メンバーからお話しをうかがう会） ・地域データの収集（各種統計や既存調査資料の収集）と地域課題の事例収集 ・フィールド調査
6～7月	・第2回会合（学生による中間報告とアンケート調査に向けた意見交換） ・アンケート調査票の設計
9月	アンケート「大塚仲町エリア調査」　実査（学生によるエリア内全世帯への調査票配布）
10月	アンケート回収票の整理→データ入力、分析準備
11月	・第3回会合（「大塚仲町エリア調査」単純集計結果の共有） ・アンケート調査のデータ分析 ・インタビュー調査（アンケート回答者のうちインタビュー協力を承諾してくれた人を対象）
12月	・アンケート調査とインタビュー調査のデータ分析、分析レポートの執筆
1～2月	報告書の執筆
3月	・報告書完成 ・報告会（町会メンバーおよび大塚仲町エリア住民を対象とする）

写真1：第1回会合（2022.05.01）

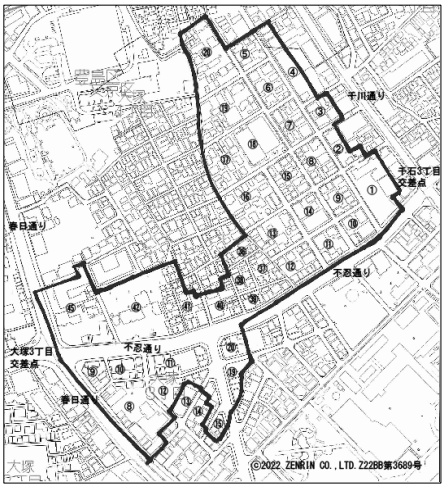


図1：フィールド調査

自由に語ってもらった。ここで出てきた様々な問題意識、地域を見る視点をベースに、9月実査予定のアンケート調査の設計を始めた。

（2）フィールド調査の実施

学生は4月半ばから5月、大塚仲町町会エリアの住宅地図（ゼンリン電子住宅地図デジタウン「デジタウン東京都文京区202008」）を利用し、フィールド調査を実施した（図1[(2)]）。エリアを10地域に分け、学生が2～3人のグループに分かれて、地図を片手に写真を撮りながら踏査した。住宅については戸建か集合住宅か、事業所については外観からわかる範囲で事業内容を確認した。子育て・教育関連施設（塾や習い事教室を含む）や福祉関連施設、地域住民の集いの場（児童館や図書館、子ども食堂などコミュニティスペース）についてチェックした。調査結果は、番地ごとにまとめなおして総括表を作成し、仲町エリアの居住環境を把握する資料とした。

（3）地域データの収集と学生による中間報告（第２回会合）

地域の現状を理解するため、学生はフィールド調査と並行して、地域データの収集を行った。地域の古地図を参照しつつ[(3)]歴史を調べ、人口・世帯数の変化や産業構造の変化について調べた。一方で、「近所付き合い」「防災」など４つのテーマを取り上げて、他地域の課題対応について新聞記事検索結果をもとに調べた。

学生による事実調べの結果は、6月19日（日）第２回会合にて報告し、町会メンバーからのコメントを受けた（写真２）。町会メンバーからは、アンケート調査で知りたいことについて意見を頂戴した（写真３）。

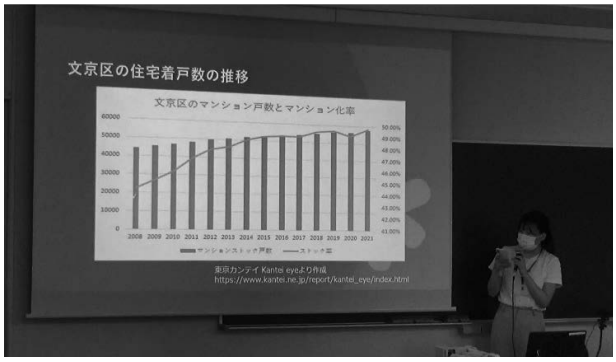


写真２：第２回会合（2022.06.19）学生による報告

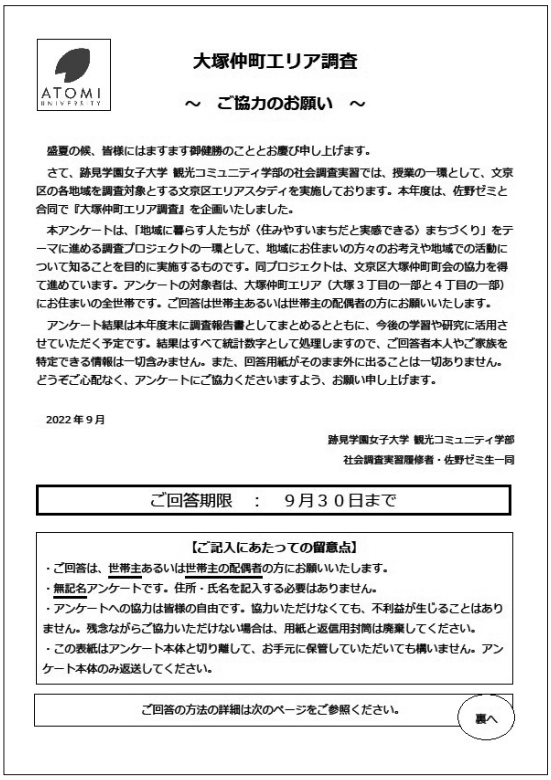
写真３：第２回会合（2022.06.19）町会メンバーと意見交換

（4）アンケート調査の実施

２回の会合を通じて明らかになった町会メンバーの問題意識と、学生が集めた各種データや先行研究から得られた知見をもとに、アンケート調査を設計、「大塚仲町エリア調査」としてまとめ、9月に実査を行った（図２）。調査は、大塚仲町エリア（大塚３丁目の一部と４丁目の一部）の全世帯を対象とし、世帯主あるいはその配偶者・パートナーに回答をお願いした。町会掲示板や町会HPを通じてアンケート実施の告知をしていただくなど町会の協力があり、有効回答数は256（配布総数は1561）となった。

調査票配布では、学生が全戸を回ってポスティングした。集合住宅で郵便受けの在り処がわからない建物については、町会メンバーに同行してもらうこともあり、学生は町会との協働を実感する機会にもなった。

実査終了後、学生は回収票の検票、データ



ATOMI UNIVERSITY

大塚仲町エリア調査

～　ご協力のお願い　～

盛夏の候、皆様にはますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部の社会調査実習では、授業の一環として、文京区の各地域を調査対象とする文京区エリアスタディを実施しております。本年度は、佐野ゼミと合同で『大塚仲町エリア調査』を企画いたしました。

本アンケートは、「地域に暮らす人たちが（住みやすいまちだと実感できる）まちづくり」をテーマに進める調査プロジェクトの一環として、地域にお住まいの方々のお考えや地域での活動について知ることを目的に実施するものです。同プロジェクトは、文京区大塚仲町町会の協力を得て進めています。アンケートの対象者は、大塚仲町エリア（大塚３丁目の一部と４丁目の一部）にお住まいの全世帯です。ご回答は世帯主あるいは世帯主の配偶者の方にお願いいたします。

アンケート結果は本年度末に調査報告書としてまとめるとともに、今後の学習や研究に活用させていただく予定です。結果はすべて統計数字として処理しますので、ご回答者本人やご家族を特定できる情報は一切含みません。また、回答用紙がそのまま外に出ることは一切ありません。どうぞご心配なく、アンケートにご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

2022年９月

跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部
社会調査実習履修者・佐野ゼミ生一同

ご回答期限　：　９月３０日まで

【ご記入にあたっての留意点】
・ご回答は、世帯主あるいは世帯主の配偶者の方にお願いいたします。
・無記名アンケートです。住所・氏名を記入する必要はありません。
・アンケートへの協力は皆様の自由です。協力いただけなくても、不利益が生じることはありません。残念ながらご協力いただけない場合は、用紙と返信用封筒は廃棄してください。
・この表紙はアンケート本体と切り離して、お手元に保管していただいても構いません。アンケート本体のみ返送してください。

ご回答の方法の詳細は次のページをご参照ください。　裏へ

図２：アンケート調査表紙

入力を行い、データセットを作成したのち、単純集計結果を出す。この結果報告が、11月8日（火曜夜）に実施した第3回会合である（写真4）。その後は、実習クラスの学生が中心になって、各自のテーマにしたがって分析を進め、レポート作成に取り組んでいる（12月末時点の状況）。

写真4：第3回会合（2022.11.08）

（5）インタビュー調査の実施

アンケート調査により集めた量的データの分析を進める一方で、町会メンバー以外の住民からの生の声を聴くためのインタビュー調査を実施した。インタビューは半構造化手法（大まかなトピックスを決めておくだけで、対象者の自由な語りを引き出すことを主にする）で1人あたり30分程度、2人の学生が対応した。インタビュー調査で集めた質的データの分析はゼミ学生が中心となって進めている（12月末時点の状況）。

（6）町会イベントへの参加

調査研究を進める一方で、町会からの依頼を受けて、7月「こども広場」と11月「防災ひろば」のイベントに運営側として参加する機会を得た。7月のイベントでは地域交流センターの新垣先生が他学部の学生にも声をかけ、10名の学生とともに協力した。11月のイベントではプロジェクトメンバーの学生5名が協力した（写真5）。子ども向けや防災関連のイベントは、ともに地域住民の関心の高い行事である。そのイベントに参加することで、学生は地域住民との交流体験を通して、問題意識を明確化することができた。

写真5：防災イベントの手伝い（2022.11.13）

（7）報告書の作成と報告会開催（2023年3月中旬予定）

2022年度の調査研究結果は、社会調査実習クラスが毎年度末に刊行する「社会調査実習成果報告書」に収録する。報告書刊行のタイミングに合わせて、報告会を実施する予定である。報告会は、調査に協力していただいた方々に対する結果フィードバックを第一義的な目的とするが、地域の方々の交流の場としても役立てられるように企画したいと考えている。

3．今後の展開

「地域に暮らす人たちが“住みやすいまちだと実感できる”まちづくり」をテーマに始まった本プロジェクトは、2022年度の活動目標を「地域の現状把握と課題の明確化」とした。学生は資料収集を行い、町会メンバーの考えを聞き、町会活動を経験しながら、アンケート調査やインタビュー調査を設計・実施し、データ分析を行ってきた。そうした活動により浮かび上がってきた「地域の現状と課題」に対応するための方策を考え、実行し、効果検証のための調査を実施することが2023年度の主要な活動となる。

対応策を考え実行する主体となるのは町会メンバーだが、効果検証の方法を考えてデータを集める主体となるのは学生メンバーである。効果検証の方法の一つは、初年度に実施したアンケート調査の継続実施である。同じ内容のアンケートを継続することで、住民の意識や行動の変化を知ることができる。施策効果を知る一助となるだろう。効果検証法については、他の方法も含め、地域の人たちが主体となって実施していける、持続可能な方法を検討していく必要があると考えている。

最後に、今後のプロジェクト展開の方向性として、地域のネットワーク作りの重要性を指摘しておきたい。地域課題の解決は町会だけでなく、地域の多様な関係者（個人や集団）がネットワークを作り、互いの信頼や互酬の意識を醸成するなかで可能となる。そう考えると、2022年度報告会で、ネットワーク構築のための種をどの程度蒔くことができ、それをどのように育てることができるか、という点が重要となるだろう。今後のプロジェクトを展開していく上で検討すべき大きな課題としたい。

注

（1）『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書3 ゆかり』pp.31-33参照。
（2）ゼンリン電子住宅地図デジタウン東京都文京区の地図に大塚仲町エリアを示す黒枠、丸数字の番地表記、通り名と交差点名を加筆した。
（3）町会から、多くの歴史資料を見せていただいた。1920年代の大塚仲町商店街、1970年代の都電廃止のころの大塚仲町商店街など、往時の様子をうかがうことができる貴重な資料である。

「武蔵国の19校を通じて埼玉を知る」講座開催報告について

加美甲多

1．はじめに

本稿は2022年9月10日（土）跡見学園女子大学新座キャンパス3号館（3156教室）にて実施した「武蔵国の19校を通じて埼玉を知る」講座の報告である。

本講座は本学が埼玉県の地域のプラットフォーム、正式名は埼玉東上地域大学教育プラットフォーム（TJUP）に参加しており、NHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』にちなみ、プラットフォーム全体で公開講座を開催することとなったことにより催されたものである。他大学では鎌倉殿の時代における地域医療や比企地域・武蔵国の子育て等をテーマとして扱う中で、本学では文学の視点から考えることが許されたので「文学から見る『鎌倉殿』の時代」と題して講座を行った。

2．講座内容

本講座のキーワードは、①史実と虚構、②武士の生き方、③関東の地域特性とした。

同時に、本講座の概要を挙げる。平安時代の末、日本には大転換機が訪れる。貴族全盛の時代から武士が台頭し、戦いの果てに鎌倉幕府が成立する。いわゆる鎌倉時代の幕開けである。この激動の顛末について「鎌倉殿」を中心に描いたのが現在（講座開催当時）放送中のNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』である。この歴史的な出来事には、印象的な人物が多く登場したこともあり、歴史書はもとより、『平家物語』をはじめ様々な文学作品に描かれることになる。そこから、史実と虚構の問題を考えることや、武士の生き方の特質を知ることができる。また、日本で初めて関東に政治の中心が移ったことも見逃せない。本講座では、大河ドラマを文学的な観点から見ていく、とした。いわば、中世文学の記述を通して「鎌倉殿」の時代やその時代に生きた人物、成立した作品等に焦点を当てながら見直そうとする試みである。

具体的には、最初にNHK大河ドラマに対するイメージについて検討した。歴代のNHK大河ドラマの中から源平に関するものを挙げると、『源義経』（1966年）／『新・平家物語』（1972年）／『草燃える』（1979年）／『炎立つ』（1993年）／『北条時宗』（2001年）／『義経』（2005年）／『平清盛』（2012年）／『鎌倉殿の13人』（2022年）となり、平安時代から鎌倉時代にかけての源平騒乱はいつの時代も人気であることがわかる。特に『鎌倉殿の13人』は視点を少し変え、北条義時を主人公としたことの意味も大きい。つまり、源氏や平氏に偏らないことにより、天皇家、平氏、源氏、北条氏、有力御家人・文官等のやりとりや動向が「見える化」されたのである。その点とも関連して、埼玉県の比企地域ゆかりの比企能員、畠山重忠、源範頼、木曽義仲、比企尼、丹後局等について挙げながら、なぜいま北条義時なのかについても考えた。北条義時は、1221年の承久の乱で朝廷を破ったのが最後の功績

（1224年没、享年62）であり、もともと『鎌倉殿の13人』は2021年の放送予定であったことから、承久の乱からちょうど800年という意図も見えてくる。

『鎌倉殿の13人』は脚本担当の三谷幸喜氏自らが発言するように『吾妻鏡』という鎌倉時代の歴史書の影響が大きく、『吾妻鏡』を下地にしている。『吾妻鏡』は歴史書でありながら、文学性も潤沢に有し、例えば源氏三代に対する評価は厳しく、北条家を賞賛するような態度が見られる。そういった中で、『吾妻鏡』は当時の正史（幕府の公式記録）であるにも関わらず、歴史的事実が掲載されているとは限らない。それを象徴するのが『吾妻鏡』には、建久7年（1196）1月～建久10年（1199）1月までの記述が欠落していることである。これは何を意味するのかと言えば、初代「鎌倉殿」である源頼朝の死が描かれていないのである。僅かに『吾妻鏡』建久10年（1199）1月13日に頼朝が相模川の橋供養の帰路に落馬し、体調を崩したという記述があるのみである。つまり、頼朝の落馬から死没、葬儀への一連の経緯が『吾妻鏡』では一切記されていない。そこで、現在でも議論が続き、事故による落馬説、脳溢血などの急病での落馬説、糖尿病説、乱心説、誤認殺傷説、暗殺説、果ては亡霊説、川に落ちての溺死説等まで推測されている。この頼朝というカリスマの急死によって、13人の合議制が誕生したことは間違いないが、その過程は実際には不透明で、文学には編者の立場などによって虚構や潤色表現が見られることがあり、逆に描かれるべきことが描かれないこともある。だからこそ、各自が想像する「余白」ができ、文学や史学の立場はもちろん医学や栄養学などの複合的な学問の立場からも仮説が立てられ、議論される面白さが存在することについても言及した。

次に、『鎌倉殿の13人』の前期、中期、後期を代表する人物として、それぞれ平清盛、源実朝（3代目「鎌倉殿」）、北条泰時を挙げながら、文学に描かれる姿、文学から看守できる人物像等について考えた。特に実朝は和歌を愛し、積極的に政治に関与したいとは考えていなかったであろう、いわば不遇の将軍と言える。実朝自らが編纂した『金槐和歌集』にはその想いを和歌に託したことで、彼の強烈な個性が爆発している。一例を挙げるなら「罪業を思ふ歌」として詠まれた615歌「炎のみ　虚空に満てる阿鼻地獄　ゆくへもなしと　いふもはかなし」である。自らの置かれた境遇を端的に示しながらその諦観までも感じさせるような彼の強い気持ちが生々しく伝わってくる。また、鎌倉幕府2代目執権の北条義時の長男で、鎌倉幕府3代目執権である北条泰時にも注目した。泰時は御成敗式目を制定した人物であり、鎌倉時代の仏教説話集『沙石集』においては名裁判を行った説話が載っている。そこから、泰時の人柄を象徴した説話が残り、君主像が形成されていくことの意味について検討し、他にも鎌倉という立地についても触れた。

最終的に文学に残された記述を丁寧に見ていくと、「鎌倉殿」やそれに関連する人物が立体的に見えてくることについて述べた。

3．おわりに

当日は多くの方々に受講いただき、講座修了後等に受講者から質問、意見も頂戴した。改めて『鎌倉殿の13人』に対する関心の高さや武士の持っている恒久的な魅力というものを再確認できる講座となった。引き続き、埼玉県新座市という本学の立地と文学との融合により、どういった科学反応を起こせるかについても考えていきたい。

最後に、開講の辞を述べていただき、また講座も受講いただいた本学副学長の塩月亮子氏、準備等でお世話になった本学地域交流課の中村英昭氏をはじめ、本講座に関わってくださった全ての方々に感謝申し上げる。

参考文献

・小和田哲男監修、2022年、『鎌倉幕府と北条義時　見るだけノート』、宝島社
・梶原正昭校注・訳、1971年、日本古典文学全集『義経記』、小学館
・加美宏・狩野博幸監修、2008年、『源平盛衰記絵巻　全十二巻　図版篇』、青幻舎
・小島孝之校注・訳、2001年、新編日本古典文学全集『沙石集』、小学館
・佐藤謙三校注、1959年、角川日本古典文庫『平家物語』上下、角川書店
・髙橋秀樹編、2020年、『新訂　吾妻鏡』四、和泉書院
・田中大喜監修、2022年、『大河ドラマ鎌倉殿の13人　北条義時とその時代』、宝島社
・樋口芳麻呂校注、1981年、新潮日本古典集成『金槐和歌集』、新潮社

和光市のTJUP加盟を契機にした連携活動の拡大について

地域交流センター長　土居洋平
地域交流課長　中村英昭

2022年4月に和光市がTJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）と包括協定を締結した。和光市は本学と国際交流中心に連携をしてきた実績もあり、本学がTJUPの和光市の自治体担当校となった。また、これを機会にして、2022年度は、年度当初から和光市との地域連携活動がこれまで以上に活発になっていった。

1．和光市について

和光市は、埼玉県の南端にあり、西側に朝霞市、東側に荒川を挟んで戸田市と境を接している。本学新座キャンパスからは車で30分弱、鉄道でも数駅であり、新座キャンパスから文京キャンパスへの移動ルート上にあることもあり、本学にとって大変アクセスのよい場所に立地している。令和5年1月1日現在の人口は、83,962人（和光市HP「ミニ統計」参照）である。

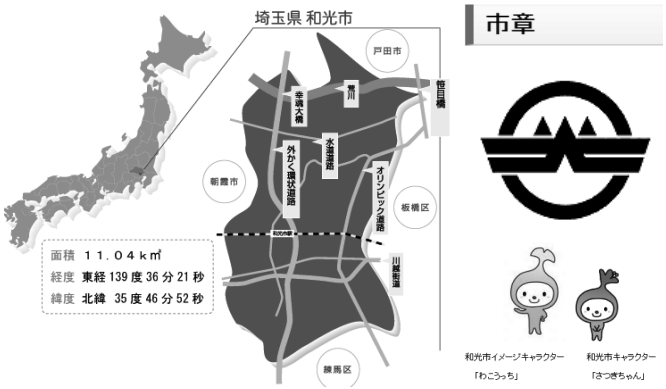


図1：和光市の概要（出典：和光市HP）

2．和光市と跡見学園女子大学

和光市とは、平成24年（2012年）11月22日に相互協力に関する包括協定を締結した。協定をもとに、和光市と姉妹都市協定を締結しているアメリカ合衆国ワシントン州「ロングビュー市」にある「ローワーコロンビアカレッジ（LCC）」において、本学学生が夏休みと春休みを利用した短期語学研修を行うようになる。また、そうした研修の実施を踏まえ国際交流活動を中心とした連携が展開し、さらに、インターンシップ等も市役所で実施されるよ

写真1：協定締結の記念写真
（左が柴﨑和光市長、右が本学小仲学長）

うになっている。

さて、2021年7月に当該年度の国際交流の打ち合わせを行った際、和光市側よりさらに学生との協働活動を展開したいという話が出た。ちょうど同年に本学がTJUPに入会し、本学としてもTJUPの枠組みで連携できる自治体を探していたこともあり、和光市にTJUPに加入してもらい、本学を含む多くの学生・大学と連携を展開することを提案した。本学は、TJUPの枠組みで考えると新座キャンパスを軸にした活動を行うことになるが、キャンパスの立地する新座市は既にほかの会員校（十文字学園女子大学）が担当校になっており、新座市とは別に主担当となる自治体を探していた。

2021年度の下半期にTJUPの運営協議会において本学より和光市の加入について提案を行い、2022年4月1日に和光市がTJUPと包括協定を締結することとなった。また、本学も和光市の自治体担当校となり、TJUPの枠組みで更なる連携活動が展開できる環境が整ったのである。

3.【わこらぼフェス2022】への参加

和光市がTJUPの特定地域の自治体となり、本学が自治体担当校となったのを契機にして、本学地域交流センターと地域交流センターから呼びかけに応じた学生が、和光市の市民活動に関わるイベントである【わこらぼフェス2022】へ参加した。地域交流センターの教職員および学生は、イベントの運営に関わる【広報】【環境整備】【ポイ】等の複数のチームに参加し、それぞれのチームで和光市民とともに活動を行った。

また、同イベントにTJUPとして出展することを本学から提案し、和光市・TJUP双方の了解を得ることができた。TJUPについては、和光市がTJUPに入会した直後の2022年4月のTJUP運営協議会において本件について本学が運営責任校となって実施することを提案し、承認を得ることができた（詳細は、本誌TJUP活動報告の頁を参照）。イベント当日には、TJUPの各校の紹介ブースを出展し、本学職員はもちろん会員校の教職員の協力を得てブースを運営した。

【わこらぼフェス】は、年齢も立場も異なる約40名の企画運営のプロジェクトチームのメンバーが、地域課題の解決を目指して、企画を一から協働で検討し、実施するものであり、イベント当日も、中央ステージでは様々な催しものが開催され、ステージの周囲では和光市内の市民活動団体の紹介ブース、マルシェ等が配置され、和光市民が市民活動のことを知り、相互に交流を深める機会となっていた。

ここで、実際のステージの様子を紹介したい。

図2：わこらぼまつり2022会場概要と案内チラシ（出典：和光市HP「みんなのわこらぼまつり」）

3.1.「ポイ」パフォーマンス

「ポイ」は、紐の先におもりがついたものを両手にもって様々な形で回転させながらパフォーマンスを行うものである。ニュージーランドのマオリ族の民族舞踊を原点にしており、今では、世界中に広がっている。わこらぼまつりでも、「ポイ」チームがつくられ、小学生から中高年まで様々な年代のメンバーが数か月の練習期間を経てパフォーマンスを披露した。本学地域交流センター長と学生もこのチームに参加し、4月から隔週水曜日に開催される練習に参加したほか、自主練習なども重ね、ステージパフォーマンスに参加した。こうした継続的な練習参加により和光市民との関係性も深まり、学生にとっても地域活動に深くかかわる教育効果の高い機会となった。また、イベント参加者に無料でポイが配布され、ポイ初心者向けのレクチャーなども行われた。生で見るポイのパフォーマンスは迫力があり、拍手や歓声が多々あがっていた。

写真2：ポイパフォーマンスの様子

3.2.「エイサー」パフォーマンス

和光市内では、沖縄の伝統芸能である「エイサー」を踊る団体「和光民舞を踊る会」があり、この団体とコラボレーションする形で、エイサーのパフォーマンスが行われた。ポイと同様、多様な年代が参加し、三線や太鼓、唄に合わせて踊る姿は、イベントを多いに盛り上げることとなった。さらに、エイサーの一種である「輪踊り」を行った際には、その輪の周囲・真ん中でポイをパフォーマンスするオリジナルのコラボレーション演目「ポイサー」が行われた。

写真3：エイサーの様子

4．今後の和光市との活動について

2022年4月以降、和光市とTJUPとの包括協定および本学がTJUP内で和光市の担当校になったことを契機に、上記以外も、本学と和光市の協働がさらに活発になってきている。

例えば、これまで行われてきた国際交流関係の活動でも、学生と和光市関係者との交流が深まっている。具体的には、ローワーコロンビアカレッジへの短期語学研修に参加する本学学生と、和光姉妹都市交流会関係者、和光市役所職員の交流が行われるようになった。それに加えて、この原稿を執筆している2022年1月現在、以下の活動が進行しつつある。

①和光市市民活動推進課との協働による「和光市市民活動団体紹介冊子作り」への学生参加
②和光市役所政策課との協働による和光市職員研修への講師派遣（3月1日実施予定）
③和光市南公民館とのTJUPの共催企画の「親と子の絵本読み聞かせ教室」（2月18日実施）
④「みんなのわこらぼまつり2023」への教職員・学生の参加

このように、本学と和光市との協働活動が広がっているのである。

地域交流センターとして、今後も和光市との活動を多様な場面で深め、また、それぞれの活動が和光市と跡見学園女子大学の両者にとって意義のある活動が展開するよう努めたい。さらに、この活動が本学全体の活動であるという認識のもと、学内の関係各部署とも連携して更なる活動の展開を図りたい。今後の和光市と跡見学園女子大学の活動に、注目をして頂きたいと考える。

盛岡市との地域連携に基づく調査・研究活動について

観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科　篠﨑健司

調査・研究者

観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科　篠﨑ゼミナール

4年　青木優花　荒井愛花　太田菜月　笠貫沙月　加藤千聖　金井萌愛　久我桃子　寺内結菜　湊結衣

3年　秋谷香菜子　内山日菜　小嶋美優　原島優花　渡邉千理　和田乃英加

2年　今林奈津美　岡野弥生　佐野桃羽　松下愛

本稿は令和３年度と４年度（途中）までの調査・研究活動の報告であり、各年度、中間報告会（9月）、最終報告会（2～3月）にて上記学生が作成した報告会資料及び年度別報告書の内容から取りまとめたものである。

1．調査・研究テーマ／概要

（1）調査・研究テーマ

首都圏に住む女子大学生の視点から見た、「もりおか短角牛」の現状と魅力、ブランド化などの振興戦略及び方策を調査研究する。

具体的には、盛岡名産の「もりおか短角牛」を研究対象とし、当畜産物を取り巻く流通構造上の課題抽出・分析から、主な消費者として想定される首都圏の健康志向の高い女性への認知向上、訴求に至る具体的な施策・方策についての検討及び試行を行う。

（2）日本短角種および「もりおか短角牛」とは

日本短角種とは、旧南部藩時代の南部牛と、明治以降輸入されたショートホーン種を交配し、品種改良を重ね、昭和32年に日本固有の肉専用種として認定されたものであり、もりおか短角牛は、日本短角種のうち、盛岡で生まれ盛岡で育った牛で、もりおか短角牛ブランド基準を満たしたものをいう。

市の調査によると令和元年度の盛岡市の生産状況は、繁殖農家33戸、肥育農家３戸、出荷頭数37頭／年となっている。

（3）調査・研究の全体スケジュール

① 1年度目（令和３年度）～２年度目（令和４年度）

【テーマ・取組】

・生産・流通構造と主に首都圏を中心とする市場動向の分析

・生産地視察等による生産現場の実態調査

・市内及び首都圏等の消費者動向把握のための市場調査

・生産者・事業者等との連携による課題解決に向けた取組方策

【調査の視点】

・もりおか短角牛独自の生産方法による流通上の問題・課題

・各種販路と販売における課題

・首都圏消費者が牛肉に求める期待

・消費者ニーズを踏まえた、(黒毛和種とは異なる) もりおか短角牛のポジショニング

② 3年度目 (令和5年度)

【テーマ・取組】

・商品開発やPR戦略の立案 (試行)

・研究成果の創出に向けた取組の推進

・食品加工・販売事業者、飲食事業者等と連携し、首都圏消費者をターゲットにした商品開発及びPR活動の試行による実現可能方策の検討

2. 令和3年度の調査・研究の概要

仮設設定のためSWOT分析の手法を用い、以下の3つの分野に整理し、それぞれに分けて検討を行った。

(1) 強み・弱みからの検討

① 調査・研究方法

「もりおか短角牛」の現状について、既存各種統計データ等の整理、生産者・関係者ヒアリング調査(オンライン・現地対面)、生産者アンケート調査を実施した。

・盛岡市役所玉山総合事務所オンラインヒアリング
　実施日：令和3年6月25日 15：00～16：30

・生産者 (肥育農家Aさん) オンラインヒアリング
　実施日：令和3年8月10日 13：00～14：00

・関係者現地調査
　実施日：令和4年3月14日～16日
　調査対象：生産者 (繁殖農家・肥育農家)、流通事業者、飲食店、皮革事業者、行政 (県)

② 調査・研究結果 (まとめ)

「もりおか短角牛」の強みを活かすために、以下の視点を重視する。

・ストーリー性 (ルーツ・短角牛に関わる人どうし・短角牛との出会いなど)

・歴史、伝統、文化 (地域にとっての存在・肉そのもの以外での活かし方など)

・愛情 (関わる人みんなに「短角牛を残したい」という思いがあることなど)

・需要と生産の微妙なバランス (希少性の高さゆえ、急増したニーズに対応できないなど)

・思いと価格のアンバランス (思いが価格に反映されにくい、価値ある牛だが、見合った値段で取引されないなど)

・ブランドとしての認知 (その土地の特産物という認識を持たれているのかなど)

③ 次年度への課題

・ブランド価値のブラッシュアップ（ターゲットの抽出（年代・どういう人など）、－ターゲットに合わせたPR方法の考案）、他地域の短角牛との差別化）

・もりおか短角牛を食べる・知る事ができる機会の提案（いわて銀河プラザ×跡見学園女子大学のブース設営）、ツアーの提案（放牧期間の監視人体験）

（2）脅威＝競合からの検討

① 調査・研究方法

・インターネットや各種文献等から、牛肉を中心に他産地のブランド牛（黒毛和種：十和田牛、前沢牛、米沢牛など、日本短角種：いわて山形村短角牛、いわいずみ短角牛、あおもり短角牛など）を調査し、「もりおか短角牛」のポジションを明らかにし、特徴、強み、何を売りにしているのか、販売戦略はどうなっているかなどを調査分析する。

② 調査・研究結果（まとめ）

・生産地は北海道や東北が多く、広い土地と自然豊かな地域で育てられるイメージ

・消費者の購入方法は、ブランド牛は、オンラインや専用ショップから購入するケースが多い

・味に関して、短角牛は「赤身」や「大自然の中で育ったストレスフリー」な牛で、旨味や風味の良さが特徴

・価格に関して、一般的に見れば高めだが、和牛の中では短角牛は少し低め

・もりおか短角牛の強みを活かしたターゲット層の設定（健康志向が高く、赤身肉のさっぱりとした味を好む世代）

・美味しい食べ方の提案（肉本来の味を味わえる塩や少しの調味料での調理、メイン以外はパストラミ・ハム・ミートソースとして活用、またワインなど盛岡のお酒と合わせたメニューなど）

③ 次年度への課題

・強み弱み、脅威、機会など他の調査結果を踏まえたキャッチコピーの検討

・ブランド化の目的をはっきりとさせる（特別な日に食べる、プラスのイメージを推しだす）

・生産者・シェフの想い、消費者の考えを一致させる（どういった人がどのような想いで食べているのかわからない）

・需要拡大、手軽に食べられるメニュー開発、日頃から食べる機会の創出

・差別化を図るためにイベントや飲食店で提供

・無駄なく全部食べることが出来るメニューや調理方法の考案

（3）機会からの検討

① 調査・研究方法

・日本人の消費動向はどうなっているのか、人は何を重視しているのかを、家計調査、食肉に関する意識調査などから調査分析

② 調査・研究結果（まとめ）

・もりおか短角牛＝数が少ない貴重な商品（たくさんの人に「希少さ」をPRするのではなく、「希少」を売りに、狭く深く届ける（限定売り出し）

・もりおか短角牛＝高価（一般的に）で希少価値がある（必然的に購入するのは、お金に余裕のあるミドル世代以上）ただし、あくまで年齢層はサブ的要素、場所などの「テーマ」で絞る方向で考えることが重要）

③ 次年度への課題

・販売提案の内容を詰める（現地ヒアリング調査結果、キャッチコピー案などを踏まえ、より詳細な提案へ）

・「もりおか短角牛」の実態を反映した「ランク付け」の提案（「A5ランク」と互角になるような新しいランク）

・もりおか短角牛×新しい試み（農家さんと一体化した宣伝、「もりおか短角牛」を知るツアーや企業とタイアップなど）

3．令和４年度の取り組み

（1）取り組みの目標

・従来の魅力として捉えられていた「味・生産方法」に加え、「ストーリー性・伝統・愛情」を含む５項目をもとに、「もりおか短角牛」関係者の想いや考えを消費者に知ってもらい、新たなファンになってもらうこと

（2）取り組み１「もりおか短角牛」モニターツアー

① 実施概要

・実施日　令和４年９月４日（日）（放牧期間である５月～９月に実施必須）

・参加者

募集人数：16名（地元大学生８名／親子４組-８名）→ 県内・県外出身者など多様な属性

実参加者：13名（地元大学生10名、先生１名／親子１組-２名）→ 県内多数、県外２人

・参加費　2,000円（BBQの食材、調理交流会での食材費（もりおか短角牛含む））

図１：ツアー募集チラシ

図２：ツアーの様子（牧野企画、調理交流会、BBQ）

② 実施結果（モニターツアーから見えてきたこと）

・新しい様々な人と人とのつながりを生む可能性

→牧野企画　農家（生産者）との交流プログラムの充実、より玉山地域や「もりおか短角牛」を知ることができるツアーの充実・実施

→歴史　地域の教育プログラムとしての取り組み、地元の地域文化としての「もりおか短角牛」の理解と継承（保存）

→つながり　地域の中で生活研究グループと農家（生産者）との交流拡大、農家（生産者）へのツアー理解拡充を通じた農家どうしのつながりの強化

（3）取り組み２　いわて銀河プラザでの「もりおか短角牛」イベントの実施

※本稿執筆時点ではイベント実施日前のため企画概要のみ記す

① 実施企画概要

・実施日　令和５年１月24日（火）10：00～17：00　（前日搬入準備）

・実施内容

映像（モニターツアーの様子、市職員が語るもりおか短角牛の魅力など）

パンフレット（もりおか短角牛のPR、都内で食べられるお店紹介など）

店内マップ（短角牛商品や盛岡市のおすすめ商品の紹介など）

イベント（○×クイズなど）

店内展示（等身大もりおか短角牛パネル、ポスター、ポップなど）

菊坂跡見塾所蔵資料調査報告（3）

秋谷香菜子・新垣夢乃・井田百香・磯田みずき・鬼塚未奈・黒木真悠・小嶋美優・小山凪咲・
中井結子・黛沙也加・水村美穂・山岡沙織・山上真由子・渡辺恵未・渡邉菜月

1．本稿の目的

「跡見「学芸員」in菊坂」は、2020年度に実施した56点の菊坂跡見塾所蔵資料調査の成果を「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告」に、2021年度に実施した120点の菊坂跡見塾所蔵資料調査の成果を「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告（2）」として報告した（新垣・大櫛・菊地・末吉ほか 2021、磯田・伊藤・大櫛・菊地ほか 2022）。

本稿では、2022年4月以降に継続して行った菊坂跡見塾所蔵資料調査の成果について報告することが目的である。

2．調査の概要

本報告を執筆するにあたっては、15名（教員1名、4年生4名、3年生5名、2年生4名、1年生1名）のメンバーで菊坂跡見塾所蔵資料調査を実施した。

表1：調査メンバー一覧

新垣夢乃（跡見学園女子大学地域交流センター助教）	中井結子（同 マネジメント学部マネジメント学科4年生）
黛沙也加（同 文学部人文学科4年生）	山岡沙織（同 文学部人文学科4年生）
渡辺恵未（同 文学部人文学科4年生）	秋谷香菜子（同 観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科3年）
鬼塚未奈（同 マネジメント学部マネジメント学科3年生）	小嶋美優（同 観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科3年）
水村美穂（同 文学部人文学科3年生）	渡邉菜月（同 文学部人文学科3年生）
磯田みずき（同 文学部人文学科2年生）	黒木真悠（同 文学部人文学科2年生）
小山凪咲（同 文学部人文学科2年生）	山上真由子（同 文学部人文学科2年生）
井田百香（同 マネジメント学部マネジメント学科1年生）	

今回、報告するのは、2022年4月1日から2022年12月19日の期間に実施した菊坂跡見塾所蔵資料調査の成果となっている。

3．調査方法

今回の調査にあたっては、2020年度から継続して菊坂跡見塾内の「座敷」に所蔵されている資料から調査を開始した。調査期間の途中で「座敷」の調査が終了しため、続いて隣接する「茶間」その後

「台所」の調査に取り組んだ。調査に際しては、資料に資料番号を付したタグを取り付け、それぞれの資料について情報カードを記入、資料を撮影し、EXCELにてデータ入力を行った。

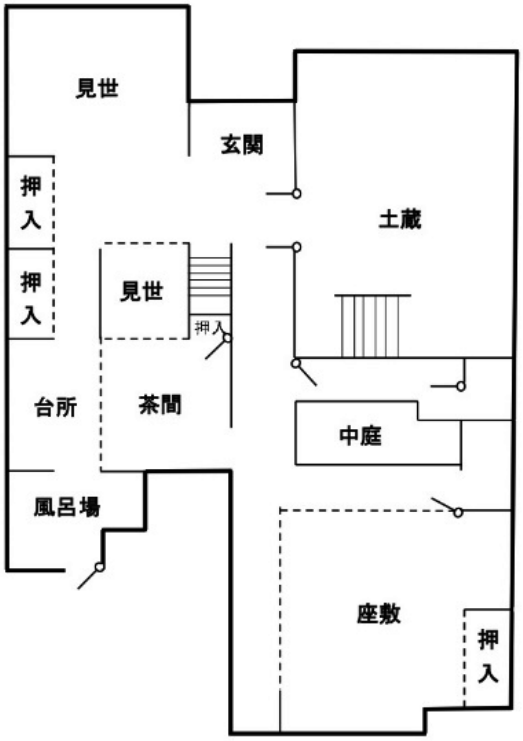
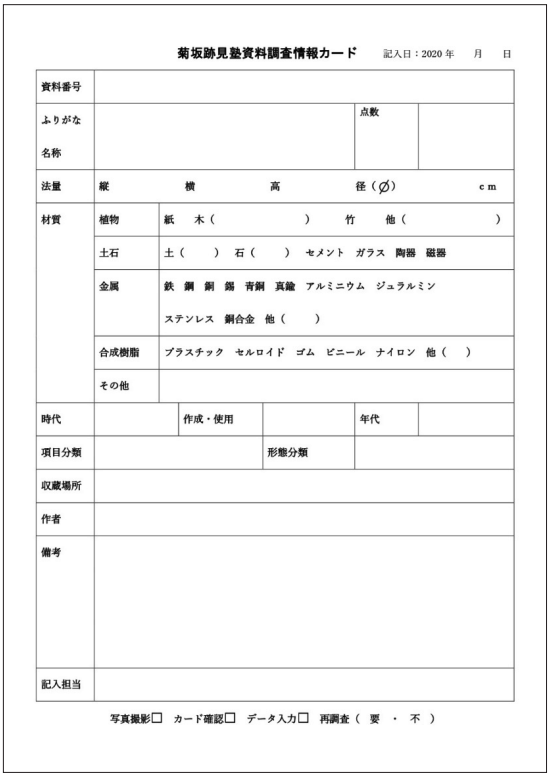


図1：菊坂跡見塾1階の見取り図



菊坂跡見塾資料調査情報カード　記入日：2020年　月　日

資料番号					
ふりがな 名称				点数	
法量	縦　横　高　径（Ø）　cm				
材質	植物	紙　木（　）　竹　他（　）			
	土石	土（　）　石（　）　セメント　ガラス　陶器　磁器			
	金属	鉄　鋼　銅　錫　青銅　真鍮　アルミニウム　ジュラルミン ステンレス　銅合金　他（　）			
	合成樹脂	プラスチック　セルロイド　ゴム　ビニール　ナイロン　他（　）			
	その他				
時代		作成・使用		年代	
項目分類			形態分類		
収蔵場所					
作者					
備考					
記入担当					

写真撮影☐　カード確認☐　データ入力☐　再調査（　要　・　不　）

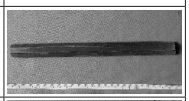
表1：菊坂跡見塾調査情報カード

4．調査結果

2022年度の調査では、78点の資料を調査することができた。

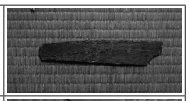
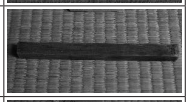
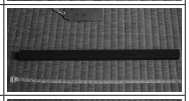
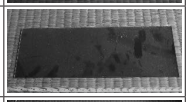
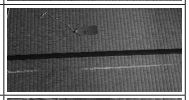
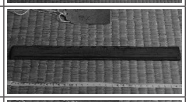
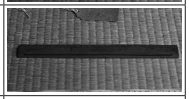
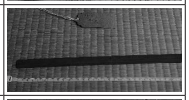
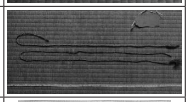
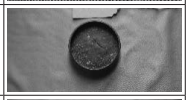
今回の調査では、茶間や台所の調査を実施し、箪笥や竹尺、アイロンなどの生活用品を確認することができた。それと同時に紙、紐、木材など雑多な資料も確認されたことが調査の特徴である。雑多な資料については、その用途が不明なものが多く、その用途を明らかにすることが今後の調査の課題として残った。

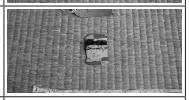
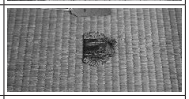
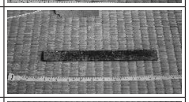
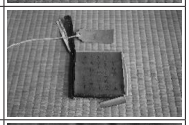
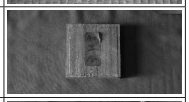
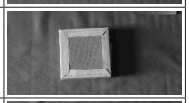
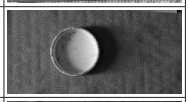
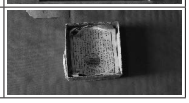
表2：調査資料目録

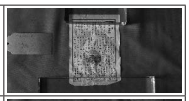
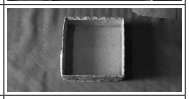
資料番号	名称	ふりがな	点数	法量	材質	備考	写真
128	木材	もくざい	1	縦1.9× 横24× 高1.1cm	木	凸がある。	
129	木材	もくざい	1	縦4× 横18× 高5.7cm	木		

130	木材	もくざい	1	縦0.9× 横28.5× 高0.3cm	木		
131	包み紙	つつみがみ	1	縦59.5× 横42.4cm	紙	「雲海の滝谷（長野）」の写真あり。	
132	カーテン フック	かーてん ふっく	2	縦7.0× 横2.0× 高0.2cm	鉄		
133	カーテン フック	かーてん ふっく	1	縦2.5× 横8× 高0.1cm	鉄		
134	カーテン フック	かーてん ふっく	1	縦6× 横1.6× 高0.1cm	鉄		
135	密閉栓抜	みっぺい せんぬき	1	縦4.5× 横6× 高2.5cm	鉄	「SIZZLER PATENT.NO,669817 "SPARKLING"」との記載あり	
136	紙	かみ	1	縦1× 横11cm	紙	「ATV-529AC」との記載在り。リモコンの型番	
137	三方面 補強金物	さんほうめんほきょうかなもの	1	高4.3cm		4ヶ所穴あり	
138	赤枠ローラー戸車		1	縦3.3× 横1.7× 高6.6cm	鉄	引き戸の開閉を滑らかにするもの。	
139	取手	とって	1	縦4× 横9× 高0.7cm	金属		
140	ビス	びす	1	縦9× 横1.2× 高0.4cm	鉄	青みがかっている。	
141	ビス	びす	1	縦9× 径1cm	鉄		
142	ミシン針	みしんばり	1	縦4.5× 横3× 高0.6cm	鉄、 プラス チック	ケースに「clover」との記載あり。ミシン針が6本入っている。	
143	L字フック	えるじふっく	1	縦3.9× 横1.2× 高0.2cm	鉄		
144	蠟燭	ろうそく	2	縦10.5× 径0.8cm	蝋	白？燭2本	
145	クリップ	くりっぷ	1	縦1× 横6.8× 高1.1cm	木、 金属		
146	ヘアクリップ	へあくりっぷ	1	縦1.9× 横6.1× 高0.9cm	鉄、 プラス チック	メイクの時など前髪やサイドの髪を留める。	
147	木材	もくざい	1	縦1.6× 横4.5× 高1.7cm	木	真ん中に穴あり。	

148	鍵	かぎ	2	縦2.3cm	金属	鍵をまとめている輪状のパーツのみ磁石に反応	
149	鍵	かぎ	1	縦2× 横2.1× 高0.2cm	金属	先が折れている	
150	鍵の部品	かぎのぶひん	1	縦2.7× 横1.8× 高0.7cm	金属	窓や扉の鍵の一部か？	
151	木材	もくざい	1	縦1.4× 横5.2× 高0.6cm	木		
152	ゴムの部品	ごむのぶひん	1	縦2.8× 横2× 高0.6cm	ゴム	赤	
153	合成樹脂の部品	ごうせいじゅしのぶひん	1	縦3.5× 横3.5× 高2.8cm	プラスチック		
154	皿	さら	13	縦10.5× 横14× 高3.5cm	プラスチック	「U2 アトム SANSHINKAKO」「通町\320山下」との記載あり。針4本、画鋲5個、ヘアピン1本、U字ピン1本が皿内にある。	
155	ダブルピンフック	だぶるぴんふっく	1		金属、プラスチック	ダブルピンフック　H-474	
156	包み紙	つつみがみ	1	縦50.7× 横36.4cm	紙	「Mt.Fuji by Reiji Hiramatsu」「1990年-平成2年」「平松礼二『路一春潮』」「山一証券」との記載あり	
157	花瓶	かびん	1	高24× 径15cm	土石-陶器	両側に凹みあり	
158	箸置き	はしおき	2	縦6.1× 横2.5× 高0.5cm	木	瓢箪型	
159	アイロン	あいろん	2	縦13.4× 横8× 高9cm	木、鉄、プラスチック	メーカー：ナショナル／製品名：ベビーアイロンN1-17	
159-1	箱	はこ	1	縦13.4× 横8× 高9cm	木		
159-2	アイロン	あいろん	1	縦11.4× 横5.9× 高7.5cm	鉄、プラスチック	メーカー：ナショナル／製品名：ベビーアイロンN1-17	
160	お猪口	おちょこ	3	高3× 径5cm	磁器	「太平山」との記載あり。	
161	福午	ふくうま	1	縦9.2× 横31.5× 高26cm	陶器	「福午」との記載あり。	
162	扇子	せんす	1	縦23.0× 横2.5× 高0.8cm	竹・布	要の裏に「10」の記載あり。	
163	曲尺	かねじゃく	1	縦50.1× 横24.2× 高0.1cm	ステンレス	数字は尺で書かれている。魯班尺。「財、病、離、義、官、却、害、吉」	

164	木材	もくざい	1	縦9× 横3.7cm	木		
165	木材	もくざい	1	縦1.6× 横20.2cm	木		
166	木材	もくざい	1	縦2.7× 横31.7cm	木		
167	木材	もくざい	1	縦2.2× 横37.6cm	木		
168	鏡	かがみ	1	縦9.9× 横26.9cm	鉄		
169	竹尺	竹尺	5	縦75× 横3cm	木	まとめて紐で巻き付けてあった	
169-1	竹尺	たけじゃく	1	縦75× 横2cm	木	「明治三拾八年本郷菊坂町二番地　〇〇〇〇〇」の記載あり	
169-2	竹尺	たけじゃく	1	縦30× 横3cm	木	「メートル」・「〇〇所有」の記載あり	
169-3	竹尺	たけじゃく	1	縦30× 横3cm	木	「〇〇」の記述あり。	
169-4	竹尺	たけじゃく	1	縦38× 横2cm			
169-5	紐	ひも	1	縦1.5× 横170cm	布	竹尺4つをまとめてあった	
170	指物	さしもの	1	縦27× 横20× 高24.5cm	木	継ぎ目あり。内側にガムテープ、及び、「十八」「2」の記載あり。	
170-1	アルカリ 乾電池	あるかり かんでんち	2	縦4.3× 径1.0cm		使用推奨期限「08-2016」単4形	
170-2	朱肉	しゅにく	1	縦9× 横9× 高1.7cm	金属	重い	
170-3	牛型の 楊枝入れ	うしがたの ようじいれ	1	縦7.8× 横3× 高4cm	磁器	青磁？	
170-4	包み紙	つつみがみ	1	縦27× 横39.8cm	紙	「登録　錦松梅　東京都新宿区四谷三丁目地下鉄前　電話03(359)0111(代表)　株式会社　錦松梅」との記載あり。	
171	アイロン	あいろん	2	縦19.1× 横12.3× 高14.2cm	木、 金属	「昭和二十五年十一月五日　伊」の記載あり。商品のシールが貼られている。	
171-1	箱	はこ	1	縦19.1× 横12.3× 高14.2cm	金属	「昭和二十五年十一月五日　伊」の記載あり。商品のシールが貼られている。	

171-2	アイロン	あいろん	1	縦15.1× 横8.0× 高10.5cm		「三菱電氣アイロン　三菱電機株式會社」の記載あり。	
172	指物	さしもの		縦23.5× 横33× 高30cm	木、 金属		
172-1	鏡架	きょうか	1	縦30× 横20× 高1.3cm	木	この他に自立させるためのパーツが存在していたと推測。	
172-2	糸	いと	2				
172-2-1	糸	いと	1	縦7.5× 横5cm		「糸町小旭」の記載あり。右から左へ読むものか。戦線のものの可能性あり。	
172-2-2	糸	いと	1	縦7× 横5cm		「北沢栄通」「コシノヤ糸店」「手芸と」「イトモノ」「〇〇〇〇」などの記載あり。	
172-3	糸巻き	いとまき	1	縦6× 横6cm	木	糸が付属。	
172-4	紙	かみ	1	縦5× 横4.5cm	紙	赤地に黒で「の」の記載あり。	
172-5	不明	ふめい	1		金属		
172-6	木材	もくざい			木	No.172の指物の部品か。	
172-7	蓋	ふた	1		紙	「寄紅恋 古今集　くれなひのはつ花染の　色ふかくおもひし　こゝろわれわすれ　めや　京都紅清誌」（縦書）との記載あり。172-9の箱とセットか。	
172-8	知工合		1	縦12× 横10× 高23cm	木		
172-9	紅	べに	3	縦8× 横8× 高3cm			
172-9-1	箱	はこ	1				
172-9-2	紙	かみ	1	縦5.57× 横5.57cm		「御化粧料京紅」との記載	
172-9-3	紅入れ	べにいれ	1	縦6.4× 横7.2× 高1.6cm			
172-9-4	紙	かみ	1	縦8× 横7.9cm			
172-10	箱	はこ	3	縦10.5× 横10.5× 高3.9cm	紙		

172-10-1	紙	かみ	1	縦13.4×横8.6cm	紙	「年玉と土産物」の記載あり。	
172-10-2	紙	かみ	1	縦16.4×横11.5cm	紙		
172-10-3	箱	はこ	1	縦10.5×横10.5×高3.9cm	紙		
173	箪笥	たんす	1	縦43.5×横78×高136.5cm	木(ベニヤ)	下段右の特殊扉の裏面に焼き印あり。	

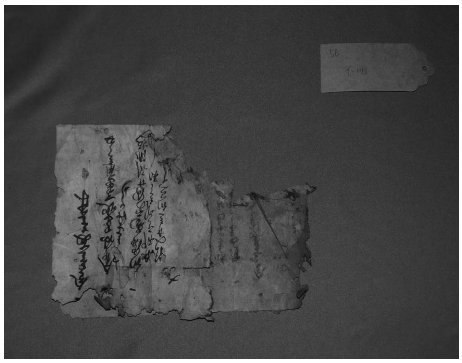


写真1：資料番号56の資料（修復前）

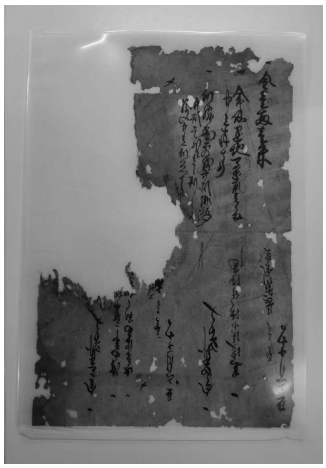


写真2：資料番号56の資料（修復後）

写真3，4：修復のレクチャーを受ける様子

写真5：指導してくださった職人さんと記念撮影

2022年度は、2021年度の調査で確認した、破損が著しい資料番号56の資料（古文書の一部）を、文京区内にある株式会社文化財ユニオン、株式会社上田墨縄堂の協力のもと修復作業を実施した。その際、学生メンバーも古文書修復の基礎的なレクチャーを受けることができた。今後も地域との連携を進め、調査だけではなく保存や修復についても知識や技術を身に付けたいと考えている。

引用文献

・新垣夢乃・大櫛優理・菊地春姫・末吉はづき・服部胡桃・松尾映里奈・松延咲季・森本千桜・渡邉菜月、2021、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告」『ゆかり』2
・磯田みずき・伊藤奈々・大櫛優里・菊地春姫・清水麻衣・末吉はづき・服部胡桃・松延咲季・黛沙也加・水村美穂・森本千桜・山岡沙織・若曽根南美・渡辺恵未・渡邉菜月、2022、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告（2）」『ゆかり』3

菊坂跡見塾文化財防火デー　避難訓練実施報告

水村美穂・山上真由子・渡邉菜月（跡見「学芸員」in 菊坂）

1．はじめに

毎年1月26日は「文化財防火デー」に制定されている。この日に合わせて、菊坂跡見塾では2022年に火災の避難訓練を行った。

そこで、昨年に引き続き2023年では「地震」を想定した避難訓練を実施することとなった。

2．川崎市立日本民家園への訪問とインタビュー

今回は地震からの避難を想定していた。そこで、数多くの古民家を野外展示している「川崎市立日本民家園」を訪れ、地震対策について園長の渋谷氏よりお話を伺った。

そこで、文化財の建築物の防災においては地震対策が重要であることを伺った。日本民家園では、阪神淡路大震災をきっかけに災害対策を行うようになった。外部の委員会を作って耐震をどうするか話し合いを行い、震度6強に耐えられるような耐震対策を目指したという。

民家の中には耐震工事だけではなく、免震工事を施した家もあった。耐震工事だと補強した部分が目立ってしまうなどの理由で、免震工事を選ばざるを得ないことがある。免震工事が施してある民家は地震が起きた際、中にいた方が安全という利点がある。しかし、免震工事後は定期的なメンテナンスが必要であり、その都度費用がかかるという。

日本民家園において一番怖いのは火災で、予防することが大事だという。だが、実際に火災が発生した際は、炎を感知して警報が鳴ったり、建物を水で囲むような消火装置が作動するようになっていたりと万が一の時のために対策もしっかりと行われている。

写真1：日本民家園での耐震補強工事の様子

写真2：日本民家園の免震建築物の説明

3．準備

まず、菊坂跡見塾で地震の避難訓練を計画するにあたり、「地震が起こった時の行動と、その後の避難の方法を身につける」というテーマを設定した。

3－1．訓練想定

学生のみが1階で作業中、スマホの緊急地震速報が鳴り、震度6以上の地震が発生したという状況を想定した。

訓練シナリオの作成

①　緊急地震速報
②　上から物が落ちてこない安全な部屋で待機（座敷八畳）
③　揺れが収まった後、外へ避難（今回は玄関から）
④　全員いるか確認

3－2．避難訓練の実施

2023年1月28日に、学生3名で避難訓練を実施した。また、本郷消防署から訓練用消火器を借用し、消火器の使用方法の確認と初期消火訓練も実施した。

4．今回見つかった問題点

実際に訓練を行ってみると、避難経路にある危険が複数見つかった。さらに、現在の設備では多くの問題点があることがわかった。今回の訓練では使わなかった勝手口から避難した場合も含め、危険や問題点についてまとめる。

≪建物に共通する危険≫
・頭部を保護するものが無い。
・至る所にガラスが使用されているため、窓ガラスやむき出しの蛍光灯が割れた場合、足を怪我する危険がある。
・イーゼルなどの展示の説明板等が倒れてぶつかったり、道を塞いで避難の妨げになったりする可能性がある。
・各部屋の照明器具は余分なコードを天井に打ちつけた簡易的なシングルフックねじに引っかけてあるため、地震の際照明器具が落下する可能性がある。
・冬に地震が起きた場合、ストーブが倒れて火事を誘発する可能性がある。
・見世側の建物の屋根は、瓦が乗っているだけなので動きやすく、道路側に落ちる危険がある。
≪玄関から避難した場合の危険≫
・玄関や門がゆがんで開かなくなる可能性がある。
・道路沿いの塀が崩れたり、塀の瓦が落ちてきたりする危険がある。
・表に脱出後、見世の前に行くと、上から瓦が落ちてくる危険があるため、注意が必要。

写真３：菊坂跡見塾での避難訓練の様子

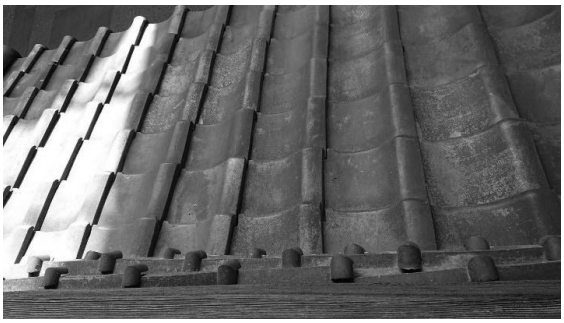


写真４：菊坂跡見塾２階からみた落ちる危険のある瓦

≪ガラス戸や風呂場を通って勝手口から避難した場合の危険≫

・敷石の凹凸に足を取られないよう気をつける。

・庭の灯籠が倒れる危険があるため、注意が必要。

５．改善点

今回の訓練を経て、比較的実現が容易な、改善できそうな点もいくつか見つかった。まず、窓ガラスの破片等があっても最低限逃げられるように各部屋にスリッパを常備すると良いと感じた。欲を言えば、照明具や瓦などの落下物も防げるようヘルメットもあると望ましい。想像以上にガラスが多い建物だったため、足元の安全の確保は少しでも可能性を高めたいところである。そして、展示の説明書きなどが載っているイーゼルを、簡単には倒れないように固定すること。これによって、少しでも逃走経路の安全性が高まるだろう。

６．避難訓練の感想とまとめ

今回の訓練では、“運よく”割れた蛍光灯や窓ガラスの破片などの危険物が足元になく、“運よく”玄関のドアが歪まずに開いていて、“運よく”外のブロック塀が崩れていなかったため脱出できたという想定だったが、あまりにも危惧すべき事象が多すぎることが判明した。現時点では運任せとはいえ一番脱出の可能性があるのは玄関からだが、実際に一階奥の部屋で作業していた場合、すぐそばの勝手口から出ることが出来れば、より迅速な脱出が可能になる。今回見つかった問題点を踏まえて、次回の訓練までにできることから要所を改善していく必要がある。その時また避難訓練を実施し、また改めて問題点や逃走経路を見直す必要があるだろう。

また、消火器を用いた消火訓練では、消防署から消火器を貸し出していただき、実際に使用することで消火器の扱い方を学ぶことが出来たので良い経験になった。この訓練は、可能であれば私たち跡見「学芸員」in 菊坂の学生らだけでなく、一般公開を担当する職員の方もやるべきだと感じた。

旧伊勢屋質店パンフレット制作活動

―旧伊勢屋質店パンフレット制作コンペ2022に採用されて―

鬼塚未奈・黛沙也加・小椋光希

はじめに

私たちは、旧伊勢屋質店や都内各所で配布される旧伊勢屋質店の紹介パンフレットを作成する「旧伊勢屋質店パンフレット作成コンペ2022」に参加し、そこで採用作品として採択されました。このコンペは、旧伊勢屋質店や地域の魅力を跡見学園女子大学の学生が取材し、パンフレット作品を作成します。審査員による審査を経て採用された1作品は、学生とプロのイラストレーターや印刷会社が協力して刊行され都内各所で配布されるというもので、2022年度が第1回目の試みでした。

今回のコンペには5グループ・個人が参加し、最終的には3グループ・個人が出品しました。出品作品は、東京シティアイ（観光案内所・コンシェルジュ）、はやしひろ（イラストレーター）、土居洋平（社会学者）が審査を行い、文京区アカデミー推進課が採用作品の確認が行われました。

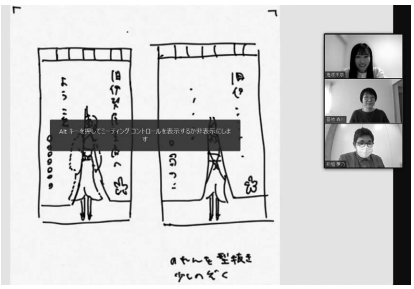
その結果、私たちの作品が採用されることになりました。活動としては、2022年6月に「旧伊勢屋質店パンフレット制作コンペ2022」がスタートしました。7月にはパンフレットのコンセプトを議論し方向性を固め、事前リサーチを行いました。8月には実際に旧伊勢屋質店や周辺の店舗に対しアポイントをとり取材を開始しました。9月には取材を進めながら、デザインや文章・内容などを固めていきました。そして、10月にはコンペに作品を出品しました。その後、12月に審査結果が発表され私たちの作品が採用されました。採用後は、印刷会社やイラストレーターとともに作品案をプロの手で仕上げていく作業、出来上がったデザインの修正などを行っています。3月下旬には刊行予定となっています。

パンフレット作品について

私たちは樋口一葉のゆかりの地である旧伊勢屋質店を中心とした文京区のパンフレットを作成しました。取材させていただいたのは「法真寺」「ミッキーズカフェ」「喜久月」「喫茶ルオー」です。

取材の様子

メンバー打ち合わせの様子



印刷会社さんとの打ち合わせの様子

出品した作品

プロの手を借りて完成したパンフレット

パンフレットのコンセプトは"もし一葉が現代に生きていたら"をイメージとし、手に取ってくれた方にその一葉の足跡をたどっていただくというものです。そのため、お店の写真には一葉の雰囲気を感じさせる女の子を登場させています。また、表紙は旧伊勢屋質店の暖簾をイメージしています。旧伊勢屋質店と文京区の魅力が手に取っていただいた方に伝わるパンフレットになっています。

活動に参加して

・鬼塚未奈（マネジメント学科３年）

私はパンフレットの作成から取材、デザインまですべてが初めての経験でしたが、メンバーと取材を協力してくださった方たちのおかげで自信をもって素敵だと言えるパンフレットを作成することができました。取材を通して私自身、樋口一葉や文京区の新たな魅力を知る良いきっかけとなりました。

作成するにあたって、デザインを考えるのは大変に感じましたが、お店の魅力が伝わるよう言葉と写

真、ひとつひとつ時間をかけ作成に取り組みました。中でも旧伊勢屋質店の暖簾を再現した表紙は特にこだわりました。表紙をめくるとその暖簾の先に女の子が出迎えているデザインはすごく気に入っていて、見てくれる人の目を引くデザインになっています。私たちのパンフレットを見て皆様にも樋口一葉のこと、旧伊勢屋質店のこと、そして文京区の魅力を知っていただくきっかけになればと思います。

・黛沙也加（人文学科４年）

パンフレット制作は、前回中心となって作業をさせていただいたので、今回はアドバイザーという形で参加させていただきました。前回と違いコンペ形式での選考でしたので、前回との差をつけつつ、どのようなところを意識したら見やすいパンフレットになるのかを考えながら制作しました。ほとんど、メンバーの２人が中心になって行ってくれて、とてもスムーズに進んでいて素晴らしいなと思いました。メンバーが考える原案を元に取材やデザインを行いました。その中で、前回の経験を活かしたアドバイスができていたら幸いです。

私ができたことは少ないですが、今回のパンフレットも多くの人に手に取って貰えたら嬉しいです。

・小椋光希（コミュニティデザイン学科２年）

旧伊勢屋質店について、あまり知らない人も多いのではないでしょうか。実際私も、この活動をするまでは何も知りませんでした。パンフレット作りに際して、必要となってくるのは取材にデザイン、何より旧伊勢屋質店の魅力を知ることでした。メンバーがいたからこそ、このパンフレットは完成しています。"もし一葉が現代に生きていたら"、"足跡を辿る"などがコンセプトとなっており、これを踏まえて私は主にパンフレットの中に登場する女の子のデザインをやらせて頂きました。写真の中で実際に登場しているかのような女の子は、パンフレットを読んでくれた人に強い印象を与えられたら嬉しい、そんな思いで描きました。表紙をめくると同時に、旧伊勢屋質店へ赴いているかのような…、そんな雰囲気を味わって頂きたいと思っています。メンバーとの取材から打ち合わせまで、私の関与している部分はとても限定的でしたが、メンバーとの時間はとても有意義で貴重なものだったと感じています。このパンフレットが、文京区や旧伊勢屋質店への魅力をさまざまな人に知ってもらえることを祈っています。

おわりに

この度パンフレット作成にあたり、多くの方のご協力により完成しました。お忙しい中、取材にご協力してくださった「法真寺」「ミッキーズカフェ」「喜久月」「喫茶ルオー」の皆さま、そして完成までをサポートしていただいたセントラル印刷の森川さま、はやしさま、誠にありがとうございました。皆さまのご協力により素敵なパンフレットを作成できたことをこの場をお借りして御礼申し上げます。

メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）〈紹介日順〉

〈テレビ・配信〉

（1）番組名：ぶんきょう浪漫紀行「樋口一葉が暮らした風景を辿る」
放送局名：文京区民チャンネル（区内CATV ／デジタル11ch）
放送日時：令和4年6月27日（月）～7月3日（日）12：20～／ 21：20～　※1日2回放送
YouTube版文京区民チャンネル（放送翌週の月曜日より配信）
https://www.youtube.com/user/citybunkyotv

（2）番組名：THE TIME，目覚める街のリアルTIME「早朝散歩」
放送局名：TBSテレビ
放送日時：令和4年11月7日（月）5：16頃

（3）番組名：ナイスキャッチぶんきょう「樋口一葉生誕150周年　企画展「一葉と花圃」
放送局名：文京区民チャンネル（区内CATV ／デジタル11ch）
放送日時：令和4年12月12日（月）～12月18日（日）12：00～／ 21：00～　※1日2回放送
YouTube版文京区民チャンネル（放送翌週の月曜日より配信）
https://www.youtube.com/user/citybunkyotv

〈新聞・雑誌〉

（1）アウトドア探検隊 我がまち再発見「啄木や賢治　歩み刻んだ街」東京・本郷編（上）
（「夕刊讀賣新聞」（令和4年4月22（水））

（2）【JR東日本 駅からハイキング】コースマップ 一文学の秋！ 4人の文豪ゆかりの場所をめぐる文学散歩
（「東日本旅客鉄道株式会社」令和4年11月発行）

（3）「一葉と花圃　二人の見た『女学生』」
（『東京新聞』令和4年11月19日（土））

（4）月刊「東京人」2023年3月号
（都市出版株式会社）

（5）『歩く地図 東京散歩2024』
（発行：成美堂出版株式会社、取材・編集：合同会社 あるっく社　2023年2月下旬（予定））

〈インターネットメディア〉

（1）「【文京区】跡見学園女子大学学生企画、樋口一葉生誕150周年記念企画展は旧伊勢屋質店にて11月23日～」（Yahoo!Japan CREATORS 文京地域探犬隊 2022年11月20日）
https://creators.yahoo.co.jp/bunkyochiikitanken/0100341673

（2）「【文京区】5千円札肖像の樋口一葉が通った質屋、一般公開に行ってきました。」（Yahoo!Japan CREATORS 文京地域探犬隊 2022年12月28日）
https://creators.yahoo.co.jp/bunkyochiikitanken/0100361802

2022年度の地域交流関連活動記録

地域交流センター

跡見学園女子大学における「地域交流事業」の運営体制

1．跡見学園女子大学地域交流センターについて

跡見学園女子大学地域交流センターは、本学に所属する教員や学生が地域交流活動を組織的・積極的に行えるように地域交流活動の支援を行い、そのために必要な環境整備を行うことを目的に、附属教育研究組織として平成31年度より設立されました。(「地域交流センター規程」)

具体的な活動は、下記の通りです。

① 地域交流活動の企画立案・実施
② 本学の地域交流活動についての情報収集及び成果の公表
③ 本学の地域交流活動に対する人的支援・財政的補助。
(本学の「正課」「正課以外」、本学教員の地域における調査・研究、本学人材の地域への提供等)
④ 地域交流活動への本学施設の開放
⑤ 自治体との包括連携協定の推進と協定締結自治体との連携事業の実施・支援

2．地域交流センター運営委員会について

地域交流センター運営委員会は、地域交流センターの上記の具体的活動に関する事項を審議することを目的に、委員長たるセンター長と各学部より選出された委員および、若干名の専門委員により組織されています。(「地域交流センター運営委員会規程」)

3．地域交流センター運営委員会開催一覧

令和4年度運営委員会　第1回（令和4年　4月27日〈水〉）14時40分～16時10分〈Teams使用〉
第2回（令和4年　5月25日〈水〉）14時40分～16時10分〈Teams使用〉
第3回（令和4年　6月22日〈水〉）14時40分～16時10分〈Teams使用〉
第4回（令和4年　7月27日〈水〉）14時40分～16時10分〈Teams使用〉
第5回（令和4年　9月28日〈水〉）14時40分～16時10分〈Teams使用〉
第6回（令和4年10月26日〈水〉）14時40分～16時10分〈Teams使用〉
第7回（令和4年11月30日〈水〉）15時00分～16時00分〈Teams使用〉
第8回（令和5年　1月25日〈水〉）14時40分～16時10分〈Teams使用〉
第9回（令和5年　3月　1日〈水〉）13時00分～14時00分〈Teams使用〉

平成４年度　連携地域・企業（提携日順）

跡見学園女子大学　自治体等 協定締結先一覧（令和５年１月現在）　※締結順

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
埼玉県	彩の国大学コンソーシアム友好交流に関わる協定	H13（2001）10.15締結 H17（2005）4.1改訂		自動更新	・教育交流 「単位互換」プログラム、教養教育の共有化、リメディアル教育、インターネット等を利用した遠隔事業、「編入生」受け入れ・交換プログラム ・研究交流 学生、教員における研究プログラム ・学生交流 学生交流、「スポーツ・リクリエーション活動」の共同開催プログラム ・教職員交流 FD研究・フォーラム等の開催、事務職員研修 ・地域交流 「公開講座」共同開催プログラム、「生涯学習」プログラム、「地域への便益還元・奉仕活動」プログラム ・その他 入試広報、WBT（Web Base Training）
埼玉県新座市	新座市と跡見学園女子大学との連携協力に関する包括協定	H20（2008）4.1	H22（2010）4.10	自動更新	・社会福祉の充実に関する事項 ・教育・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全・回復・創出に関する事項 ・防災に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
東京都文京区	学校法人跡見学園跡見学園女子大学と文京区との相互協力に関する包括協定	H23（2011）5.17	H26（2014）3.31	自動更新	・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施
埼玉県新座市・埼玉県新座警察署	新座市における女子学生安全対策協定	H23（2011）7.29	H25（2013）7.28	自動更新	・女子学生に対する防犯指導 ・安全情報の提供及び情報交換 ・学生防犯リーダーによる啓発活動への支援

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
福島県会津若松市	学校法人跡見学園跡見学園女子大学と会津若松市とのパートナーシップ協定	H24(2012)7.25	H27(2015)7.24	自動更新	・学術研究の成果、地域施策の充実及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施
東京都文京区	災害時における母子救護所の提供に関する協定	H24(2012)9.7			
埼玉県和光市	和光市と学校法人跡見学園　跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	H24(2012)11.22	H27(2015)11.21	自動更新	・社会福祉の充実に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全、創造に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
埼玉県新座市	災害時における施設の使用に関する覚書	H25(2013)1.10締結 H26(2014)2.13改訂			・新座市内に災害が発生した場合に、本学を避難場所としてグラウンドや体育館の提供及び避難所等の開設を行う ・避難者の安全を確保することを目的とする ・物品資材等の設置や土地の使用に関する事項を追加（平成26年2月13日に再締結）
一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会		H26(2014)6.23	R2 (2020)12.31		・人的分野及び教育的分野での連携 ・オリンピック・パラリンピック競技大会に関わる研究分野での連携 ・オリンピック・パラリンピック競技大会の国内PR活動での連携 ・オリンピックムーブメントの推進及びオリンピックレガシーの継承に関する連携
全国「道の駅」連絡会	「道の駅」就労体験型実習の実施に関する基本協定	H27(2015)3.10			・「道の駅」就労体験型実習の実施
長野県	学校法人跡見学園跡見学園女子大学と長野県との相互協力に関する協定	H27(2015)6.22	H29(2017)3.31	自動更新	・学術研究の成果及び人材の提供 ・学生の就職支援 ・インターンシップの実施
警視庁大塚警察署	災害及び防犯ボランティア等に関する協定	H27(2015)9.1	H28(2016)8.31	自動更新	・防災及び防犯等各種広報活動に対する共同活動 ・発災時に文京区が設置する避難所等における災害警備活動

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
秋田県男鹿市	秋田県男鹿市と学校法人跡見学園　跡見学園女子大学との連携協力協定	H27(2015) 12.21	H30(2018) 12.21	自動更新	・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・人材育成に関する事項
山形県西川町	山形県西川町と学校法人跡見学園　跡見学園女子大学との連携協力協定	H27(2015) 12.22	H30(2018) 12.22	自動更新	・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項
群馬県長野原町	学校法人跡見学園女子大学と長野原町との相互協力に関する包括協定	H28(2016) 4.19	H31(2019) 4.19	自動更新	・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・その他前条の目的を達成するために甲及び乙が必要であると認めたこと
埼玉県三郷市	三郷市と学校法人跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	H29(2017) 3.6	H30(2018) 3.6	自動更新	・社会福祉に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・スポーツに関する事項 ・地域環境に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティに関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他前条の目的を達成するために甲及び乙が必要であると認める事項
富山県立山町	富山県立山町と学校法人跡見学園　跡見学園女子大学との連携協力協定	H29(2017) 5.22	R2 (2020) 5.22	自動更新	・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他上記の目的に関して、両者が協議して必要と認められる事項
長野原町	長野原町と跡見学園女子大学観光コミュニティ学部との観光振興プロジェクトに関する覚書	H29(2017) 6.1	H29(2017) 11.19		・長野原町八ツ場地区における調査研究活動への協力 ・学生による調査研究結果の提供、及び研究成果の地域での活用
和光市文化振興公社	公益財団法人和光市文化振興公社と跡見学園女子大学との相互協力協定書	H29(2017) 6.23	R3 (2021) 3.31	自動更新	・文化更新に関する事業 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・地域文化資源に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他、甲と乙が相互に必要と認める事項
千葉県いすみ市	いすみ市と跡見学園女子大学における域学連携に関する協定書	R1 (2019) 6.1	H31(2019) 3.31		・いすみ市における地域創生をテーマに共同で研究、実践活動を行うことを目的とする
静岡県東伊豆町	東伊豆町と跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	R1 (2019) 11.19	R4 (2022) 11.18	自動更新	・活力ある地域づくり ・観光振興 ・情報発信 ・人材育成 ・研究教育

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
株式会社ジャルパック	跡見学園女子大学と株式会社ジャルパックとの連携に関する協定	R2 (2020) 2.4	R3 (2021) 2.3	自動更新	・教育、研究、文化の発展・向上に関わる相互支援 ・学生・教職員と社員の相互交流 ・人材育成・キャリア形成 ・学生・教職員の研究成果・活動を業務に活かす ・地域社会の発展・活性化
公益財団法人角川文化振興財団	跡見学園女子大学と公益財団角川文化振興財団との連携に関する協定書	R2 (2020) 8.1			・教育、研究、文化の発展・向上にかかわる相互支援に関すること ・学生及び教職員と社員の相互交流に関すること ・本学の人材育成・キャリア形成に資する支援に関すること ・学生及び教職員の研究成果・活動と角川文化振興財団の文化活動の成果を互いに活かすこと ・地域社会の発展・活性化に関すること ・その他、相互に連携・協力が必要と認められる事項
エーザイ株式会社	コミュニティスペース運営協力に関する協定書	R2 (2020) 9.24			・千石三丁目居場所作りプロジェクト実行委員会の準備・運営するコミュニティスペース（所在：文京区千石三丁目三番七号）への協力（知的資源の提供・人材の派遣等） ・前１項及び２項の目的達成のための相互交流、研究成果・知識の交換 ・その他地域社会の発展・活性化に関する取組み
埼玉東上地域大学	埼玉東上地域大学教育プラットフォーム協定	R2 (2020) 12.1		自動更新	・自治体及び企業・団体と連携して、当該地域の少子高齢化問題の解決及び地域活性化の推進に向けた「多様な高等教育の提供」「生活しやすい地域づくり」及び「地域産業の活性化」等の活動を柱として当該地域社会の継続的な発展に寄与することを目的とする
埼玉東上地域大学代表校、和光市	埼玉東上地域大学教育プラットフォーム包括協定	R4 (2022) 4.1	R5 (2023) 3.31	自動更新	・地域の自立、持続可能な地域社会の実現とその発展に寄与する「多様な高等教育及びリカレント教育の展開」「人々が安心して、安全に、幸せに暮らせる地域づくりの推進」「若者の定住促進を図り、地域産業の振興と雇用の創出」などに資する事業

令和４年度　文京区受託事業

事　業　名	令和４年度　文の京ゆかりの文化人顕彰事業『朗読コンテスト』
主　　催	文京区　主管・運営：跡見学園女子大学
日　　時	令和４（2022）年11月13日（日）本選13時～16時
場　　所	跡見学園女子大学　ブロッサムホール（文京区大塚）

第11回目となる「朗読コンテスト」を、昨年度に引き続き感染拡大防止策（マスクの着用、会場入り口での検温、アルコール消毒、会場内では席の間隔をあけての着席、換気のための後方扉の開放など）を徹底して実施した。

受賞者（青少年の部）

受賞者（一般の部）

1．事前録音審査応募総数

344名（一般199名、青少年145名）

※事前録音審査　256名(一般130名､青少年126名)

※審査対象外　　88名（一般69名、青少年19名）

※本選出場者数　青少年の部　8名（うち1名が当日欠席）

一般の部　9名（うち1名が当日欠席）

2．録音審査応募期間

8月29日（月）から9月2日（金）

3．録音審査

9月15日（木）、16日（金）

一般財団法人NHK放送研修センター

本選観覧者　事前申し込み：146名

当日観覧来場者：113名

4．審査結果

賞	一般の部入賞者一覧		青少年の部入賞者一覧	
	氏名	朗読作品	氏名	朗読作品
最優秀賞	小池千晶	雁	島津歩実	舞姫
優秀賞	須藤えりか	最後の一句	平田慧	青年
優秀賞	村上征夫	高瀬舟	松永紗朱花	最後の一句

※青少年の部は23歳以下の方

5．審査員

氏名	肩書
広瀬　修子 氏	元跡見学園女子大学教授、元NHKアナウンサー
高橋　淳之 氏	一般財団法人NHK放送研修センター専門委員
上野　義博 氏	文京区教育委員会教育推進部教育指導課　指導主事

事　業　名	旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）一般公開事業
主　　催	文京区
受　　託	跡見学園女子大学

令和４年度旧伊勢屋質店一般公開は、昨年度に引き続き感染拡大防止策を講じた上で令和４年４月から令和５年３月まで、年間61日を開館した。

1．入館に当たっての感染拡大防止案内（建屋入口に掲出）

（1）施設利用時の注意事項

グループでの来館はお控えください。また、施設前でお待ちいただくことはできませんので、あらかじめご了承ください。

以下に該当する場合は入館をお断りします。

・発熱がある場合

・体調がすぐれない場合（例：咳、咽頭痛、味覚障害等の症状）

・同居家族や身近な知人に感染が疑われる人がいる場合

・入国制限・観察期間等がある海外から２週間以内に帰国した場合

マスクを持参し着用してください。着用のない場合、入館をお断りすることがあります。

手指を消毒してください。

周囲の人と、できるだけ2m以上の距離を空けてください。

会話は最小限にして、大きな声を出さないでください。

展示物や壁に触らないでください。

同じ場所で長時間滞留しないでください。

入館日を記録した用紙を渡すので、少なくとも２週間は保管してください。

来館後２週間以内に新型コロナウイルス感染症を発症した場合は、速やかに連絡してください。

（連絡先：アカデミー推進課 観光担当 電話番号：03-5803-1174）

靴袋は各自で取り、見学中は持参し、使用後はお持ち帰りください。

感染防止のために施設が定めたその他の措置の遵守、スタッフの指示に従ってください。

感染症拡大防止のため、皆様のご協力をお願いいたします。

また、注意事項は今後変更する場合があります。変更があり次第、ホームページ等でお知らせします。

（2）施設でのご案内について

当面の間、スタッフによる口頭での説明は行いません。

館内に掲示のパネル等をご覧ください。

（3）施設の衛生対策

職員のマスク着用及び手指消毒（手洗い含む）の徹底

職員の体調管理の徹底

施設の換気及び定期的な消毒

館内に感染予防に関する注意喚起や滞留防止を促す目印の掲示

令和４年度菊坂跡見塾一般公開日　　**令和５年３月31日**

4

月	火	水	木	金	土	日
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

月合計４日

5

						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

月合計８日

6

		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

月合計８日

7

				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

月合計６日

8

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

月合計１日

9

			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

月合計７日

10

月	火	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

月合計７日

11

	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

月合計８日

12

			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

月合計６日

1

						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

月合計２日

2

		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28					

月合計２日

3

		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

月合計２日

開館日

年合計61日

●令和４年度　旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）一般公開について

年間開館日数　61日

年間来館者数　文京区民539人　文京区民以外894人　跡見学園関係者19人　合計1452人

事業名	文京アカデミープロデュース「学長講演会」
主催	文京アカデミー
受託	跡見学園女子大学
日時	令和4（2022）年9月10日（土）13時30分～15時00分
場所	跡見学園女子大学　ブロッサムホール（文京区大塚）
講座タイトル	女子教育の時代を生きる ―跡見花蹊と樋口一葉―
講座内容	跡見花蹊と樋口一葉。同時代人でありながら、この二人には直接の接点はない。年齢的に30歳以上の開きがあり、住んだ世界もちがった。しかし、女子教育という視点で眺めてみると、二人の同時代性が浮かび上がってくる。女子教育と文学、異なる世界で活躍した二人の女性の生きざまが示唆しているものは何かを考えた。
参加者数	86名

令和4年度　その他の助成金

事業名	公益信託大成建設自然・歴史環境基金「2020年度助成」に伴う調査活動
テーマ	近代学生街の生活環境に関する歴史的研究
副題	文京区旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）所蔵資料の保存・調査から

活動一覧

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
台東区立一葉記念館の特別展示見学	ポータル公募学生	R4（2022）5.5（木）	台東区立一葉記念館	・活動の一環として同記念館が実施する特別展示の見学と担当学芸員との交流を行った。
田畑文士村記念館（北区）の展示見学&学芸員との交流	ポータル公募学生	R4（2022）7.3（日）	田畑文士村記念館	・記念館の展示見学解説会へ参加。 ・実際の展示がどのように作られるかを学ぶ貴重な機会であり、見学と担当学芸員との交流を行った。
台東区立一葉記念館との展示企画打ち合わせ	ポータル公募学生	R4（2022）7.14（水）	台東区立一葉記念館	・跡見「学芸員」in菊坂の学生が、11月開催に向けての準備を進めている企画展示のため記念館を訪問。 ・借用予定資料の確認と担当学芸員との打合せを行った。
古文書修復作業への参加	ポータル公募学生	R4（2022）8.1（月）～8.2（火）	株式会社上田墨縄堂	・交流を重ねてきた株式会社上田墨縄堂（国内トップクラスの文化財保存や修復技術を持つ企業）の古文書修復作業へ参加・体験の機会を得た。 ・トップクラスの保存修復技術の一端を実体験する学びの機会となった。
文京区菊坂地域での調査活動	ポータル公募学生	①R4(2022)8.5（金） ②R4(2022)8.19（金）～8.31（水）	文京区菊坂地域	・調査活動の成果報告書を刊行すべく、菊坂地域の地理的なフィールドワークや地域の歴史に詳しい方へのインタビューを行った。

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
菊坂町会主催「菊坂子ども探検隊」への協力参加	ポータル公募学生	R4（2022）8.20（土）	菊坂跡見塾	・交流を重ねてきた菊坂町会からの依頼。 ・「菊坂子ども探検隊」において地域の子ども向けに菊坂跡見塾での活動解説を行った。
文京区菊坂地域での調査活動	ポータル公募学生	R4（2022）10.1（土）～10.31（月）	文京区菊坂地域とその周辺地域、川崎市立日本民家園	・文京区旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）所蔵資料の保存・調査活動
文京区菊坂地域での調査・企画展活動	ポータル公募学生	R4（2022）11.14（月）～11.30（水）	文京区菊祭地域とその周辺地域、台東区立一葉記念館とその周辺地域	・企画展活動の準備と片付け、資料借用と運搬、展示会活動の運営などの活動を行った。

令和４年度 地域交流・企業連携活動（地域・実施日順）

文京区等

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
区内大学学生支援担当者会議	地域交流センター	①②月1回／通年 ③R5(2023)3.16（木）	①②各大学、フミコム ③文京学院大学	①地域連携ステーションフミコムの呼びかけにより区内大学の地域関係の担当者有志が定例会合を実施・関係性を構築。 ②銭湯振興プロジェクトを共同で実施した。 ③会議参加大学の学生を集めた活動報告・交流会が文京学院大学で開催された。
文京区ピアアクティビスト育成事業	地域交流センター	①R4(2022)4月募集 ②R4(2022)10.29（土）		①文京区総務課ダイバーシティ推進担当の進める「ピアアクティビスト」の育成講座を開催した。 ②講座に参加した２名の学生が、学園祭にて発表した。
NPO法人日本成人病予防協会の人材育成プログラムによる小学校への食育出張授業の講師	石渡ゼミ３年生	R4（2022）4.1（金）～R5（2023）3.31（金）	東京都内の小学校	・NPO法人日本成人病予防協会が次世代へと健康の大切さを伝えていく若い世代の指導者を育成するプログラムを開始した。 ・食や健康に関するセミナー・勉強会の企画運営や健康に関する知識を持った人材育成を行った。 ・初年度の取り組みとして、石渡ゼミの学生（健康管理能力検定２級の取得と日本成人病予防協会講師による実施試験に合格した者）が食育講師として実際に小学校で授業を行った。
企業とのコラボレーションによる食育イベント	石渡ゼミ３年生	R4（2022）4.14（木）～R4（2022）9.30（金）	クイーンズ伊勢丹仙川店	・昨年度に引き続き、株式会社エムアンドフードスタイルとの共同企画として、スーパー店内の特設展示スペースで食育イベントを実施した。 ・テーマとなる野菜に関する情報を提供する展示物やレシピ、調理動画を公開した。 ・学生が会場に赴き、来店客に直接展示内容について説明した。

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
文京ハッピーベジタブルフェスタ	石渡ゼミ 3年生	R4（2022） 4.14（木） ～ R4（2022） 9.30（金）	学内およびオンライン	・文京保健所健康推進課主催の「文京ハッピーベジタブルフェスタ2022」にゼミとして出展した（9年目）。 ・オンライン開催 8.31(水)～9.18(日) サブテーマ「野菜がおいしいごはんを食べよう！」
未来の健康を作る食育プロジェクト2022	石渡ゼミ 3、4年生	R4（2022） 5.13（木） ～ R5（2023） 3.31（金）	学内および文京区内小学校または児童館、学童保育所など	・2013年から6年間にわたる地域高齢者の孤食解消・外出頻度の向上を目的とした、「高齢者のための共食プロジェクト」の取り組み。 ・平成30年度に農林水産省が主催する第2回食育活動表彰で消費安全局長賞を受賞した。 ・今年度からは、地域の高齢者ばかりでなく子どもの食育改善も目指した新たな食育プロジェクトをスタート。1年目となる今年度は、中学生を対象に食育活動を行った。
文京コミュニティバス“B－ぐる”活性化プロジェクト	AGB隊 （跡見ガールズB－ぐる隊）	R4（2022） 5.30（月） ～ R5（2023） 3.31（金）	会議場所： 文京区区民センター、文京キャンパス 取材・撮影等： 文京区内関係各所	・文京区のコミュニティバス“B－ぐる”活性化プロジェクト。 ・映像では、主に文京区の魅力について紹介する。 ・AGB隊が3チームにわかれ、テーマを定めて区内を取材・撮影と編集作業を行った。 ・取材先との調整や編集作業にあたっては、「B-ぐるバス沿線協議会」と連携して行った。 ・公開予定は9月･12月･3月の各1ヶ月。活動を通じて、構成メンバーのチームでの行動力、外部との交渉力、コミュニティへの理解、映像制作・表現力、事業マネジメント力等の向上を目指した。
文京区〈地域の居場所〉プロジェクト	文京区 〈地域の居場所〉 プロジェクト	R4（2022） 6.1（水） ～ R5（2023） 3.31（金）	会議場所： 文京キャンパス教室およびズームによるオンライン会議 活動場所： 千石三丁目「つゆくさ荘」ほか	・千石三丁目に新たにできた地域の居場所施設「氷川下つゆくさ荘」をはじめとした、文京区内の〈地域の居場所〉での企画の提案・実施や、各種居場所で行われている事業の支援をするプロジェクト。 ・地域交流センターの呼びかけで参加した学生・教員が活動に参加した。必要に応じて、外部の各団体にも参加を呼び掛けた。

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
菊坂跡見塾での「菊坂七夕祭り」実施	跡見「学芸員」in菊坂 連携先： MIRATZ、 本郷第二保育園	R4（2022） 7.6（水） ～ 7.8（金）	菊坂跡見塾 （旧伊勢屋質店）	・菊坂跡見塾周辺のマンションの一室を活用した園庭を保有しない保育所向けに「菊坂七夕祭り」を開催し、子どもたちに文化を経験・学ぶ機会を提供した。 ・学芸員課程を履修する学生が多い、跡見「学芸員」in菊坂の学生たちにとっては学芸員の重要な活動である子どもたちへの教育普及の方法について経験を積むこと、地域の課題を把握し課題解決を行う行動力を身に付ける機会となった。
①第3回『文の京（ふみ　みやこ）書道展』の開催 ②『文の京（ふみ　みやこ）書道特別展』の開催	文学部 横田恭三教授	① R4（2022） 7.6（水） ～ 7.26（火） ② R4（2022） 7.3（日） ～ 7.7（木）	①文京区シビックセンター　地下1階アトリウム ②ギャラリーシビック	①本学の書道を愛好する学生の育成と発表機会の提供 ・本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供 ・本学書道実習受講者および本学書道愛好者で出品を希望する者の書作品の展示 ②本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供 ・関東を中心とする主な高等学校に対する本学教職課程（書道）の認知 ・文京区との連携による生涯教育推進及び社会貢献
大塚仲町町会「こども広場」へのボランティア参加	ポータル 公募学生	R4（2022） 7.17（日）	大塚仲町公園	・本学と大塚仲町町会が連携して社会課題の把握と解決を目指す「大塚仲町町会プロジェクト」に伴う活動。 ・今回は町会が開催する「こども広場」の運営スタッフとして参加、地域貢献を行った。 ・地域住民や子どもたちとの交流を深める機会となった。
第37回 文京朝顔・ほおずき市運営への協力・出展	ニューツーリズム研究会	R4（2022） 7.23（土） ～ 7.24（日）	傳通院、源覚寺	・37回目を迎える「文京朝顔・ほおずき市」での活動。 ・跡見ニューツーリズム研究会は、文京区の祭事である本イベントの運営協力を行ってきた。地域の人たちとともに活動することで地域活性の支援と協調性の力を養うことができた。 ・業務内容 傳通院：朝顔の販売、子ども向け体験ブースの出展 源覚寺：ほおずきの販売支援ほか

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
「行こうよ！文京浴場♨～学生プロジェクト～」にともなう取材活動	ポータル 公募学生	①R4(2022) 7.23（土） ②R4(2022) 7.24（日） ③R4(2022) 8.3（水） ④R4(2022) 8.4（木）～ 8.31（水） ⑤R4(2022) 8.8（月） ⑥R4(2022) 8.14（日） ⑦R4(2022) 10.1（土）～ 10.31（月） ⑧R4(2022) 11.16（水）～ 11.30（水） ⑨R4(2022) 12.16（金）～ 12.31（土）	①大黒湯 ②ふくの湯 ③豊川浴泉 ④⑦⑧⑨ 文京区内銭湯（大黒湯、ふくの湯、豊川浴泉、白山浴場）、各銭湯の周辺地域、拓殖大学 ⑤豊川浴泉 ⑥大黒湯	・文京区浴場組合より依頼を受け、大学生の力によって「浴場を地域の居場所にする」、「浴場を若い世代にも知ってもらう」ということを目標にして立ち上げたプロジェクト。 ・本プロジェクトは本学、文京区浴場組合、拓殖大学と複数の団体が協働で取り組む地域連携プロジェクト。
株式会社山元との展示企画打ち合わせ	跡見「学芸員」in菊坂	R4（2022） 8.5（金）	・株式会社山元 ・山元所沢商品センター	・学生たちが11月開催に向けて準備を進めている企画展示のため、現地にて展示スペースデザインの検討と什器確認、担当との打ち合わせを行った。
旧伊勢屋質店パンフレット制作コンペにともなう調査・取材活動	ポータル 公募学生	①R4(2022) 8.19（金）～ 8.31（水） ②R4(2022) 9.1（木）～ 9.30（金）	文京区菊坂地域とその周辺地域	・旧伊勢屋質店パンフレット制作コンペにともなう学生たちの調査・取材活動。 ・活動の成果をもとに、パンフレットの原案を制作したもののコンペを実施した。 ・採用作品については、学生が印刷会社での実際の作業に参加した。
文京まちたいわフェス	土居センター長 地域交流センター	①R4(2022) 9.4（日） ②R5(2023) 2.12（日）	跡見学園女子大学 文京キャンパス	①②主催：文京まちたいわフェス実行委員会／文京区まちづくり関係者有志が集う区内地域活動等の発表イベント。 ①9月はパフォーマンス中心イベントに約70名の参加があった。 ②2月は音楽と地域づくりをテーマにしたトークセッションとパフォーマンス、子ども向け縁日企画が行われ約400名の参加があった。
妊産婦・乳児救護所開設訓練	文京区防災課、跡見学園女子大学	R4（2022） 9.15（木）	跡見学園女子大学 文京キャンパス	・妊産婦・乳児救護所の実際の開設の手順の確認及び活動の確認を行った。 ・特に発災時の初期対応に重点を置き実効性のある訓練を行った。
文京区菊坂町会主催ハロウィンへのボランティア参加	ポータル 公募学生	R4（2022） 10.29（土）	菊坂町会エリア、菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）	・菊坂町会よりハロウィンイベントのボランティア募集があり、学生が参加した。
文京区氷川下町会主催ハロウィンへのボランティアの参加	跡見学芸 in菊坂	R4（2022） 10.30（日）	文京区氷川下町会エリア、つゆくさ荘	・千石三丁目居場所づくりプロジェクトで連携してきた文京区氷川下町会会長よりイベントでのボランティア募集があり、学生が参加した。

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
春日忌への参加	基礎ゼミ インターン生、 ボランティア学生、 地域交流センター	R4（2022） 10.15（土）	麟祥院	・春日局の追善供養の行事である春日忌は、2018年度より一般公開もされ地域イベントとしてスタートした。 ・春日忌の運営に関わる会社には、例年、就職課で行っている「ATOMIインターンシップ」や観光コミュニティ学部の「基礎ゼミインターンシップ・学外実習」で学生がインターン等を行ってきた。 ・インターンの実施および春日忌配布・販売物品の企画制作が行われ、当日は学生が春日忌の跡見学園女子大学ブースの運営を行った。
「いきいきシニアの集い」への書道作品出展	跡見学園女子大学書道部	R4（2022） 11.19（土） ～ 11.20（日）	文京シビックセンター	・文京区高齢福祉課、文京区高齢者連合会主催の「いきいきシニアの集い」へ学生の書道作品を出展した。 ・多世代交流の機会となった。
礫川マラソン	地域交流センター 篠﨑ゼミ	R4（2022） 11.27（日）	文京区内走路	・主催：礫川青少年健全育成会が３年振りに実施した。「あと水」の提供とゼミの学生14名が走路での誘導ボランティアとして参加した。
小石川表町会餅つき大会運営協力	ニューツーリズム研究会	R4（2022） 12.11（日）	小石川ここわ保育園・小石川オリーブ通り	・文京区礫川地区の小石川表町会とは文京朝顔・ほおずき市をきっかけに様々な町会イベントで学生が運営のボランティアを行っている。 ・同町会主催の「餅つき大会」の運営に、文京朝顔・ほおずき市の運営に協力した跡見ニューツーリズム研究会が参加した。 ・地域の方々と共に活動することで地域活性の支援と協調性の力を養うことができた。 ・業務内容 餅つき大会の受付・誘導などの運営支援
菊坂こども歴史探検隊の「かるた会」の開催	跡見学園女子大学かるた部、 地域交流センター	R5（2023） 1.7（土）	菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）	・菊坂町会主催の子ども向けかるた会。 ・菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）にて、百人一首体験プログラム、かるた大会、百人一首挑戦プログラムを本学かるた部の協力のもと実施した。 ・参加：20名（菊坂地域住民15名、かるた部学生４名、地域交流センター教員１名）
文京博覧会	地域交流センター	R5（2023） 1.27（金）、 1.28日(土)	文京区役所	・文京区シビックセンター地下２階を会場に区内の企業が出展・物販などを行うとともに区内の大学が出展しているイベント。 ・３年ぶりの開催となり、地域交流センターとして出展。学生ボランティア２名が着ぐるみ「BUNレンジャー」の演者として協力した。

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
文化財防火デー訓練実施	ポータル公募学生	R5（2023）1.28（土）	菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）	・文化庁と消防庁が定める文化財防火デーに合わせて、学生たちが文化財の防災について学んできた内容の実践訓練を行った。

新座市等

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
新座市障害者地域活動センターとの交流活動、ボランティア参加（①農作業、②ハロウィン、③クリスマス会	ポータル公募学生	①R4(2022) 6.15（水）、6.22（水）、9.20（火）、9.27（火） ②R4(2022) 11.1（火）～11.2（水） ③R4(2022) 12.20（火）	新座市障害者地域活動センター	・障がい者が地域で自立できるよう生産活動や創作活動、地域社会との交流促進を提供する施設で、地域社会との交流の一環として、本学学生とともに作業を行う活動を実施した。 ・障がい者には地域社会との交流の機会の創出、学生にとっては地域貢献を行うと共にダイバーシティに関する実際の社会での実情や課題の所在を学ぶ機会となった。
新座市北部第二地区地域福祉推進協議会主催「遊びの広場」への参加	ポータル公募学生	①R4(2022) 5.22（日） ②R4(2022) 6.26（日） ③R4(2022) 8.17（水）	①② 新座市東裏公園 ③新座小学校	・新座市内の子育て支援を目的とした活動である。 ・障がいを持った子どもたちも含め子どもたちが共に遊べる遊び場をつくることで、子ども同士、親同士、子どもと地域のネットワークを構築するための活動にスタッフとして参加した。
新座市児童センター主催「かえっこストリート」へ運営スタッフとして参画	ポータル公募学生	・事前準備 R4（2022）8.7（日）、8.14（日）、8.21（日） ・かえっこストリート 8.26（金） ～ 8.28（日）	新座市児童センター	・子どもたちが経営者となり、各自不要になったおもちゃを交換したり、他の経営者のお手伝いをしておもちゃに交換可能なポイントをもらうイベント。 ・新座市児童センターが立地する地域は、子どもの貧困や育児放棄などの課題が散見される地域である。 ・子どもたちの状況に触れ、経営思考を意識させ、かつSDGsにもつながるイベント。 ・学生は、「かえっこ会議」の運営から当日のイベントを担当した。地域貢献を行うとともに、子どもたちのおかれた状況を知り、問題意識を深める機会となった。
市内３大学学生と市長との懇談会	地域交流センター 篠﨑ゼミ	R4（2022）11.15（火）	新座市役所	・新座市長と市内三大学の学生の懇談会。指定されたテーマで発表を行い相互に質問および市長・教育長がコメントをするもの。ゼミの２年生４名が発表したほか、ゼミ教員、地域交流センターの教職員が参加した。また、１年生６名が傍聴した。

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
清瀬市内での発掘調査現場の見学	ポータル公募学生	R4（2022）11.21（月）	東京都清瀬市下宿3丁目（新座キャンパス近隣）	・清瀬市ならびに株式会社テイケイトレード埋蔵文化財事業部の厚意により、学生たちの学びの機会として考古学の発掘調査現場で見学を行った。
北二フェスタ冬への参加	コミュニティデザイン学科1年生有志	①R5(2023) 2.21（火） ②R5(2023) 2.26（日）	①文京キャンパス ②北野第二公園	・コミュニティデザイン学科の1年生がプロゼミの授業で連携している新座市北部第二地区社会福祉推進協議会が開催するイベントへの運営スタッフとして参加した。
わこらぼまつり用参加活動団体紹介冊子作りのボランティア参加	ポータル公募学生	R5（2023）2.17（金）	和光市役所	・わこらぼまつりに配布する参加活動団体紹介冊子の作成を、和光市市民活動推進課の職員とともにボランティアを行った。
6次産業導入型福祉農園「しらびきファーム」見学	松井ゼミ	R5（2023）3.23（木）	しらびきファーム	・社会福祉法人邑元会「しらびき」が運営する6次産業導入型福祉農園「しらびきファーム」を見学し、いちご狩りを体験。 ・福祉施設と地域社会が今後いかなる関係を築いていけるのか、参加者それぞれが考える契機となった。 ・ここで得た知見は来年度以降の学内でのパンの販売宣伝活動につながった。

その他の地域

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
福島県広野町復興事業ボランティア活動	篠崎ゼミ	①R4(2022) 6.25（土）～ 6.26（日） ②R4(2022) 7.23（土）～ 7.24（日）	福島県広野町	①同町の復興事業について、復興の現状のレクチャーを受け、復興のシンボル事業の現場を視察。 ・「広野町まちなかマルシェ」の案内チラシのポスティング、マルシェへの出店を行った。 ②地域の再生復興シンボルであるオーガニック・コットン栽培地の管理作業を行った。 ・月1回開催の広野マルシェへのボランティアに参加した。
①② 盛岡市との地域交流連携協定に基づく現地調査活動の実施 ③普及啓発活動 ④報告会の参加	篠崎ゼミ	①R4(2022) 8.8（月）～ 8.10（水） ②R4(2022) 9.3（土）～9.5（月） ③R5(2023) 1.24（火） ④R5(2023) 2.13（月）～ 2.15（水）	①②④ 岩手県盛岡市内 ③いわて銀河プラザ	①「もりおか短角牛」のブランド化、販売促進として、9月実施のツアーに向けて、関係者からのヒアリング、意見交換、調整を行った。 ・主な訪問先：観光事業者、地元農家、放牧場管理者、会場提供者、行政 ②「もりおか短角牛」のブランド化、販売促進に向けたモデルツアーの試行。 ・ツアー内容：放牧場の見学、郷土料理等の調理交流会、ツアー参加者全員での交流会を行った。 ③「もりおか短角牛」の首都圏における販売促進活動の可能性を検討するためのPRイベントを実施した。 ④報告会へ参加した。

件　名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
①東伊豆町大学等連携地域活性化事業 ②本事業の現地調査とプレスリリース	塩月ゼミ	①R4(2022) 9.27（火） ～ 9.28（水） ②R5(2023) 1.29（日） ～ 1.30（月）	静岡県東伊豆町	①伊豆町とサッポロビール株式会社との特産品を用いた商品開発に関するコラボレーション企画への参加・協力のため東伊豆町を訪問し、東伊豆町の特産品に関する現地調査を実施した。 ②地元特産品（みかん）を使ったオリジナルカクテルの商品開発に携わった学生が開発者としてプレスリリースの場に立ち会った。 ・観光資源数か所の視察を行った。
①山形県西川町大井沢観光マップ制作プロジェクト ②山形県西川町大井沢観光マップ制作プロジェクト（大井沢現地調査）	土居ゼミ	①R4(2022) 11.7（月） ～ R5（2023） 3.31（金） ②R4(2022) 12.3（土） ～ 12.4（日）	①文京キャンパス（会議・制作作業等）・山形県西川町大井沢（現地取材）遠隔会議システム（zoom利用） ②山形県西川町大井沢（現地取材）	①山形県西川町大井沢との協働事業の取り組み。 ・日常的な連携活動に加え、移住者促進ガイドブックの制作、新規土産品の制作を行ってきた。 ・西川町補助事業「大井沢観光マップ制作」を大井沢区が受託し本ゼミと協働で実施した。 ・基本デザインの提案にあたり、都内の観光案内等を訪問し観光マップデザインの分析を行い、提案した。 ②大井沢区での現地取材を行った。
雛のつるし飾り制作（静岡県東伊豆町企画）参加	東伊豆町地域おこし協力	R4（2022） 12.17（土）	昭和女子大学	・東伊豆町の伝統行事である「雛のつるし飾り」を、東伊豆町の指導グループの人たちの指導のもと制作した。 ・昭和女子大学をはじめ、他大学の学生のとの交流の場ともなった。

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程

第一条　この規程は、跡見学園女子大学学則第一条の二第３項に基づき、地域交流センター年次報告書『ゆかり』（以下、「『ゆかり』」という。）の発行と編集に関する必要な事項を定める。

第二条　『ゆかり』は、原則として毎年一回発行する。ただし、必要な場合には、臨時号や合併号を発行することができる。

第三条　『ゆかり』に成果を発表することができるのは、原則として本学専任教員とする。ただし、以下の者は、地域交流センター長（以下、「センター長」という。）が認める場合には、成果を発表することができる。

一　本学兼任講師

二　本学事務職員（学芸員・司書等）

三　本学に在籍する学生

四　本学の地域交流活動に関与する者

五　地域交流センター運営委員会（以下、「センター運営委員会」という。）での議を経て、センター長が許可する者

第四条　『ゆかり』の編集及び発行については、地域交流センター（以下、センターという。）がこれを行う。

第五条　投稿を希望する者は、センターが指定する期日までに「投稿申込書」に必要な事項を記入の上、届け出るものとする。また、原稿は、センターの指定した期日までに提出することとする。

第六条　原稿を依頼する者へは、センターより「原稿依頼」を送付する。

第七条　投稿原稿は、センター運営員会において審査を行い、採否を決定する。ただし、必要に応じて、投稿原稿の内容に関わる専門家に意見を徴することがある。

第八条　採用原稿が多数にのぼり、全編の掲載が困難な場合には、センター運営委員会が協議し対処する。

第九条　掲載原稿の著作権は執筆者に属し、センターは編集著作権を持つものとする。掲載原稿の複製権及び公衆送信権を含む著作権は、大学が参加するインターネット上の論文公開システムの中で無償公開されることを前提としたうえで、原則として執筆者に帰属する。それぞれの執筆者が学術的寄与のために複製または転用等を行う場合は、これを妨げないものとし、また、センターに許諾を求めることを要しないものとする。ただし、転用等を行う場合は、その内容が『ゆかり』に掲載済である旨を明記しなければならない。

第十条　この規程を実施するに当たり、必要な細則を定めることができる。

第十一条　この規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て、センター長がこれを行う。

附　則　本規程は、令和３年４月1日より施行する。

ゆかり　跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書４

発行日：2023 年3 月31 日
発行者：跡見学園女子大学地域交流センター
〒112-0012　東京都文京区大塚1 丁目5-2
電　話：03-3941-7420
印　刷：セントラル印刷（株）
ＩＳＳＮ：2435-516X

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 4
ゆかり

「ゆかり」巻頭言 ……………………………… 小仲信孝

ウィズコロナにおける対面での地域交流活動の展開
―2022年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の概況― ………………… 土居洋平

特別寄稿　埼玉県和光市 跡見学園女子大学の学生に期待すること …………… 柴﨑光子

特別寄稿　継続こそ力なり！
跡見学園女子大学との取組で学んだ「共感力」を高める町づくりへ …………… 菅野大志

特別寄稿　貴学と岩手県盛岡市との包括的な連携・協力による相互の発展に向けて
―「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」からの「地方創生の実現」へ―
…………………………………… 岩手県盛岡市市長公室企画調整課玉山総合事務所産業振興課

特別寄稿　大塚仲町町会と跡見学園女子大学との合同プロジェクトに参加して … 田中裕之

跡見学園女子大学におけるTJUPの取組みについて
―TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）の
2年目の活動を振り返って（活動報告）― …………………………… 中村英昭

跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について
―コロナ禍3年目の現状分析― ………………………………………… 新垣夢乃

特　集　コロナから「回復」傾向下の地域交流活動 ………………………… 跡見学園女子大学地域交流センター

第3回「文の京書道展」開催報告 ……………………………………… 横田恭三

文京区大塚仲町町会と跡見学園女子大学の合同プロジェクト ………………… 佐野美智子

「武蔵国の19校を通じて埼玉を知る」講座開催報告について ………………… 加美甲多

和光市のTJUP加盟を契機にした連携活動の拡大について …………………… 土居洋平・中村英昭

盛岡市との地域連携に基づく調査・研究活動について …………………… 篠﨑健司

菊坂跡見塾所蔵資料調査報告（3）…………… 秋谷香菜子・新垣夢乃・井田百香
磯田みずき・鬼塚未奈・黒木真悠
小嶋美優・小山凪咲・中井結子
黛沙也加・水村美穂・山岡沙織
山上真由子・渡辺恵未・渡邉菜月

菊坂跡見塾文化財防火デー　避難訓練報告 ….. 水村美穂・山上真由子・渡邉菜月

旧伊勢屋質店パンフレット制作活動
―旧伊勢屋質店パンフレット制作コンペ2022に採用されて― …………… 鬼塚未奈・黛沙也加・小椋光希

メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）〈紹介日順〉

2022年度の地域交流関連活動記録 ……………………………………… 地域交流センター

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程